



東京大学

大学院農学生命
科学研究科
・
農学部

Graduate School of Agricultural and
Life Sciences / Faculty of Agriculture,
The University of Tokyo

概要

2023

Highlights



目次

S
T
U
D
E
N
T
S
C
O
N
T
E
N
T
S

1. 沿革	2
2. 歴代研究科長・学部長一覧	7
3. 組織	8
4. 土地・建物	13
5. 附属施設等	14
6. 教職員	18
7. 学生	19
8. 学部卒業生・大学院修了者	21
9. 教育活動	23
(1) 学部教育	23
(2) 大学院教育	33
10. 社会的活動	43
11. 研究活動	45
12. 国際交流	48
13. 環境安全管理室の活動状況	53
14. 領域横断型教育プログラム	54
15. その他の活動	55
16. 自己点検・評価及び外部評価の実施について	56
17. 予算	57
18. 出版・印刷物・データベース	58
付 農学生命科学研究科・農学部配置図	
附属施設等分布図	

ご 挨拶



農学とは、私たち人類が自然の恵みを利用して生きていくための基盤を開発し発展させる科学です。

国連によれば、人口は20世紀初頭に16.5億だったとされていますが、2022年11月にその数が80億を超えたと発表されました。この人口成長には、食料の大増産と栄養面の改善が大きく貢献しています。食料供給の拡大は、社会の安定と平和をもたらす、産業の振興と経済の成長の必要条件となっています。

近代農学は、20世紀において地球規模でみた無尽蔵な生物資源、天然資源を前提にする増産パラダイム型研究を発展させて、それが驚異的な食料増産を可能にしました。しかしその結果、窒素やリンの世界的な利用を促して過剰に環境中へ蓄積させることになり、温室効果ガスも増やすことになりました。生物資源とは他の生物の生命です。その利用や開発を通じて、都合の

よい植物や動物だけを増やすことになり、生物多様性を脅かしてきたことも明らかになっています。人類が生き延びるための活動とは言え、このように農学は過去に傲慢な一面を有していました。

ところで食料問題は解決した訳でなく、今も人口と食料需要は増え続け、いまだに世界には多くの栄養不良の人々が存在していて楽観できる状況にはありません。しかも20世紀における産業活動の膨張と市民生活の都市化の拡大によって、地球環境の変容が進んでいることから、これら食料問題解決のためにさらなる生物資源の減少、気候変動、生態系悪化につながるような単純な食料増産策は採用できなくなっています。農学における各分野では、このことを認識し持続可能な生産を研究するためのパラダイムシフトに着手しています。

持続可能な生産にとどまらず、せっかく生産された食料をいかに大事に利用するかも問われています。それに答えるため、効果的に栄養摂取を可能とし、食品ロスを削減し、そしておいしさを高めて食事を大いに楽しむことを目指す研究がおこなわれています。最新の農学は食の世界をさらに豊かにしていきます。

人類は生物資源の利活用のために、森林や海洋へ進出し自然界を改変して、農地や牧草地の開拓や漁撈の拡大、養殖場の開発を進めてきました。過度な開発は、もとある自然界に悪影響を与えて感染症の拡大等を引き起こすことになり、その対策が求められています。一方で都市と自然界との境界に存在する農地や森林は、自然の脅威から人々を守る防波堤になっています。そのようなことから、人類はいったん手を加えて創り上げた二次自然としての農地や森林などを適切に管理し続ける責任があります。

生物資源は衣生活や住生活などに係わる食料以外の資材にも利用されてきましたが、20世紀にはそれらの資材の原料は石油を中心とした鉱物資源へとシフトしていきました。その結果、生活の利便性も生産性も大いに向上し、さらには都市社会を発展させる原動力になって、働き方や生活様式のあり方そのものを変革することになりました。それは不可逆的な変化だと思われてきました。しかしここにきてそこには持続可能性の面で深刻な課題のあることが認識され始めていて、その解決のためにバイオマスシフト、生物資源をもとにした社会を新たに構築することが期待されています。

農学では、以上の観点から生物資源のポテンシャルを最大限活用した生産・利用技術の開発に取り組んでいます。この技術開発を通じて、産業と生活のモードチェンジを促し、新しい産業を創出するとともに、農村や田園を通じて自然の恵みを楽しむ豊かな社会づくりに貢献することも目指しています。これらの教育研究活動は、最先端の生命科学、情報科学に裏打ちされた観測技術、計測技術、解析技術を利用しながら日々進化しています。

農学生命科学研究科・農学部では、自然科学から社会科学まで、直接、間接あらゆる立場から生物に係わる様々な分野の専門家が集って、植物、動物、微生物そしてヒトに至るまで、生き物を徹底的に調べ上げ、それらの相互のネットワーク関係を解明し、人類社会の発展に役立つための基礎研究と応用研究を推進する教育研究拠点が形成されています。実験室とフィールドとが連携した研究が行われることも農学の特徴です。演習林や生態調和農学機構、牧場、水産実験所、動物医療センターなど附属施設が最大限に活用されています。

地球上の生物の共生と持続可能な世界の再構築は人類共通の目標です。われわれ農学生命科学研究科・農学部はその課題に取り組み、すべての人々の幸福を実現するため、社会システムの変革を目指していきます。人類にとって最重要課題である食料と環境をめぐる難問を解決して、次世代に明るい未来を手渡していくこと。それが私たちの使命です。

農学生命科学研究科長・農学部長
中嶋 康博

1

沿革

年次	摘要	
1874. 4	明治 7. 4	現在の新宿御苑内に内務省農事修学場創設
1877.10	10.10	農事修学場を農学校と改称
1877.12	10.12	現在の北区西ヶ原に内務省樹木試験場創設
1878. 1	11. 1	農学校、現在の駒場に移転
1880.11	13.11	1月24日農学校開校式、農場開設
1881. 4	14. 4	家畜病院開設
1882. 1	15. 1	農学校、樹木試験場を農商務省へ移管
1882. 5	15. 5	下総種畜場内の変則獣医生徒が農学校に所属
1882.12	15.12	農学校を駒場農学校と改称
1886. 7	19. 7	樹木試験場を東京山林学校と改称
1890. 6	23. 6	駒場農学校と東京山林学校を合併し、東京農林学校となる
1893.11	26.11	東京農林学校を帝国大学に合併し、分科大学として農科大学設置（農学科、林学科及び獣医学科を置き、実施農業に従事する者を養成するためそれぞれの学科に乙科を設ける）
1894.11	27.11	農場設置
1897. 6	30. 6	農芸化学科設置
1898. 5	31. 5	千葉演習林設置
1898. 9	31. 9	勅令第208号により帝国大学を東京帝国大学と改称
1899. 4	32. 4	乙科を廃し、実科を設置
1899.10	32.10	演習林本部設置
1902. 4	35. 4	農業教員養成所開設
1902. 9	35. 9	北海道演習林設置
1909. 3	42. 3	農業教員養成所が農科大学の附属となる
1910. 4	43. 4	台湾演習林、代々木演習林及び府中演習林設置
1912.12	大正 元.12	植物実験圃場設置
1914. 6	3. 6	水産学科設置
1916.12	5.12	朝鮮演習林設置
1919. 2	8. 2	樺太演習林設置
1922. 9	11. 9	秩父演習林設置
1925. 3	14. 3	勅令第13号により東京帝国大学農学部となる
1925. 5	14. 5	愛知演習林設置
1925.11	14.11	農業経済学科及び農学科農業土木学専修設置
1926. 3	15. 3	箱根演習林設置
1929.10	昭和 4.10	富士演習林設置
1935. 4	10. 4	二宮果樹園設置
1935. 5	10. 5	林学科田無苗圃設置
1935. 7	10. 7	農学科農業土木学専修を廃し、農業土木学科を設置
1935. 8	10. 8	実科が独立し、東京高等農林学校となる
1936. 7	11. 7	箱根演習林廃止
1937. 4	12. 4	農学部、本郷区向ヶ丘弥生町に移転
1940. 8	15. 8	農場、北多摩郡田無町に移転
1941. 3	16. 3	水産実験所設置（愛知県知多市新舞子）
1943. 1	18. 1	農業教育養成所が独立し、東京農業教育専門学校となる
1943. 4	18. 4	熱帯林業研究所設置
1943. 9	18. 9	林学科に林業学専修と林産学専修を設ける
1944. 3	19. 3	樹芸研究所設置
1945.10	20.10	植物実験圃場を林学科樹木実験圃場と改称
1946. 4	21. 4	二宮果樹園を二宮農場と改称
1947.10	22.10	農学科畜産学専修設置
		台湾、樺太及び朝鮮演習林、熱帯林業研究所を終戦により廃止
		農学科畜産学専修及び獣医学科を廃し、畜産学科（甲類、乙類）設置
		東京帝国大学を東京大学と改称

年次		摘要
1948. 4	昭和23. 4	農業土木学科を農業工学科と改称
1949. 4	24. 4	牧場設置
1950. 1	25. 1	獣医学科再設置
1951.10	26.10	農学部規則制定
1953. 3	28. 3	東京大学大学院に人文科学・社会科学・数物系・化学系・生物系の5研究科設置
1953. 7	28. 7	牧場および家畜病院官制化
1954. 9	29. 9	園芸実験所開設
1955. 6	30. 6	放射性同位元素施設開設
1956. 1	31. 1	二宮農場を二宮果樹園と改称
1956. 4	31. 4	林学科林業学専修を林学科とし、林学科林産学専修を林産学科としてそれぞれ設置
1957. 4	32. 4	バイオトロン設置
1963. 4	38. 4	田無苗圃を田無試験地と改称
1964. 4	39. 4	農学科を農業生物学科と改称 畜産学科と獣医学科を統合し畜産獣医学科と改称 農業工学科に農業土木学専修と農業機械学専修を設ける
1965. 4	40. 4	東京大学大学院数物系・化学系・生物系の3研究科を医学系・工学系・理学系・農学系・薬学系の5研究科に改組（東京大学大学院農学系研究科設置） 園芸実験所、放射線育種共同利用施設設置
1965. 5	40. 5	大学院農学系研究科規則制定 農学部図書館開館
1970. 3	45. 3	水産実験所が静岡県浜名郡舞阪町に移転
1975. 4	50. 4	園芸実験所を緑地植物実験所と改称
1976. 5	51. 5	生物環境制御システムセンター設置
1977. 4	52. 4	農業生物学科に農業生物学専修と緑地学専修を設ける
1977.10	52.10	農学部図書館は外国雑誌センター館（農学系）に指定
1981. 4	56. 4	大学院農学系研究科畜産学専門課程と獣医学専門課程を統合し畜産獣医学専門課程を設置（修士課程）
1982. 4	57. 4	放射性同位元素施設設置
1983. 4	58. 4	畜産獣医学専門課程（博士課程）を設置
1984. 4	59. 4	獣医学学部教育6年制実施 生物生産工学研究施設設置
1987. 4	62. 4	大学院農学系研究科専門課程制から専攻制へ 大学院農学系研究科に応用生命工学専攻（独立専攻）を設置
1987. 5	62. 5	生物環境制御システムセンター廃止
1988. 4	63. 4	畜産獣医学科を獣医学科と改称
1988. 8	63. 8	600MHz超伝導フーリエ変換核磁気共鳴装置（NMR）設置
1990. 4	平成 2. 4	大学院農学系研究科畜産獣医学専攻を獣医学専攻と改称し、4年制博士課程となる 農業工学科の2専修（農業土木学専修・農業機械学専修）制度を廃止し、農業工学科となる
1990.10	2.10	林産学科に材料科学・住工学専修と森林バイオマス化学専修を設ける
1991. 4	3. 4	大学院農学系研究科に応用動物科学専攻（独立専攻）を設置
1993. 4	5. 4	生物生産工学研究施設を廃し、生物生産工学研究センター（学内共同教育研究施設）設置（10年時限）
1994. 4	6. 4	大学院農学系研究科を大学院農学生命科学研究科に改称 学科を廃止し、課程制へ移行（5課程制） 応用生命化学（農芸化学が改称）、応用生命工学、応用動物科学、獣医学の4専攻の整備
1995. 4	7. 4	生産・環境生物学（農業生物学が改称）、森林科学（林学が改称）、水圏生物科学（水産学が改称）の3専攻の整備 アジア生物資源環境研究センター（学内共同教育研究施設）設置（10年時限）
1996. 4	8. 4	農業・資源経済学（農業経済学が改称）、生物・環境工学（農業工学が改称）、生物材料科学（林産学が改称）の3専攻の整備
1997. 4	9. 4	大学院農学生命科学研究科に農学国際専攻（独立専攻）設置
1998. 6	10. 6	寄付講座「食シグナル・生体統御系間相互作用（明治乳業）」設置（設置期間5年間）
1999. 4	11. 4	農場、演習林、牧場、農学部の事務が合同し、農学系事務部が発足
2000. 3	12. 3	東京大学弥生講堂竣工 創立125周年記念式典を挙行 公用車庫を農学資料館に改修

年次		摘要
2000. 4	平成12. 4	生圏システム学専攻設置 附属施設を学部附属から研究科附属に移行 学系事務室を4総務事務室(8掛)に再編
2001. 1	13. 1	農学部図書館を農学生命科学図書館と改称
2002.10	14.10	寄付研究ユニット「荏原バイオマスリファイナリー(荏原製作所)」設置(設置期間5年間)
2003. 4	15. 4	生物生産工学研究センター(学内共同教育研究施設)設置(時限による転換)
2003. 6	15. 6	寄付講座「食シグナル・生体統御系間相互作用(明治乳業)」設置(時限による転換、設置期間5年間)
2003. 7	15. 7	21世紀COEプログラムに「生物多様性・生態系再生研究拠点」が採択される
2003.10	15.10	生命科学総合研究棟竣工
2003.12	15.12	寄付講座「機能性食品ゲノミクス(ILSI JAPAN)」設置(設置期間5年間)
2004. 4	16. 4	国立大学法人法の規定により「国立大学法人 東京大学」となる 森林科学専攻樹木実験圃場を農学生命科学研究科附属施設の1つに加え、小石川樹木園と改称
2004. 7	16. 7	文部科学省科学技術振興調整費により、アグリバイオインフォマティクス人材養成ユニットを設置(設置期間5年間) 国際学術課を教務課に改称し、総務課総務事務室と併せて教務課(4係)に再編
2005. 4	17. 4	放射線育種共同利用施設を放射線育種場共同利用施設と改称
2005.12	17.12	魅力ある大学院教育イニシアティブプログラム 産学官民連携型農学生命科学研究インキュベータ機構を設置
2006. 4	18. 4	寄付講座「植物医科学(池田理化)」設置(設置期間5年間) 技術基盤センターを農学生命科学研究科附属施設の1つに加えた 農学部教育課程5課程22専修を3課程15専修へ移行 連携講座「エコロジカル・セイフティー学(独立行政法人農業環境技術研究所)」設置(設置期間5年間)
2006.11	18.11	食の安全研究センターを農学生命科学研究科附属施設の1つに加えた
2007. 1	19. 1	家畜病院を動物医療センターと改称 寄付講座「共生社会基盤形成を通じた国土の保全管理(前田建設工業・熊谷組)」設置(設置期間3年間)
2007. 4	19. 4	寄付講座「味覚サイエンス(日清食品)」設置(設置期間5年間) 事務組織を係制からチーム制に移行(附属施設を除く)
2008. 3	20. 3	二宮果樹園閉園
2008. 8	20. 8	弥生講堂アネックス竣工
2008.12	20.12	寄付講座「機能性食品ゲノミクス(ILSI JAPAN)」設置(時限による転換、設置期間5年間)
2009. 7	21. 7	農学生命科学図書館リニューアルオープン
2010. 4	22. 4	生態調和農学機構設置(農場と緑地植物実験所を改組し、演習林田無試験地の教育研究機能を組み入れた) バイオトロンおよび小石川樹木園を技術基盤センターに統合
2010.10	22.10	国際農業開発学コース(IPADS)を設置
2010.12	22.12	フードサイエンス棟竣工
2011. 4	23. 4	寄付講座「木質構造学(JKHD)」設置(設置期間3年間) 寄付講座「植物医科学(池田理化)」の設置期間を5年間から7年間に期間変更 連携講座「エコロジカル・セイフティー学」設置(時限による転換、設置期間5年)
2011. 6	23. 6	演習林の研究部を企画部と教育研究センターに改組 田無試験地を田無演習林に改称 愛知演習林を生態水文学研究所に改称 富士演習林を富士癒しの森研究所に改称
2012. 2	24. 2	生命科学総合研究棟B竣工
2012. 3	24. 3	緑地植物実験所閉所
2012. 4	24. 4	研究科ロゴマーク制定(商標登録2016.4.) 農学部教育課程3課程15専修を3課程14専修へ移行 寄付講座「植物医科学(イオン1%)」の設置期間を7年間から8年間に期間変更 寄付講座「味覚サイエンス(日清食品)」設置(時限による転換、設置期間5年間) 総務課研究支援チーム国際交流担当を教務課留学生チームに移し、国際学務支援チームに再編

年次		摘要
2012.10	平成24.10	寄付講座「微生物潜在機能探索（公益財団法人発酵研究所）」設置（設置期間5年間）
2013. 4	25. 4	技術部を設置
2013.12	25.12	寄付講座「機能性食品ゲノミクス（ILSI JAPAN）」設置（時限による転換、設置期間5年間）
2014. 4	26. 4	寄付講座「木質構造学（JKHD）」設置（時限による転換、設置期間2年間） 寄付講座「植物医科学（ニッポンジーン）」設置（時限による転換、設置期間5年間）
2015. 3	27. 3	弥生キャンパス内に「上野英三郎博士とハチ公の像」建立
2015. 5	27. 5	寄付講座「食と生体機能モデル学（フォーデイズ）」設置（設置期間5年間）
2016. 4	28. 4	社会連携講座「栄養・生命科学（サントリーグローバルイノベーションセンター株式会社）」設置（設置期間5年間） 連携講座「エコロジカル・セイフティー学」設置（時限による転換、設置期間5年）
2016. 8	28. 8	寄付講座「バイオマス・ショア（光友ファシリティーズ）」設置（設置期間3年間）
2016.10	28.10	寄付講座「醸造微生物学（キッコーマン）」設置（設置期間5年間）
2016.11	28.11	社会連携講座「育種ゲノミクス」設置（設置期間5年間）
2017. 2	29. 2	寄付講座「養生訓を科学する医食農連携（共生バンク）」設置（設置期間5年間）
2017. 4	29. 4	放射性同位元素施設をアイソトープ農学教育研究施設に改称 寄付講座「味覚サイエンス（日清食品）」設置（時限による転換、設置期間5年間）
2017. 6	29. 6	社会連携講座「健康栄養機能学」設置（設置期間3年）
2017.10	29.10	寄付講座「微生物潜在酵素（天野エンザイム）」設置（設置期間5年） 連携研究機構「ワンヘルス連携研究機構」設置（設置期間10年）
2018. 2	30. 2	連携研究機構「微生物科学イノベーション連携研究機構」設置（設置期間3年4ヶ月間）
2018. 4	30. 4	寄付講座「バイオマス・ショア（光友ファシリティーズ）」を寄付講座「バイオマス・ショア（三菱ガス化学）」に名称変更 連携研究機構「地域未来社会連携研究機構」設置（設置期間10年間）
2018. 9	30. 9	One Earth Guardians育成機構を設置
2018.12	30.12	連携研究機構「微生物科学イノベーション連携研究機構」の設置期間を3年4ヶ月間から10年間に期間変更
2019. 3	31. 3	寄付講座「バイオマスショア（三菱ガス化学）」の設置期間を3年間から3年8ヶ月間に期間変更
2019. 4	31. 4	連携研究機構「生命倫理連携研究機構」設置（設置期間10年間） 寄付講座「食品機能学」設置（設置期間5年間） 寄付講座「動物疾患データ解析」設置（設置期間3年間） 寄付講座「植物医科学」設置（時限による転換、設置期間5年間）
2019. 9	令和元. 9	寄付講座「持続可能な自然再生科学研究」の設置（設置期間5年間）
2020. 1	2. 1	寄付講座「養生訓を科学する医食農連携（共生バンク）」を寄付講座「養生訓を科学する医食農連携寄付講座（メディカルビアーラ）」に名称変更、設置期間を5年間から5年2ヶ月間に期間変更
2020. 2	2. 2	連携研究機構「知能社会創造研究センター」設置（設置期間10年）
2020. 3	2. 3	寄付講座「食の健康科学（ニッポン）」設置（設置期間3年間） 寄付講座「バイオマス・ショア（三菱ガス化学）」を寄付講座「バイオマス・ショア」に名称変更、設置期間を3年8ヶ月間から4年8ヶ月間に期間変更
2020. 4	2. 4	連携研究機構「海洋アライアンス連携研究機構」設置（設置期間10年） 連携研究機構「高齢社会総合研究機構」設置（設置期間10年）
2020. 5	2. 5	寄付講座「食と生体機能モデル学」設置（時限による転換、設置期間5年間）
2020. 6	2. 6	社会連携講座「健康栄養機能学」設置（時限による転換、設置期間3年間）
2020.12	2.12	連携研究機構「スポーツ先端科学連携研究機構」設置（設置期間9年4ヶ月）
2021. 2	3. 2	連携研究機構「放射線科学連携研究機構」設置（設置期間6年2ヶ月） 連携研究機構「災害・復興知連携研究機構」設置（設置期間10年）
2021. 4	3. 4	連携研究機構「統合ゲノム医科学情報連携研究機構」設置（設置期間10年） 連携研究機構「デジタル空間社会連携研究機構」途中参加（設置期間10年/2020～） 社会連携講座「微生物エコテクノロジー」の設置（設置期間3年間） 社会連携講座「地球規模感染症制御学」の設置（設置期間5年間） 社会連携講座「栄養・生命科学」の設置（時限による転換、設置期間5年間） アジア生物資源環境研究センターが改組し、農学生命科学研究科附属施設となる 生物生産工学研究センターが改組し、アグロバイオテクノロジー研究センターに改称され、農学生命科学研究科附属施設となる

年 次		摘 要
2021. 4	令和 3. 4	演習林の教育研究センターを教育・社会連携センターとフィールドデータ研究センターに改組 寄付講座「微生物膜輸送工学」設置（改組による再編、設置期間5年5ヶ月間／2019～） 寄付講座「微生物代謝工学」設置（改組による再編、設置期間4年間／2020～） 寄付講座「木材利用システム学」設置（改組による再編、設置期間3年6ヶ月／2019～） 連携講座「エコロジカル・セイフティー学」設置（時限による転換、設置期間5年間） 農学系事務部を農学部・農学生命科学研究科事務部に改称
2021.10	3.10	寄付講座「醸造微生物学（キッコーマン）」設置（時限による転換、設置期間4年6ヶ月間）
2021.11	3.11	寄付講座「OSG国際防疫獣医学」設置（設置期間5年間） 寄付講座「フィールドフェノミクス」設置（設置期間3年5ヶ月間）
2021.12	3.12	寄付講座「味覚サイエンス（日清食品）」の設置期間を5年間から6年間に期間変更
2022. 3	4. 3	寄付講座「微生物潜在酵素（天野エンザイム）」の設置期間を5年間から5年6ヶ月間に期間変更
2022. 4	4. 4	寄付講座「食と動物のシステム科学」設置（設置期間3年間）
2022.10	4.10	社会連携講座「免疫生体機能研究」の設置（設置期間3年間）
2023. 3	5. 3	寄付講座「食の健康科学（ニッポン）」の設置（時限による転換、設置期間3年間）
2023. 4	5. 4	寄付講座「木材利用システム学」設置（時限による転換、設置期間3年間） 寄付講座「食と動物のシステム科学」の設置期間を3年間から4年間に期間変更 社会連携講座「シグナルペプチドーム研究」設置（設置期間3年間）

2

歴代研究科長・学部長一覧

氏名	任期
松井直吉 (農科大学長)	1890 (明治23) 6. ~1911 (明治44) 2.
古在由直 (農科大学長)	1911 (// 44) 2. ~1919 (大正 8) 4.
古在由直	1919 (大正 8) 4. ~1920 (// 9) 9.28
川瀬善太郎	1920 (// 9) 9.28~1924 (// 13) 10.16
町田咲吉	1924 (// 13) 10.16~1927 (昭和 2) 10.15
鈴木梅太郎	1927 (昭和 2) 10.15~1928 (// 3) 10.18
岩住良治	1928 (// 3) 10.19~1931 (// 6) 1. 6
麻生慶次郎	1931 (// 6) 1. 6~1933 (// 8) 1. 5
諸戸北郎	1933 (// 8) 1. 6~1934 (// 9) 3.30
高橋偵造	1934 (// 9) 3.31~1936 (// 11) 3.30
佐藤寛次	1936 (// 11) 3.31~1939 (// 14) 3.30
藺部一郎	1939 (// 14) 3.31~1941 (// 16) 3.30
鈴木文助	1941 (// 16) 3.31~1941 (// 16) 11. 7
三浦伊八郎	1941 (// 16) 11. 8~1944 (// 19) 11. 7
田中丑雄	1944 (// 19) 11. 8~1948 (// 23) 11. 7
浅見興七	1948 (// 23) 11. 8~1950 (// 25) 11. 7
吉田正男	1950 (// 25) 11. 8~1952 (// 27) 11. 7
坂口謹一郎	1952 (// 27) 11. 8~1954 (// 29) 11. 7
磯邊秀俊	1954 (// 29) 11. 8~1957 (// 32) 11. 7
住木諭介	1957 (// 32) 11. 8~1960 (// 35) 11. 7
越智勇一	1960 (// 35) 11. 8~1962 (// 37) 11. 7
神谷慶治	1962 (// 37) 11. 8~1965 (// 40) 11. 7
大島泰雄	1965 (// 40) 11. 8~1967 (// 42) 11. 7
畑村又好	1967 (// 42) 11. 8~1968 (// 43) 11. 4
古島敏雄	1968 (// 43) 11. 5~1969 (// 44) 4. 6
篠原泰三	1969 (// 44) 4. 7~1970 (// 45) 2.19
川田信一郎	1970 (// 45) 2.20~1971 (// 46) 3.23
山田浩一	1971 (// 46) 3.24~1971 (// 46) 10.10
松井正直	1971 (// 46) 10.11~1977 (// 52) 10.10
逸見謙三	1977 (// 52) 10.11~1981 (// 56) 3.31
望月公子	1981 (// 56) 4. 1~1984 (// 59) 3.31
鴻巣章二	1984 (// 59) 4. 1~1986 (// 61) 3.31
高橋信孝	1986 (// 61) 4. 1~1989 (平成元) 3.31
和田照男	1989 (平成元) 4. 1~1992 (// 4) 3.31
鈴木昭憲	1992 (// 4) 4. 1~1994 (// 6) 9.30
佐々木恵彦	1994 (// 6) 10. 1~1996 (// 8) 3.31
小林正彦	1996 (// 8) 4. 1~1999 (// 11) 3.31
林良博	1999 (// 11) 4. 1~2003 (// 15) 3.31
會田勝美	2003 (// 15) 4. 1~2007 (// 19) 3.31
生源寺眞一	2007 (// 19) 4. 1~2011 (// 23) 3.31
長澤寛道	2011 (// 23) 4. 1~2013 (// 25) 3.31
古谷研	2013 (// 25) 4. 1~2015 (// 27) 3.31
丹下健	2015 (// 27) 4. 1~2019 (// 31) 3.31
堤伸浩	2019 (// 31) 4. 1~2023 (令和 5) 3.31
中嶋康博	2023 (令和 5) 4. 1~

3

組 織

(1)大学院農学生命科学研究科・農学部

農学部

課 程	専 修
応用生命科学	生命化学・工学 応用生物学 森林生物科学 水圏生物科学 動物生命システム科学 生物素材化学
環境資源科学	緑地環境学 森林環境資源科学 木質構造科学 生物・環境工学 農業・資源経済学 フィールド科学 国際開発農学
獣医学	獣医学

農学生命科学研究科

専 攻	基幹講座／寄付講座／連携講座／協力講座
生産・環境生物学	基幹講座 資源創成生物学、応用生物学領域、基礎生物学領域 寄付講座 植物医科学、フィールドフェノミクス 協力講座 アジア生物資源学、生産生態学
応用生命化学	基幹講座 生物機能化学、生物生産化学、食品科学 寄付講座 食品機能学、食の健康科学 社会連携講座 栄養・生命科学 協力講座 食品安全化学、放射線農学
応用生命工学	基幹講座 生物分子工学、生物機能工学 寄付講座 醸造微生物学、微生物代謝工学、微生物膜輸送工学 社会連携講座 微生物工コテクノロジー、酵母発酵学 協力講座 生物生産工学、生命情報解析
森林科学	基幹講座 森林生命環境科学、森林資源環境科学 協力講座 アジア生物環境学、森林生態圏管理学
水圏生物科学	基幹講座 水圏生物工学、水圏生命科学、水圏生産環境科学 社会連携講座 シグナルペプチドーム研究 協力講座 海洋生物科学
農業・資源経済学	基幹講座 国際食料システム学、農業構造・経営学、開発政策・経済学 協力講座 生態調和経済学
生物・環境工学	基幹講座 生物環境情報工学、地域環境工学、生物システム工学 連携講座 エコロジカル・セイフティー学 協力講座 生態調和工学
生物材料科学	基幹講座 生物素材科学、材料・住科学、バイオマス化学
農学国際	基幹講座 国際動物生産学、国際植物生産学、地球生物環境学、国際開発環境学 社会連携講座 地球規模感染症制御学 協力講座 国際生態系管理
生圏システム学	基幹講座 生物保全学、生圏管理学 連携講座 エコロジカル・セイフティー学 協力講座 生圏関連科学
応用動物科学	基幹講座 高次生体制御学、動物機能科学 協力講座 実験資源動物科学
獣医学	基幹講座 比較動物医科学、病態動物医科学 寄付講座 食と生体機能モデル学、持続可能な自然再生科学研究、OSG 国際防疫獣医学 食と動物のシステム科学 協力講座 疾患モデル学、食品病原微生物学、高度医療科学、応用定量生命科学

領域横断型教育プログラム	アグリバイオインフォマティクス教育研究プログラム、 産学官民連携型農学生命科学研究インキュベータ機構、One Earth Guardians 育成機構
--------------	--

附属施設

生態調和農学機構 演習林 牧場 動物医療センター 水産実験所 アジア生物資源環境研究センター アグロバイオテクノロジー研究センター アイソトープ農学教育研究施設 農学生命科学図書館 放射線育種場共同利用施設 技術基盤センター 食の安全研究センター

農学部・農学生命科学研究科事務部

総務課	総務チーム（総務・広報情報担当 勤務時間・旅費担当） 人事チーム（人事・給与担当） 研究支援チーム（附属施設・研究協力担当 研究者国際交流担当 環境安全担当） 附属生態調和農学機構事務室 附属演習林干葉演習林事務室 附属演習林北海道演習林総務チーム 附属演習林北海道演習林経理チーム 附属演習林秩父演習林事務室 附属演習林生態水文学研究所事務室 附属牧場事務室 附属動物医療センター事務室 附属水産実験所事務室 図書チーム（情報管理担当 情報サービス担当 図書情報担当 雑誌情報担当）
経理課	予算・決算チーム（財務・資産管理担当） 施設整備チーム（施設安全管理担当） 経費執行チーム

教務課	学生支援チーム（学部学生担当 大学院学生担当 学生生活担当） 国際学務支援チーム（留学生担当） 専攻支援チーム
-----	--

(2) 寄付講座一覧

寄付講座とは、個人又は団体の寄附による基金をもって大学の教育研究活動を実施するため、学部及び研究科等の大学院組織に置かれる講座をいう。

寄付講座の名称	植物医科学／Clinical Plant Science
設置期間	2006年（平成18年）4月1日～2014年（平成26年）3月31日更新 2014年（平成26年）4月1日～2019年（平成31年）3月31日更新 2019年（平成31年）4月1日～2024年（令和6年）3月31日5年間
寄付者	株式会社ニッポンジー 株式会社サカタのタネ 日産化学株式会社
担当教員及び職名	特任教授 難波 成任 特任教授 市川 和規 特任教授 渡邊 健 教授（兼務） 山次 康幸 特任助教 宮崎 彰雄 特任助教 北沢 優悟
研究目的	地球上で生産可能な食糧の35%（23億人分）が毎年植物病により失われている。これに対して、「植物病理学」をはじめとする植物保護関連のさまざまな分野がこれまで対策を講じてきた。しかし、気候変動、世界経済のグローバル化、農業生産の大規模化、野菜工場など超集約的農業の展開、さらに園芸愛好家の急増（3,000万人以上）などにより病気の診断・治療・防除・予防の需要は増加の一途である。本講座第1～4期は、複合学術領域「植物医科学」の提唱と展開、学部教育実施と教科書発刊、植物病院の本学開設と連携植物病院の展開、植物医師認定事業開始と植物医師会設立、コミュニティ植物医師養成など基礎から社会実装に至る活動を推進した。第5期では、これらの活動を更に充実し、全国展開とネットワーク充実のほか、新規臨床技術開発や国際貢献などを計画している。
寄付講座の名称	食品機能学／Food Functionality Science
設置期間	2019年（平成31年）4月1日～2024年（令和6年）3月31日5年間
寄付者	食品産業コンソーシアム
担当教員及び職名	特任准教授 岡田 晋治
研究目的	抗メタボに加え、脳認知機能活性化、身体口コモ改善などに効果を持つ“次世代機能性食品”の科学的エビデンスの数々を産学連携型の共同研究によって取得・発信することを目指す本講座は、基礎研究はもとより未病者介入試験に至る一連の応用研究を実施し、先進的な“未病マーカー”の探索・確立を目的に、食の本質を極め、研究・教育・産業の面で新たな社会貢献を果たす。
寄付講座の名称	食と生体機能モデル学／Food and Physiological Models
設置期間	2015年（平成27年）5月1日～2020年（令和2年）4月30日更新 2020年（令和2年）5月1日～2025年（令和7年）4月30日5年間
寄付者	フォーデイズ株式会社
担当教員及び職名	教授（兼務） 堀 正敏 特任准教授 伊藤 公一 特任助教 山中 大介
研究目的	さまざまな食品添加物あるいは飼料添加物の機能的側面を明らかにするためには、その研究に最適化した動物モデルを用いることが必要である。本講座では、種々の食品、食品添加物あるいは飼料添加物の開発に必要な動物モデルの開発とそれら動物モデルを用いた機能解析を行い、食品あるいは飼料添加物開発の基礎研究を実施する。
寄付講座の名称	醸造微生物学（キッコーマン）／Brewing Microbiology
設置期間	2016年（平成28年）10月1日～2021年（令和3年）9月30日更新 2021年（令和3年）10月1日～2026年（令和8年）3月31日4年6ヶ月間
寄付者	キッコーマン株式会社
担当教員及び職名	特任教授 丸山 潤一 特任助教 片山 琢也
研究目的	日本の伝統である醸造技術・発酵技術に不可欠な「醸造微生物」に関する基礎研究を通じて、技術力の向上、研究成果の社会還元、研究者の育成に貢献することを目的とする。
寄付講座の名称	微生物代謝工学／Microbial Metabolomics
設置期間	2016年（平成28年）4月1日～2020年（令和2年）3月31日更新 2020年（令和2年）4月1日～2024年（令和6年）3月31日4年間
寄付者	協和発酵バイオ株式会社
担当教員及び職名	教授（兼務） 西山 真
研究目的	人類や社会の発展に貢献するため、微生物の生命現象や生物機能を分子レベルで理解し、その秘めた能力を最大限に活用することが期待されている。こうした状況を背景として、第I期は、特にタンパク質の翻訳後修飾を介した微生物の環境応答や代謝調節など、応用微生物学でまだあまり手をつけられていない領域に関して強力に研究を推し進めた。第II期は、それでもなお未解明のまま残された生理状態変化に対応する代謝変換の機構を、タンパク質・酵素の構造に立脚した研究を展開することで解明し、応用微生物学研究を飛躍的に発展させることを目指す。

寄付講座の名称	木材利用システム学/Wood Utilization System
設置期間	2016年(平成28年)10月1日~2019年(令和元年)9月30日更新 2019年(令和元年)10月1日~2023年(令和5年)3月31日更新3年6ヶ月間 2023年(令和5年)4月1日~2026年(令和8年)3月31日3年間
寄付者	農林中央金庫
担当教員及び職名	教授(兼務) 井上 雅文 特任教授 永田 信 特任助教 長坂 健司
研究目的	木質資源の有効利用による地球環境貢献が認識され、地域木材の利用拡大への関心が高まっているとともに、自然科学と社会科学の融合による木材の加工・流通・利用に関する新たな研究領域の確立が期待されている。本寄付講座では、木質資源を有効かつ持続的に利用するためのシステム構築を目指して、木材の利用に関する地球環境、地域経済、社会影響評価、マーケティング、政策等の研究を行う。また、研究者およびステークホルダーネットワークの形成を目指すとともに、成果の社会還元にも努める。
寄付講座の名称	持続可能な自然再生科学研究/Environmental Science for Sustainable Development
設置期間	2019年(令和1年)9月1日~2024年(令和6年)8月31日5年間
寄付者	株式会社サンタミネラル
担当教員及び職名	教授(兼務) 堀 正敏 特任教授 杉浦 勝明 特任教授 桐澤 力雄 特任教授 西田 教行
研究目的	SDGsの改善目標を実現するため、室内実験とフィールドワークを行う。水圏環境生物の特性を明らかにし、その理解の上で地球環境の保全を目指す。地上の植物・微生物についても生活環境におけるヒト・動物との関わりを明らかにし、微生物の環境分布制御を通じより良い生活環境の構築を目指す。特に環境における人獣共通感染症病原体の制御や樹病の防除を目指す。
寄付講座の名称	微生物膜輸送工学/Microbial Membrane Transport Engineering
設置期間	2019年(令和元年)10月1日~2024年(令和6年)3月31日5年5ヶ月間
寄付者	公益財団法人 発酵研究所
担当教員及び職名	特任教授 川崎 寿 特任助教 浜本 晋
研究目的	ダボス会議で有名な世界経済フォーラムの2016年注目技術トップ10の一つに「システム代謝工学 Chemicals from renewable sources' microorganisms」が挙げられており、微生物機能を活用した再生可能資源からのものづくりは、世界の政治・経済のリーダーからも認知・期待される持続可能・循環型社会に欠かせない技術である。しかしながら、細胞膜を横切る物質輸送には未解明の部分も多く、これがものづくりのボトルネックとなるケースも多い。細胞膜に存在する膜タンパク質は輸送以外にも重要な機能を担うものが多く、Natureなどのトップジャーナルに掲載される細胞生物学・構造生物学領域の論文は膜タンパク質に関するものも多い。しかし、その機能発揮に必要な周囲の脂質分子との相互作用を含む動的な挙動の理解は遅れている。本寄付研究部門では、革新的な輸送系解析技術の活用並びにコンピューターシミュレーションの支援による輸送タンパク質機能解析および輸送タンパク質間ネットワーク解析に基づく独創的かつ先導的な研究を行い、生物機能を活用したものづくりにイノベーションをもたらすことを通じて持続可能・循環型社会に貢献することを目的とする。
寄付講座の名称	食の健康科学(ニッポン)/Food-related health science
設置期間	2020年(令和2年)3月1日~2023年(令和5年)2月28日更新3年間 2023年(令和5年)3月1日~2026年(令和8年)2月28日3年間
寄付者	日本製粉株式会社
担当教員及び職名	特任准教授 小林 彰子
研究目的	少子高齢化に伴い増加する世界規模での社会問題を食の科学の面から解決することを目指す。健康寿命の延伸に繋がる食品および食品成分の新たなシーズを探索し、構造を明らかにすると共に、生体内での働きを正確に捉える。薬による治療ではない、食による疾病予防や健康維持、QOLの向上に繋がる新規素材を提案すると共に科学的エビデンスを構築する。
寄付講座の名称	OSG 国際防疫獣医学/OSG Veterinary Science for Global Disease Management
設置期間	2021年(令和3年)11月1日~2026年(令和8年)10月31日5年間
寄付者	株式会社OSGコーポレーション、創業者 湯川 剛
担当教員及び職名	教授(兼務) 芳賀 猛 教授(兼務) 猪熊 寿 特任助教 前澤 誠希 特任助教 藤本 悠理
研究目的	アジアでは、畜産の急速な発展と集約化に伴い、動物感染症がまん延し、安全な畜産物の安定供給、畜産の持続可能性を脅かしている。本寄付講座では、アジア諸国との国際連携や国際貢献を視野に、動物の感染症防疫に関する学術研究の発展と獣医学教育の質の向上を通じた人材育成と畜産業の振興を目的とする。獣医学のあらゆる分野を通じて、学術・教育・産業に幅広く貢献する目的で進める。
寄付講座の名称	フィールドフェノミクス/Field Phenomics
設置期間	2021年(令和3年)11月1日~2025年(令和7年)3月31日3年5ヶ月間
寄付者	北海道更別村

担当教員及び職名	特任教授 平藤 雅之 教授(兼務) 岩田 洋佳 准教授(兼務) 郭 威
研究目的	農学研究及びスマート農業において、圃場における作物生育状態や生育環境等の詳細なデータの収集・解析・評価法が重要な基盤技術となる。JST CRESTプロ「農業ビッグデータ」(2015～2021)で、欧米と同様の先進的大規模農業が行われている北海道十勝(更別村)に研究拠点(東大サテライトオフィス)を設置し、フィールドフェノミクス、IoT、AI、ビッグデータ等の先端研究を進めてきた。本寄付講座では、そこでの実績を踏まえるとともに、研究教育を行うキャンパスとして活用し、地元農業者、関連企業等との共同研究を進めやすいという現地での大きなメリットを活かしてフィールドフェノミクスや関連技術のさらなる発展を目指す。また、それらの応用の社会実装を加速するための基盤を現場に寄り添う形で構築する。そのために、地元の農業者、行政、学校との連携も強化する。
寄付講座の名称	食と動物のシステム科学/Food and Animal Systemics
設置期間	2022年(令和4年)4月1日～2026年(令和8年)3月31日4年間
寄付者	株式会社リヴァンプ
担当教員及び職名	准教授(兼務) 村田 幸久 特任講師 小林 幸司
研究目的	過去数十年で急増している人と動物の慢性的な疾患や体調不良を21世紀病と呼び、これにはアレルギーや腸炎、肥満、自閉症などが含まれる。これらの疾患の原因として環境や食を含む生活習慣の変化からくる腸内細菌の減少などが考えられているが、慢性かつ緩徐な病態を評価することは難しく不明な点が多い。本講座は、環境や習慣の何がこれらの疾患を増やしているのかを明らかにするとともに、これらの疾患に対する診断と治療方法の提案を行うことを目的に掲げ、腸内細菌や食の機能に注目した研究を推進する。さらに、これらの病態を明らかにする数理モデルや画像解析モデルのプラットフォーム構築と応用を目指す。

(3)社会連携講座一覧

社会連携講座とは、民間企業又は独立行政法人等から受け入れる共同研究の一環として、学部及び研究科等の教育研究を行う大学院組織等に置かれる講座をいう。

社会連携講座の名称	栄養・生命科学/Nutri・Lifescience
設置期間	2016年(平成28年)4月1日～2021年(令和3年)3月31日更新 2021年(令和3年)4月1日～2026年(令和8年)3月31日5年間
連携機関	サントリーグローバルイノベーションセンター株式会社
教育上の担当分野	応用生命化学専攻：食品生化学
担当教員及び職名	特任教授 佐藤 隆一郎 准教授(兼務) 山内 祥生
研究及び教育目的	運動機能を科学的に究明し、食と運動の機能に精通した人材の育成
社会連携講座の名称	微生物エコテクノロジー/Microbial Ecotechnology
設置期間	2021年(令和3年)4月1日～2024年(令和6年)3月31日3年間
連携機関	ダイキン工業株式会社
教育上の担当分野	応用生命工学専攻、生物材料科学専攻、アグロバイオテクノロジー研究センター
担当教員及び職名	教授(兼務) 大西 康夫 教授(兼務) 野尻 秀昭 教授(兼務) 五十嵐 圭日子 特任准教授 原 啓文 講師(兼務) 砂川 直輝 特任助教 鈴木 研志
研究及び教育目的	環境に負荷をかけない経済活動である「バイオエコノミー」を目指した環境先進技術および材料開発を実現することで、SDGsが目指す社会に貢献する。併せて、社会人教育、大学院教育などにおける当該分野の専門教育にあたる。
社会連携講座の名称	地球規模感染症制御学/Global Infectious Diseases Control Science
設置期間	2021年(令和3年)4月1日～2026年(令和8年)3月31日5年間
連携機関	カルテック株式会社
教育上の担当分野	農学国際専攻
担当教員及び職名	特任教授 間 陽子 教授(兼務) 松本 安喜 特任助教 松浦 遼介 特任助教 永田 文宏
研究及び教育目的	現在、新型コロナウイルスの世界的蔓延は「感染症パニック」という言葉に代表されるように、生命と社会・経済に大きな打撃を与え続けており、その対策は急務となっている。地球規模で深刻化する感染症を克服する方法を確立するために、幅広く共通に有効性を示す光触媒の効果を、農学を基盤とする水産業、農業、林業、畜産業等の現場で検証する。
社会連携講座の名称	免疫生体機能研究/Immunobiology and Biofunctional Research
設置期間	2022年(令和4年)10月1日～2025年(令和7年)9月30日3年間
連携機関	明治ホールディングス株式会社
関連する専攻名	

担当教員及び職名	教授（兼務） 八村 敏志 特任准教授 足立はるよ
研究及び教育目的	医・薬・食の融合領域において、免疫分野を中心に研究を推進し、産学の強みを活かす事で実用化まで見据えた世界最先端の研究知見を創出することで、感染症や老化の予防、免疫疾患の治療につなげ、「健康」の側面からサステナブルな社会の実現に貢献する。また、基礎研究から実用化研究まで幅広い領域に精通し、且つグローバルに活躍できる人材を育成する。
社会連携講座の名称	シグナルペプチドーム研究／Signal Peptidome Research
設置期間	2023年（令和5年）4月1日～2026年（令和8年）3月31日3年間
連携機関	東亜合成株式会社
関連する専攻名	水圏生物科学専攻
担当教員及び職名	教授（兼務） 浅川 修一
研究及び教育目的	シグナルペプチドは、タンパク質分子にある短いペプチド配列で、細胞質内で生合成されたタンパク質の輸送および局在化を指示する機能を有する構造である。本講座において、シグナルペプチドには、タンパク質の輸送・局在化機能以外の未知の機能が存在しているという「シグナルペプチド仮説」を基に、細胞分化誘導機能、細胞増殖制御機能、核小体制御機能等の観点から、シグナルペプチドの未知の機能を解明することを目的とする。

(4)連携講座一覧

連携講座とは、高度な研究水準をもつ民間等の研究所や国立の研究機関の施設・設備と人的資源を活用するため、研究機関等との間で協定を結び、それらの研究員に教授等の委嘱を行い大学院教育に従事させ、また、学生にこれらの研究機関等での研究指導を受けさせることができる講座をいう。

連携講座の名称	エコロジカル・セイフティー学／Ecological Safety
設置期間	2006年（平成18年）4月1日～2011年（平成23年）3月31日更新 2011年（平成23年）4月1日～2016年（平成28年）3月31日更新 2016年（平成28年）4月1日～2021年（令和3年）3月31日更新 2021年（令和3年）4月1日～2026年（令和8年）3月31日5年間
連携機関	国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 農業環境変動研究センター
教育上の担当分野	生物・環境工学専攻：大気環境学、土壌環境学、物質循環学、生態系計測学 生圏システム学専攻：農村緑地生態学
担当教員及び職名	教授 山口 紀子 教授 和穎 朗太 教授 山中 武彦 准教授 小野 圭介
連携目的	東京大学大学院農学生命科学研究科における教育研究の実施に関し、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 農業環境変動研究センターが協力して学生の資質向上とともに学術及び科学の発展に寄与することを目的とする。

(5)連携研究機構

連携研究機構とは、既存の組織の枠を超えた学の融合による新たな学問分野の創造を促進するために設置された、複数の部局等が一定期間連携して研究を行う組織をいう。

本研究科と関連する組織には「感染症連携研究機構」、「微生物科学イノベーション連携研究機構」、「地域未来社会連携研究機構」、「生命倫理連携研究機構」、「知能社会創造研究センター」、「海洋アライアンス連携研究機構」、「高齢社会総合研究機構」、「スポーツ先端科学連携研究機構」、「放射線科学連携研究機構」、「災害・復興知連携研究機構」、「統合ゲノム医科学情報連携研究機構」、「デジタル空間社会連携研究機構」、「エネルギー総合学連携研究機構」、「ワンヘルス・ワンワールド連携研究機構」、「次世代知能科学研究センター」、「構造生命科学連携研究機構」、「VR連携研究機構」、「気候と社会連携研究機構」、「未来戦略LCA連携研究機構」がある。

4

土地・建物

(1)土地

112,834㎡（弥生キャンパス、地震研究所、定量生命科学研究所、グラウンド等を含む）

(2)建物

（2023.4.1現在）

建物名	建築年度	面積（延㎡）	主な使用専攻等
1号館	1926(大正15)	9,747	生産・環境生物学専攻、森林科学専攻、農業・資源経済学専攻、生圏システム学専攻、演習林（企画部、教育・社会連携センター、フィールドデータ研究センター）
2号館	1935(昭和10)	9,382	応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、水圏生物科学専攻、生物材料科学専攻、アイソトープ農学教育研究施設(RI)
2号館別館	1967(昭和42)	2,810	応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、生圏システム学専攻、農学国際専攻、水圏生物科学専攻
3号館	1941(昭和16) 1998(平成10)	12,391	研究科長室、事務部、教授会室、会議室、水圏生物科学専攻、獣医学専攻、生産・環境生物学専攻、森林科学専攻、応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、電子顕微鏡室、産学官民連携室、アイソトープ農学教育研究施設(RI)、アジア生物資源環境研究センター
5号館	1970(昭和45)	1,960	生物材料科学専攻
6号館	1977(昭和52)	1,344	応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、バイオトロン、生物・環境工学専攻
7号館A棟	1993(平成5) 1994(平成6)	8,512	応用動物科学専攻、獣医学専攻、水圏生物科学専攻、生物・環境工学専攻、生物材料科学専攻、農学国際専攻、森林科学専攻、農業・資源経済学専攻、生産・環境生物学専攻、バイオトロン、アジア生物資源環境研究センター、生圏システム学専攻
7号館B棟	1997(平成9)	3,524	
生命科学総合研究棟	2003(平成15)	5,176 (4,366) 計9,542	生産・環境生物学専攻、農学国際専攻、応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、アイソトープ農学教育研究施設(RI)、バイオトロン、(定量生命科学研究所)
生命科学総合研究棟B	2011(平成23)	3,677 (3,278) 計6,955	生産・環境生物学専攻、応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、獣医学専攻（定量生命科学研究所）
アグロバイオテクノロジー研究センター	1985(昭和60)	2,799	アグロバイオテクノロジー研究センター、応用生命工学専攻
農学生命科学図書館	1964(昭和39) 1993(平成5)	4,161	閲覧室、書庫、事務室、会議室、ゼミナール室
動物医療センター	1990(平成2)	3,010	大動物診療施設、小動物診療施設、検査室施設、獣医学専攻、ゼミナール室、事務室
フードサイエンス棟	2010(平成22)	3,577	食の安全研究センター、産学連携等研究室
東別館	1953(昭和28)	446	応用生命化学専攻、NMR装置
環境調整工学実験室	1971(昭和46)	138	生物・環境工学専攻
定量生命科学研究所	1960(昭和35)	1,155 (5,209) 計6,364	農学国際専攻（定量生命科学研究所） 生圏システム学専攻（定量生命科学研究所）
農学資料館	1937(昭和12)	69	
危険物薬品庫	1966(昭和41) 1971(昭和46) 1976(昭和51) 1976(昭和51) 1978(昭和53) 2001(平成13)	91	(全6棟)
核磁気共鳴装置実験室	1988(昭和63)	120	
弥生講堂	1999(平成11)	998	一条ホール、会議室等
弥生講堂アネックス	2008(平成20)	480	セイホクギャラリー、エンゼル研究棟講義室等
その他		778	物置、ポンプ室、蛋白質研究棟、I-REF棟一部使用、その他（3棟）
計		76,345	
圃場温室		338	ガラス温室等
計		338	
合計		76,683	

5

附属施設等

(1) 生態調和農学機構

設置目的:

生態調和農学機構は、農場と緑地植物実験所を統合し、演習林田無試験地（現田無演習林）の教育研究機能を組み入れて、2010年4月1日に誕生した。耕地・緑地・林地からなる田無キャンパスを拠点とし、持続的な生態系サービスと調和する農林業と社会のありかたを解明することをめざして、農学教育研究を進めている。

生態調和農学機構では、教育研究を3つの領域で行う。情報・社会領域では、農林業と社会の関係性を、食品安全、環境保全等の観点から究明する。農林生態系領域では、国土と景観の保全に役立つ生態系管理・評価法を追究する。生物・物質循環領域では、農林業と環境をめぐる生物と物質の挙動を究明する。

こうした教育研究を通して、農林業や農村が今後の持続的社會への移行に果たす役割を明らかにしていく。

所在地:

田無キャンパス（旧農場）：東京都西東京市緑町1-1-1

設置年月:

農学校内農場 1878年（明治11年）1月 多摩農場 1935年（昭和10年）8月
園芸実験所 1954年（昭和29年）4月 生態調和農学機構 2010年（平成22年）4月

土地：田無キャンパス（旧農場）189,343㎡

建物：田無キャンパス（旧農場）8,306㎡

(2) 演習林

設置目的:

演習林は、森林に関する基礎的ならびに応用的試験研究を行うとともに、学生の実習に供することを目的とした研究教育施設である。

1890年東京農林学校が帝国大学と合併して、農科大学が新設され、1894年その附属施設として我が国初の演習林が房総半島の東南部清澄山林に設置された。これが現在の千葉演習林である。

1898年には官制としての演習林長が置かれ、演習林本部が設置された。その後我が国の森林帯あるいは森林の状況に応じて、北海道演習林以下の各地方演習林が順次設置された。

今日では、演習林は、演習林企画部、教育・社会連携センター、フィールドデータ研究センターと7つの地方演習林とによって構成されている。

① 演習林企画部、教育・社会連携センター、フィールドデータ研究センター

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内） 設置年月：1898年（明治31年）9月
建物：農学部1号館内

② 千葉演習林

所在地：千葉県鴨川市天津770 設置年月：1894年（明治27年）11月
土地：21,689,068㎡（借入3,790㎡）☆ 建物：3,327㎡

③ 北海道演習林

所在地：北海道富良野市山部東町9番61号 設置年月：1899年（明治32年）10月
土地：227,137,444㎡（借入30,885㎡）☆ 建物：5,163㎡

④ 秩父演習林

所在地：埼玉県秩父市日野田町1-1-49 設置年月：1916年（大正5年）12月
土地：58,117,472㎡（借入7,436㎡）☆ 建物：2,124㎡

⑤ 田無演習林

所在地：東京都西東京市緑町1-1-1 設置年月：1929年（昭和4年）10月
土地：88,605㎡ 建物：500㎡

⑥ 生態水文学研究所

所在地：愛知県瀬戸市五位塚町11-44 設置年月：1922年（大正11年）9月
土地：12,933,094㎡ 建物：1,935㎡

⑦ 富士癒しの森研究所

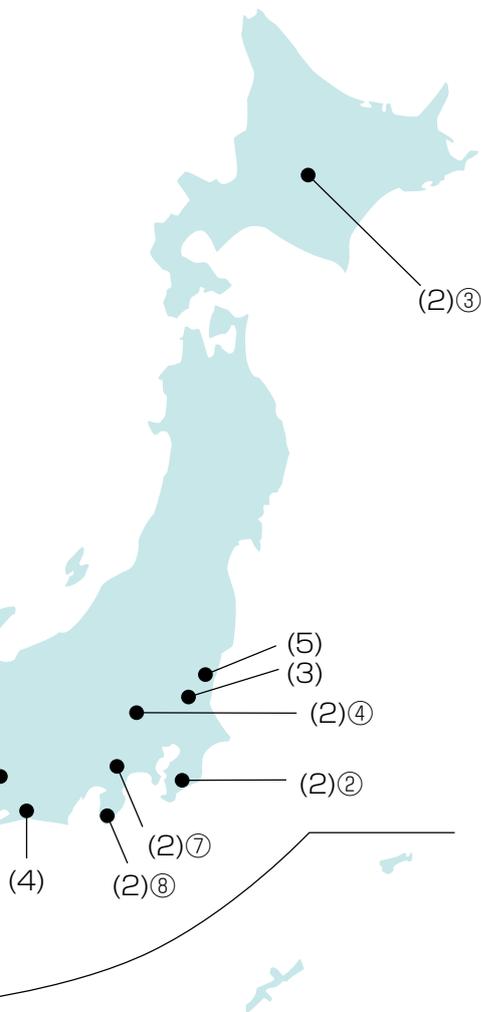
所在地：山梨県南都留郡山中湖村山中341-2 設置年月：1925年（大正14年）11月
土地：78,645㎡（借入331,106㎡）☆ 建物：278㎡

⑧ 樹芸研究所

所在地：静岡県賀茂郡南伊豆町加納457 設置年月：1943年（昭和18年）1月
土地：2,470,219㎡（借入7㎡）☆ 建物：1,871㎡

☆…（ ）内数字は外数である。





(3) 牧場（高等動物教育研究センター）

設置目的：

多くの大型産業動物を飼養・維持して、獣医学専修、動物生命システム科学専修、国際開発農学専修、応用動物科学専攻などの学部及び大学院生に対して実習研修教育にあたり、かつ畜産物の安心安全を保障する人材の育成教育などを通じて市民への食の安全研修にもあたる。加えて、専任教職員と大学院学生にて産業動物科学分野の研究を遂行し、かつ教員と学生による獣医科学、動物科学、医科学分野、全学向け体験活動などの教育と研究のための施設をも提供する。

所在地：茨城県笠間市安居3145

設置年月：1949年（昭和24年）4月

土地：364,882㎡

建物：7,794㎡

家畜飼育頭数：ウマ9 ウシ20 ヤギ83 ブタ35 ニワトリ450

(4) 水産実験所（水圏生物教育研究センター）

設置目的：

農学部学生・大学院学生（水圏生命科学専修・国際開発農学専修・生圏システム学専攻）に対する実習施設の提供、実験所専任教員による水産増養殖に関する研究の遂行、教員・大学院学生による水生生物の生理・生態・病理・生物化学・育種・養魚・魚病・水質環境等の研究のための施設の提供。

所在地：

静岡県浜松市西区舞阪町弁天島2971-4

設置年月：

1936年（昭和11年）7月 愛知県知多市新舞子（当時の知多郡旭村大字日長）に新舞子実験所開設

1937年（昭和12年）12月 愛知県渥美郡渥美町伊川津（当時の渥美郡泉村大字伊川津）に伊川津実験所開設

1970年（昭和45年）3月 現所在地に移転統合

土地：

19,795㎡（借入）

建物：2,683㎡

(5) 放射線育種場共同利用施設

設置目的：

全国大学関係等の業務を処理するための共同利用施設。農林水産省農業生物資源研究所放射線育種場（1960年4月設立）のガンマー圃場及びガンマー温室その他の施設を大学等の研究者も共同利用できるようにすることを目的に設立されたもので、植物の放射線による遺伝、育種等に関する研究施設である。

所在地：

茨城県常陸大宮市上村田2425（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構次世代作物開発研究センター放射線育種場内）

設置年月：1965年（昭和40年）4月

土地：379㎡（借入）

建物：81㎡（39㎡借入）☆

☆…（ ）内数字は外数である。

(6) 小石川樹木園

設置目的：

小石川樹木園は、森林植物学に関する教材を植栽、提供するために、1909年に文京区白山の本学大学院理学系研究科附属植物園の北側0.66haに、樹木実験圃場として設置された。2004年には本研究科附属施設となり、樹木に関する生理学、病理学および遺伝・育種学や、森林昆虫の生態学および生理学等の教育研究と実験材料の提供を行っている。

所在地：

東京都文京区白山3-7-1

設置年月：

1909年（明治42年）3月（当時は、植物実験圃場。2004年（平成16年）4月に小石川樹木園と改称）

土地：

6,600㎡（永久借用）

建物：

65㎡

(7) 弥生地区

・動物医療センター

設置目的：市民に公開している動物診療施設であり、開業獣医師からの紹介症例を診察する二次診療施設として運営している。年間のべ約10,000頭の伴侶動物について、約90名のスタッフ（教職員、研修獣医師、大学院生など）が対応している。これらの診療活動を通じて、学部生に対する臨床獣医学の講義・実習や臨床獣医師の卒後研修を行なっている。さらに、各種疾病についての基礎研究ならびに臨床研究を実施しており、学内外との共同研究も活発に行われている。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）

設置年月：1880年（明治13年）11月

建物：3,091㎡

・アイソトープ農学教育研究施設

設置目的：放射性同位元素関係の教育研究を目的とし、学部内共同利用施設として設置された。年間の利用者数は、1,000人近くにのぼる全学で最も利用されているアイソトープ施設。2017年4月1日より放射線生態学（radioecology）の基盤を支えるため「アイソトープ農学教育研究施設」へ改称し、福島を中心としたフィールドに根ざした教育研究を推進している。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）

設置年月：1955年（昭和30年）6月

建物：生命科学総合研究棟内 997㎡

・技術基盤センター

設置目的：東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部の教育・研究の高度化を専門性の高い技術の面から推進することを目的とする。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）

設置年月：2006年（平成18年）4月1日

主な施設：

・バイオトロン

設置目的：農林生物の実験・研究は季節及び気象要因に左右されるところが大きく、実験の正確さや再現性に欠ける。その欠陥を補い、制御環境下で農林生物の実験を行うための学部内共同利用施設として1957年（昭和32年）に設置された。自然光ガラス温室、人工照明室、小動物飼育室（水棲動植物・昆虫を含む）からなり、温度・湿度・光などを人工的に調節して、四季の環境条件を再現し、また定温度下にて、植物・小動物・昆虫・菌類・水棲動植物の生育・生理・生態・病理・育種学及び分子生物学的実験研究を行うことを目的としている。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）

設置年月：1957年（昭和32年）4月

建物：農学部6号館・7号館内 約500㎡
生命科学総合研究棟内 75㎡

・食の安全研究センター

設置目的：生産段階から製品に至るまでのフードチェーン全体における食の安全の科学的な研究と低リスク食品の開発を行う。食品が媒介する感染症や放射性物質汚染などのリスク評価、それらによる健康被害リスクを低減するための研究、食の安全に関する科学的情報の収集と整理、経済的影響の評価などを様々な専門領域の研究者によって実施する。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）

設置年月：2006年（平成18年）11月1日

建物：フードサイエンス棟内3,577㎡

・アジア生物資源環境研究センター

設置目的：世界各地で起こっている人為による環境劣化や地球規模環境変動に対し、環境修復や生物生産の頑健性の強化、資源利用システムの協創構築などにより、生物資源利用の持続性を確保するための研究を、様々なステークホルダーとの協働により統合的に推進し、国際連携と現地実践による専門人材育成と地域社会への貢献を担うことを目的とする。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）、東京都西東京市緑町1-1-1

設置年月：2021年（令和3年）4月（全学センターのアジア生物資源環境研究センターは1995年4月に設置された）

建物：農学部3号館・7号館B棟内、田無本館内

・アグロバイオテクノロジー研究センター

設置目的：作物生産、環境浄化、微生物利用等の微生物と植物が関わる重要な生命現象を対象に、先進的な基礎農学研究を推進することを目的とする。そのため、研究科内の分野横断的研究の推進や、所有する資産（共通機器）の維持発展と研究科内共同利用を推進する。3つの研究部門（環境保全工学、細胞機能工学、植物機能工学）、7つの連携部門（分子育種学、細胞遺伝学、応用微生物学、生物情報工学、森林化学、酵

母発酵学、微生物エコテクノロジー)、ならびに2つの寄付講座(微生物代謝工学、微生物膜輸送工学)から構成される。全学センターとしての生物生産工学研究センターを改組して2021年4月に発足した。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1(農学部構内)
設置年月：2021年(令和3年)4月1日
建物：アグロバイオテクノロジー研究センター棟内 1,188㎡

・農学生命科学図書館

設置目的：農学生命科学研究科・農学部における教育及び研究活動を支援するため、図書・雑誌を収集・保存し、学生・教職員の利用に供する。1977年度からは農学系外国雑誌センター館に指定され、農学・生命科学分野の外国雑誌の収集と、全国の大学・研究機関ならびに研究者等に対する情報サービスを行っている。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1(農学部構内)
設置年月：1965年(昭和40年)5月
2009年(平成21年)3月 耐震改修工事竣工

建物：建築面積1,151㎡ 建築延べ面積4,161㎡
主要設備：ECCS端末(16台)
閲覧席数：156席
蔵書冊数(含演習林)：465,873冊(和書270,910冊、洋書194,963冊)
図書年間増加冊数：11,898冊(和書3,774冊、洋書8,124冊)
雑誌所蔵タイトル数：13,421種(和雑誌7,899種、洋雑誌5,522種)
継続購入雑誌タイトル数：584種(和雑誌223種、洋雑誌361種)



図書館外観



図書館館内



図書館内ラウンジ



アグロバイオテクノロジー研究センター建物
(写真提供：アグロバイオテクノロジー研究センター)



「問題土壌の環境修復と持続的利用」フィールドセミナー
(カンボジア)
(写真提供：アジア生物資源環境研究センター)

6

教職員

(1)教職員数

(2023.5.1現在)

区分	教授	准教授	講師	助教	計	事務職員	技術職員	計
1研究科・学部	80	82	3	61	226	77		77
2生態調和農学機構	1	3		3	7	4	11	15
3演習林	4	4	6	10	24	18	62	80
4牧場		1			1	2	6	8
5動物医療センター	2				2	5		5
6水産実験所	1			2	3	1	3	4
7技術基盤センター					0		10	10
8アジア生物資源環境研究センター	4	4			8			
9アグロバイオテクノロジー研究センター	3	3		2	8			
合計	95	97	9	78	279	107	92	199

(2)在職教員の出身校(学部卒)

(2023.5.1現在)

大学名		教授			准教授			講師			助教		
		男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計
東京大学	農学部	70	1	71	51	6	57	3		3	30	8	38
	理学部	1		1	3		3			0			0
	工学部	1		1	1		1			0	1		1
	文学部			0		1	1			0			0
帯広畜産大学				0			0	1		1		1	1
北海道大学		2		2	3		3	2		2	3		3
東北大学		2		2	3	1	4			0	1		1
山形大学				0	1		1			0			0
宇都宮大学				0			0			0		1	1
埼玉大学		1		1	1		1			0			0
千葉大学		1		1			0			0			0
横浜国立大学		1		1			0			0			0
信州大学				0	1		1			0			0
筑波大学		1		1	1		1			0	2	1	3
東京工業大学				0	1		1			0			0
東京農工大学		2	1	3	3	1	4			0	3		3
東京海洋大学				0			0			0		1	1
岐阜大学				0	1		1			0			0
静岡大学				0	1		1			0	1		1
名古屋大学		2		2			0			0			0
三重大学		1		1			0			0			0
京都大学		1	1	2	3	1	4	1	1	2	2		2
大阪大学				0		1	1			0	1		0
神戸大学		1		1			0			0	1	1	2
島根大学				0	1		1			0			0
岡山大学				0			0			0	1		1
山口大学				0	1		1			0			0
九州大学		1		1		1	1			0			0
その他		2	2	4	9		9	1		1	14	5	19
合計		90	5	95	85	12	97	8	1	9	60	18	78

7

学 生

(1) 学部学生定員・在籍者数

(2023.5.1現在)

区 分	定員	後期課程								研究生		合 計		特別聴講学生
		3年		4年		5年		6年		小 計		小 計		
		小 計		小 計		小 計		小 計		小 計		小 計		
		男性	女性	男性	女性									
		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)				
応用生命科学課程	152	67		67								134		
		46	21	58	9							104	30	
		(4)		(3)								(7)		
		8		18								26		
		7	1	14	4							21	5	
		(0)		(1)								(1)		
		6		7								13		
6	0	7	0							13	0			
(1)		(0)								(1)				
17		21								38				
14	3	16	5							30	8			
(0)		(0)								(0)				
9		8								17				
6	3	5	3							11	6			
(0)		(1)								(1)				
13		16								29				
8	5	13	3							21	8			
(0)		(0)								(0)				
環境資源科学課程	108	6		6								12		1
		5	1	5	1						10	2		
		(0)		(0)							(0)			
		13		14						1		28		
		8	5	12	2					1	0	21	7	
		(0)		(0)						(0)		(0)		
		8		9						1		18		
6	2	7	2					1	0	14	4			
(0)		(0)						(0)		(0)				
16		15								31				
14	2	12	3							26	5			
(1)		(0)								(1)				
32		39								71				
27	5	35	4							62	9			
(1)		(0)								(1)				
9		11								20				
7	2	11	0							18	2			
(0)		(0)								(0)				
20		23								43				
14	6	16	7							30	13			
(0)		(1)								(1)				
獣医学課程	30	33		30		27		32				122		
		21	12	17	13	19	8	17	15			74	48	
		(1)		(1)		(0)		(0)				(2)		
合 計	290	257		284		27		32		2		602		1
		189	68	228	56	19	8	17	15	2	0	455	147	
		(8)		(7)		(0)		(0)		(0)		(15)		

(2)大学院学生定員・在籍者数

(2023.5.1現在)

専攻名	修士				博士								研究生		合計			
	定員	1年		2年		定員	1年		2年		3年		4年		小計		小計	
		小計	小計	小計	小計		小計	小計	小計	小計	男性	女性	男性	女性	男性	女性		
		男性	女性	男性	女性		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		
生産・環境生物学	28	31		36		13	11		16		18				4		116	
		23	8	23	13		10	1	10	6	13	5			2	2	81	35
		(5)		(9)			(5)		(6)		(8)				(4)		(37)	
応用生命化学	34	56		66		16	16		18		22				5		183	
		32	24	36	30		10	6	9	9	15	7			1	4	103	80
		(7)		(10)			(9)		(8)		(12)				(5)		(51)	
応用生命工学	43	40		38		20	15		9		16				6		124	
		30	10	29	9		9	6	4	5	12	4			1	5	85	39
		(6)		(7)			(11)		(5)		(7)				(6)		(42)	
森林科学	20	15		17		10	7		2		13				7		61	
		11	4	13	4		6	1	1	1	9	4			4	3	44	17
		(2)		(2)			(3)		(2)		(3)				(6)		(18)	
水圏生物科学	30	34		34		15	19		19		23				3		132	
		23	11	28	6		8	11	10	9	14	9			1	2	84	48
		(6)		(5)			(7)		(5)		(14)				(1)		(38)	
農業・資源経済学	17	21		17		8	8		6		11				4		67	
		15	6	12	5		7	1	4	2	9	2			1	3	48	19
		(10)		(4)			(6)		(5)		(7)				(4)		(36)	
生物・環境工学	17	13		17		8	1		2		5				1		39	
		13		14	3			1	2		4	1				1	33	6
		(3)		(3)			(1)		(1)		(3)				(1)		(12)	
生物材料科学	17	24		29		8	12		6		10				3		84	
		19	5	15	14		9	3	5	1	7	3			2	1	57	27
		(2)		(5)			(4)		(2)		(1)				(1)		(15)	
農学国際	43	33		40		19	15		21		21				4		134	
		19	14	23	17		10	5	9	12	13	8			2	2	76	58
		(18)		(18)			(10)		(13)		(13)				(3)		(75)	
生圏システム学	25	22		21		18	7		7		10				2		69	
		14	8	11	10		4	3	2	5	8	2			1	1	40	29
		(4)		(8)			(3)		(3)		(2)				(2)		(22)	
応用動物科学	19	20		17		8	8		3		6				3		57	
		12	8	7	10		1	7	1	2	1	5				3	22	35
		(6)		(3)			(4)		(1)		(1)				(3)		(18)	
獣医学						13	18		13		14		15		5		65	
							9	9	10	3	6	8	10	5	1	4	36	29
							(5)		(2)		(3)		(2)		(5)		(17)	
合計	293	309		332		156	137		122		169		15		47		1131	
		211	98	211	121		83	54	67	55	111	58	10	5	16	31	709	422
		(69)		(74)			(68)		(53)		(74)		(2)		(41)		(381)	

8

学部卒業生・大学院修了者

(1)学部卒業生 24,272人 (2023.5.1現在)

(2)大学院修了者 修士課程 11,485人 博士課程 5,117人

(3)論文提出による学位授与者数 4,720人

(4)卒業・修了後の進路

学部卒業生

区分	卒業生数	就職先等				
		大学院生	官公庁	民間会社	教育機関	その他
2019年度	262	146	9	77	1	29
2020年度	237	130	7	64	2	34
2021年度	263	157	14	63	0	29
2022年度	248	147	7	56	0	38

大学院修了者（博士・満期退学者を含む）

区分	修了生数	就職先等					
		博士課程進学	官公庁	民間会社	教育・研究機関	その他	
2019年度	修士	291	62	12	183	1	33
	博士	100	1	2	50	2	45
2020年度	修士	278	53	17	156	3	49
	博士	99	1	1	20	32	45
2021年度	修士	296	54	14	124	0	104
	博士	127	2	1	21	26	77
2022年度	修士	293	35	6	89	2	161
	博士	114	3	1	38	20	52

(5)主な就職先（2022年度）

学部卒業生

応用生命科学課程

農林水産省、東京都、アクセンチュア株式会社、アビームコンサルティング株式会社、キャノンITソリューションズ株式会社、キューピー株式会社、シンプレクス・ホールディングス株式会社、太陽化学株式会社、西日本電信電話株式会社、株式会社日本政策投資銀行、野村證券株式会社、明治安田生命保険相互会社、株式会社リヴァンプ、他

環境資源科学課程

環境省、秋田県庁、EYストラテジー・アンド・コンサルティング株式会社、アクセンチュア株式会社、アビームコンサルティング株式会社、Amazon Web Service、伊藤忠食料株式会社、NEC通信システム株式会社、株式会社エム・シー・アイ、株式会社Kinger、KPMGコンサルティング、株式会社ゴールド総研、株式会社SHIFT、株式会社情報戦略テクノロジー、株式会社Speee、ソニー株式会社、ソフトバンク株式会社、大和証券株式会社、株式会社TsuZucle、デロイトトーマツコンサルティング合同会社、東京海上日動火災保険株式会社、株式会社日本政策金融公庫、株式会社日本政策投資銀行、日本生命保険相互会社、日本放送協会、農林中央金庫、株式会社博報堂、東日本高速道路株式会社、富士通株式会社、株式会社プロジェクトカンパニー、ベイカレント・コンサルティング、株式会社三井住友銀行、株式会社リソー教育、他

獣医学課程

農林水産省、アステラス製薬株式会社、エキゾチック動物医療センター、協和キリン株式会社、キリンホールディングス、日本中央競馬会、株式会社新日本科学、住友生命保険相互会社、国立大学法人東京大学、株式会社プログレス、三井物産株式会社、株式会社メディサイエンスプランニング、他

大学院修了者 修士

生産・環境生物学専攻

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構、アクセンチュア株式会社、AGC株式会社、クラシエホームプロダクツ販売株式会社、サントリーホールディングス、東京海上日動火災保険株式会社、日本IBM株式会社、日本農業株式会社、日本農業株式会社、ビー・シー・エー株式会社、他

応用生命化学専攻

キーコーヒー株式会社、キリンホールディングス、第一三共株式会社、中外製薬株式会社、日本製鉄株式会社、野村證券株式会社、株式会社明治、株式会社明治、レノボジャパン、他

応用生命工学専攻

国立研究開発法人 科学技術振興機構、iCAD株式会社、アサヒビール株式会社、他

森林科学専攻

国立大学法人東京大学、森トラスト株式会社、他

水圏生物科学専攻

水産庁、岡山県、株式会社 NTT ドコモ、共立製菓株式会社、グローブライド株式会社、株式会社 資生堂、野村総合研究所、ハーゲンダッツ・ジャパン株式会社、富士通 Japan 株式会社、株式会社ブレインパッド、ボストン・コンサルティング・グループ合同会社、森ビル株式会社、株式会社リクルート、他

農業・資源経済学専攻

日本放送協会、マッキンゼー・アンド・カンパニー・インコーポレイテッド・ジャパン、みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社、他

生物・環境工学専攻

アビームコンサルティング株式会社、株式会社エクサ、株式会社クニエ、株式会社小松製作所、株式会社 SHIFT、ジャパン・リニューアブル・エナジー株式会社、シンプレクス株式会社、ソフトバンク株式会社、中部電力ミライズ株式会社、国立大学法人東京大学、有限責任監査法人トーマツ、PwC コンサルティング合同会社、株式会社リクルート、他

生物材料科学専攻

株式会社 i-木構、アクセンチュア株式会社、株式会社アトラエ、株式会社エフエム東京、花王株式会社、株式会社カネカ、清水建設株式会社、シュナイダーエレクトリック株式会社、有限会社匠弘堂、住友ベークライト株式会社、東京産業株式会社、日本レコード・キーピング・ネットワーク株式会社、原田産業株式会社、株式会社ラキール、他

農学国際専攻

国土交通省、独立行政法人国際協力機構、ゴールドマンサックス、デロイトトーマツイノベーションアドバイザリー合同会社、BASF、PwC コンサルティング合同会社、株式会社三菱UFJ銀行、他

生圏システム学専攻

林野庁、消費者庁、日本銀行、住友化学株式会社、テスホールディングス株式会社、株式会社日立システムズパワーサービス、不二総合コンサルタント株式会社、ペインアンドカンパニー、三井住友銀行、楽天グループ株式会社、他

応用動物科学専攻

イーソル株式会社、クラシエホールディングス株式会社、日本農産工業株式会社、株式会社ロッキング・オン、他

大学院修了者 博士（満期退学者を含む）

生産・環境生物学専攻

京都府、国立研究開発法人 情報通信研究機構 未来 ICT 研究所、国立大学法人東京大学、国立研究開発法人理化学研究所、他

応用生命化学専攻

国立大学法人東京大学、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構、第一三共株式会社、ヘルシンキ大学、Rice University、他

応用生命工学専攻

天野エンザイム株式会社、他

森林科学専攻

國學院大學、国立大学法人東京大学、国立大学法人和歌山大学、他

水圏生物科学専攻

株式会社 AGRI SMILE、国立大学法人京都大学、国立大学法人東京大学、港区立みなと科学館、国立研究開発法人水産研究・教育機構、暨南大学、他

農業・資源経済学専攻

東京農業大学、他

生物・環境工学専攻

National University of Singapore、他

生物材料科学専攻

アクセンチュア株式会社、公益財団法人 九州経済調査協会、国立大学法人東京大学、国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所、レゾナック株式会社、他

農学国際専攻

国立環境研究所、恒大産業株式会社、全国共済農業協同組合連合会、株式会社 TOKYO GLOBAL GATEWAY、他

生圏システム学専攻

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所、株式会社 ALBERT、国立大学法人 鹿児島大学、他

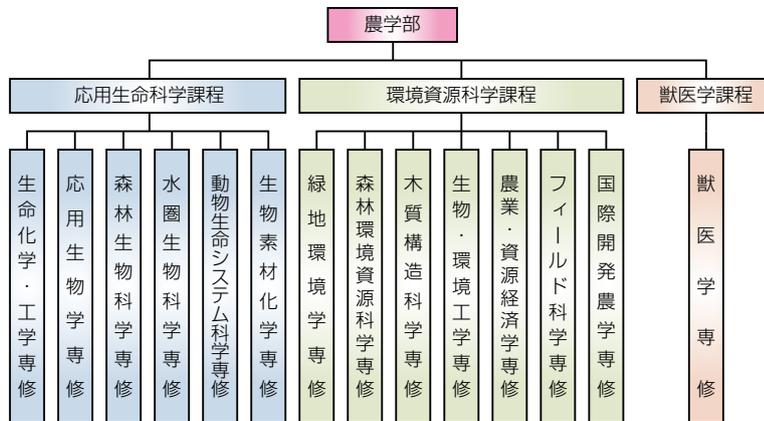
応用動物科学専攻

コンチネンタル・オートモーティブ株式会社、株式会社 REVAMP、他

獣医学専攻

CJ FOODS JAPAN 株式会社、公益財団法人 実験動物中央研究所、第一三共株式会社、中外製薬株式会社、他

(1) 学部教育



① 農学部のめざす教育

人類は人口の増加の一方でエネルギー・食糧資源供給に限界の見える時代を迎え、特に食糧と環境をめぐってさまざまな問題に直面している。農学部は、農学を構成する応用諸科学に関する専門教育を段階的・体系的に行い、食糧・資源・環境等の問題の解決に必要な高度の専門知識と幅広い視野を有し、社会・文化・産業活動を通じて地球社会の要請に応えることのできる洞察力・実践力・指導力を備えた人材を育成する。

② 課程・専修制

農学部では平成6年度にそれまでの学科制を廃止し、5課程19専修からなる課程・専修制を導入した。この制度は学生のカリキュラム選択に自由度を確保するとともに、段階的・体系的に専門性を高めていく方式によって、高度化する農学教育の要請に応えることをねらいとしている。現代の農学は専門領域への分化が進み、新しい専門領域も生まれているが、理想的な学部教育を実現するため、過度な細分化はせずに、現在は3課程14専修で運営されている。

課程・専修制では、学生は学部・課程・専修という三層の構造のもとで学習し、進学内定後の2A1、2A2には全ての農学部生に開かれた農学総合科目と、農学分野の基礎を学ぶ農学基礎科目を中心に履修することになる。農学総合科目は広い視野から問題関心の醸成をはかるオムニバス形式の講義であり、農学部独特のカリキュラムとなっている。本郷に進学後は課程専門科目、農学共通科目および専修専門科目を学ぶことになる。課程専門科目は専門性が格段に高まる点で農学基礎科目とは異なっている。農学共通科目では専門家としての倫理と安全管理を学ぶ。専修専門科目は実験・実習・演習科目で、基本的に必修となっている。4年次には、研究室に所属して卒業研究に取り組むことになる。

カリキュラムの内容は、平成27年度から4ターム制への移行に併せて、様々な見直しを行った。農学の基礎から応用までを段階的に広く深く学べるように科目区分の改訂を行った。平成28年度進学者から適用された新カリキュラムにおいては卒業に要する単位数を、6年制の獣医学専修(144単位)を除き84単位から76単位に削減したことにより、予習復習を行う時間を確保させて、自発的な学びの深化を促すこととした。農学部では、SPタームやWタームでのカリキュラムに独自の工夫を凝らしている。これによって、専門的な実験・実習に一定期間集中的に取り組めたり、海外のサマープログラムへの積極的な参加が可能になったりするなど、学生に効果的な学修の機会を提供できるようになった。また、すべての専修の学生が必修科目として農学リテラシーを学ぶことになっており、それに加えて専門分野にあわせた安全・倫理面の講義を受講している。これらカリキュラム変更や教員の授業の改善では、学生による授業評価を積極的に活用している。

③ フィールド科学の教育

農学部では授業に占める演習、実験、実習等の割合がもともと高いが、特にフィールドワーク(野外実習)を重視しており、これが他学部にはみられない特色となっている。生態調和農学機構、演習林、水産実験所、牧場などの附属施設のみならず、学外の様々な施設と提携して、実践的な演習の充実を図っている。一部の専修では海外における実習も行っており、グローバルな視野に立つ人材育成をめざしている。

(a)農学部での授業科目名

農学総合科目			
人口と食糧	生態系の中の人類	土壌圏の科学	水の環境科学
環境と景観の生物学	生物の多様性と進化	環境と生物の情報科学	化合物の多様性と生理機能 I
化合物の多様性と生理機能 II	バイオマス利用学概論	森林資源と木材利用	食の安全科学
放射線環境学			
農学基礎科目			
基礎有機化学	基礎分析化学	基礎微生物学	分子生物学
基礎生物化学	生物統計学	植物生理学	細胞生物学
遺伝学	植物分類・形態学	昆虫学	動物生態学
森林環境科学汎論	集団遺伝学	動物分類学	植物生態学
木質構造科学概論	流れ学	情報工学	基礎高分子化学
基礎物理化学	農業資源経済学汎論	農業史概論	ミクロ経済学
動物生理学	応用動物科学概論		
農学共通科目			
農学リテラシー	環境倫理	生命倫理	技術倫理
農学展開科目			
食と人間	食と健康システム演習	バイオマス利用研究特論	生物配列解析基礎
ゲノム情報解析基礎	バイオスタティスティクス基礎論	構造バイオインフォマティクス基礎	フードクリエーションサイエンス
フロンティアライフサイエンス	生態統計学	サイエンスコミュニケーション	サイエンスコミュニケーション演習
自然再生事業モニタリング実習	農学現象の数理科学的理解	ワン・アーソロジー I	ワン・アーソロジー II
ワン・アーソロジー III	Basics for Science Communication in English		
課程専門科目		応用生命科学課程専門科目	
農芸化学概論 I	農芸化学概論 II	分析化学	生物無機化学
環境土壌学	土壌生態学	植物栄養学	植物分子生理学
有機化学	生物制御化学	生物有機化学	微生物生理学
細胞微生物学	微生物遺伝学	応用微生物学	微生物生態学
生物情報科学 I	生物情報科学 II	タンパク質・酵素学 I	タンパク質・酵素学 II
生物化学	動物細胞生物学	栄養化学	食品化学
食品生化学	食品・生物機能化学	環境科学	天然物有機化学
発酵工学	食品微生物学	食品生物構造学	植物機能制御学
食品免疫・腸管機能学	栽培植物学	植物病理学	耕地生態学
作物学 I	昆虫遺伝学	植物育種学	バイオメトリックス
園芸学 I	持続的植物生産学	雑草学	園芸学 II
植物分子育種学	作物学 II	昆虫生理学	昆虫系統分類学
環境微生物学	植物分子遺伝学	ストレス生物学	保全生態学
昆虫病理学	栽培学	昆虫利用学	植物ウイルス学
菌類学	植物細菌学	昆虫生態学	農業気象学
造林学	森林植物学	森林動物学	森林土壌学
森林遺伝育種学	森林生態生理学	森林生態学	樹木学
樹木医学	野生動物管理論	森林水文学	自然保護論
アジア生物環境学	森林生態圏管理学	自然環境学汎論	生物環境物理学
森林風景計画学	森林経理学	森林政策学	森林利用学
水生動物学	水圏環境科学	水生生物化学	水生動物生理学
水圏生物工学	水圏天然物化学	魚類発生学	魚類遺伝育種学
浮遊生物学	水産食品科学	水生植物学	水生動物栄養学

漁業学	生物海洋学	水産資源学	水産増養殖学
海洋生態学	魚病学概論	応用遺伝学	応用免疫学
動物細胞制御学	動物細胞生化学Ⅰ	動物細胞生化学Ⅱ	動物行動学
動物生命システム科学Ⅰ	動物生命システム科学Ⅱ	組織学	発生学
神経生理学	内分泌・代謝生理学	体液生理学	環境衛生学
薬理学総論	実験動物学	臨床栄養学総論	臨床栄養学各論
生物多様性科学	生殖生物学	動物生命科学基礎	放射線動物科学
生物素材化学概論	森林生物化学	植物バイオマス化学	バイオマス生物工学
木材化学	高分子材料学Ⅰ	高分子材料学Ⅱ	生体物理工学
生物材料組織学	セルロース科学	有機反応機構	バイオマスエネルギー工学
界面科学	木材物理学	材料強度学	木質材料学Ⅰ

課程専門科目

環境資源科学課程専門科目

ランドスケープエコロジー	自然共生社会論	園芸学Ⅰ	耕地生態学
森林風景計画学	森林植物学	樹木学	森園管理学
保全生態学	緑地計画学	生態工学	都市農村計画学
ストレス生物学	森林生態学	自然環境学汎論	自然保護論
森林リモートセンシング	農村計画学	生物多様性科学	リモートセンシング情報解析学
森林生態圏管理学	アジア生物環境学	景観解析	沿岸環境動態論
昆虫生態学	農業気象学	持続的植物生産学	雑草学
レクリエーション計画論	森林社会学	国際農業プロジェクト論	生物環境物理学
森林経理学	森林政策学	森林利用学	森林土壌学
森林遺伝育種学	森林水文学	砂防工学	森林資源経済学
国際森林学	森林土木学	森林生産工学	森林計測学
造林学	森林動物学	森林環境経済学	生物海洋学
水産資源学	構造力学	木材物理学	材料強度学
生物材料組織学	木質材料学Ⅰ	木質材料学Ⅱ	木質構造学
住宅計画論	高分子材料学Ⅰ	高分子材料学Ⅱ	建築住環境学
バイオメトリックス	木材化学	建築設計製図Ⅰ	建築設計製図Ⅱ
建築法規	建築生産施工	生物素材化学概論	生体物理工学
土壌物理学	ポストハーベスト工学	制御工学	農地環境工学
水利環境工学	環境地水学	生物環境工学	生物機械工学
測量学	水理学	水文学	水工システム学
土質力学	農業基盤計画学	生体計測情報学	生物環境情報工学
水処理工学	植物環境システム学	バイオマスエネルギー工学	材料力学
農業IoT概論	生物プロセス工学	生物環境要素学	生物・環境熱力学
農業経営概論	ゲーム理論基礎	農業経済学	マクロ経済学
農政学	農業史	農業経営学	政治経済学
数量経済分析	比較農業政策論	開発経済学	フードシステム論
農村開発経済学	応用数量経済分析	国際農業経済論	比較農業法
農村社会学	地域農業マネジメント	協同組合論	地域社会概論
海外農業研究	国際農業生態学	国際森林環境学	国際植物利用学
国際水産開発学	国際農業工学	国際動物資源科学	環境経済学
環境生物化学	国際地域農業開発と生産者組織	国際開発実践論	

課程専門科目	獣医学課程		
組織学	発生学	獣医解剖学	神経生理学
内分泌・代謝生理学	体液生理学	環境衛生学	薬理学総論
細胞情報薬理学	薬理学各論	動物細胞生化学 I	動物細胞生化学 II
細菌学	ウイルス学	実験動物学	応用遺伝学
応用免疫学	動物行動学	臨床栄養学総論	臨床栄養学各論
食品衛生学	寄生虫学	動物感染症学	病理学総論
毒性学	人獣共通感染症学	公衆衛生学総論	獣医衛生学
生殖生物学	獣医魚病学	内科学総論	呼吸器病学
循環器病学	消化器病学	肝臓病・膵臓病学	泌尿器病学
内分泌病学	臨床病理学	獣医事法規	外科学・手術学総論
眼科学	麻酔・鎮痛学	画像診断学	臨床繁殖学
家禽疾病学	病理学各論	外科消化器病学	外科泌尿生殖器病学
外科呼吸器循環器病学	臨床腫瘍学	獣医疫学	神経内科学
血液病学	皮膚病学	運動器病学	神経外科学
馬臨床学	産業動物臨床学 I	産業動物臨床学 II	産業動物臨床学 III
臨床薬理学	臨床行動学	野生動物学	科学プレゼンテーション
獣医倫理・動物福祉学	放射線生物学		

専修専門科目	応用生命科学課程		
生命化学・工学専修			
応用物理工学実験	応用環境科学実験	応用微生物学実験	応用生物化学実験
生命化学・工学実習			
応用生物学専修			
応用生物学基礎実験 I	応用生物学基礎実験 II	フィールド農学基礎実習	フィールド農学応用実習
フィールド農学集中実習	応用生物学専門実験	応用生物学研究演習	
森林生物科学専修			
森林科学基礎実習 I	森林科学基礎実習 II	森林科学基礎実習 III	森林科学基礎実習 IV
森林生物科学実験	森林風景計画実習	森林政策学演習	森林利用学実習
森林科学総合実習	森林経営学実習	森林土壌学実験	
水圏生物科学専修			
水圏生物科学実験 I	水圏生物科学実験 II	水圏生物科学実験 III	水圏生物科学実験 IV
水圏生物科学実習	漁業学実習	水産実習	
動物生命システム科学専修			
動物生命システム科学実習 I	動物生命システム科学実習 II	動物生命システム科学実習 III	動物生命・形態学実習
動物生命・牧場実習	動物生命システム科学実習 IV	動物生命システム科学実習 V	動物生命システム科学実習 VI
動物生命システム科学演習			
生物素材化学専修			
生物材料生物学実験	生物材料化学実験	生物材料物理学実験	生物素材化学実験 I
生物素材化学実験 II	バイオマス科学実習	生物素材化学実習	生物素材化学演習
専修専門科目			
環境資源科学課程			
緑地環境学専修			
緑地デザイン実習	ランドスケープエコロジー実習	緑地環境実地実習	保全生態学実習
応用生物学基礎実験 I	緑地環境学研究演習		

森林環境資源科学専修

森林科学基礎実習Ⅰ	森林科学基礎実習Ⅱ	森林科学基礎実習Ⅲ	森林科学基礎実習Ⅳ
森林生物科学実験	森林風景計画実習	森林政策学演習	森林利用学実習
森林科学総合実習	森林経営学実習	森林土壌学実験	

木質構造科学専修

生物材料生物学実験	木質構造科学実験	生物材料物理学実験	生物材料化学実験
森林科学実習	木質構造科学実習	建築設計製図Ⅲ	建築設計製図演習Ⅰ
建築設計製図演習Ⅱ	木質構造科学演習		

生物・環境工学専修

応用解析および演習Ⅰ	生物・環境工学実験Ⅰ	生物・環境工学実験Ⅱ	生物・環境工学実験Ⅲ
応用解析および演習Ⅱ	情報処理演習	水理学演習	生物環境工学演習
測量・空間情報解析実習	機械設計及び製図	生物・環境工学フィールドワーク	生物・環境工学実習

農業・資源経済学専修

農村調査概論	農業・資源経済学演習Ⅰ	農業・資源経済学演習Ⅱ	農業・資源経済学演習Ⅲ
農作業実習	地域経済フィールドワーク実習	農業・資源経済学研究演習	

フィールド科学専修

生物多様性科学実習	保全生態学実習	ランドスケープエコロジー実習	森圏管理学実習
沿岸生態学実習	森林科学総合実習	フィールド科学演習	

国際開発農学専修

国際農学情報処理演習	農場実習	森林実習	臨海実習
牧場実習	英語表現法	国際農学実験・実習Ⅰ	国際農学実験・実習Ⅱ
海外実習	ISAD Food Resources	ISAD Economics	ISAD Environmental Science
国際開発農学概論			

専修専門科目

獣医学課程

獣医学専修

組織学実習	解剖学実習	生体機能学実習	細菌学実習
食品衛生学実習	ウイルス学・免疫学実習	実験動物学実習	獣医学基礎実習
獣医公衆衛生学実習	寄生虫学実習	病理学実習	基礎臨床学実習Ⅰ
動物衛生学実習	基礎臨床学実習Ⅱ	毒性学実習	基礎臨床学実習Ⅲ
大動物臨床・臨床繁殖実習	総合臨床学インターンシップ	応用獣医学インターンシップ	小動物内科臨床実習
小動物外科臨床実習			

(b)教養学部での授業科目名 (2023年度開講)

総合科目D (人間・環境)

環境と生物資源～生物多様性と保全～	水と土の環境科学～食を支える水と土の環境科学～
食糧と環境～海洋生物資源の利用と特性～、～農業生産学概論～	放射線環境科学～放射線農業影響学～
森林環境資源学～森の成長、森と水、森と癒し～	住環境の科学～人と木と木造建築～

総合科目E (物質・生命)

微生物の科学～微生物のバイオテクノロジー～、～微生物の世界～	食の科学～食の科学～
アグリバイオロジー～植物の機能とその利用～	海の生命科学～海の生命科学～
植物医科学～植物医科学概論～	天然物の科学～生命を支える生理活性物質～
応用動物科学Ⅰ～動物生命科学へのいざない～	生物素材の科学～バイオマスの科学～
応用動物科学Ⅱ～高等動物の比較生物学：獣医学へのいざない～	森の生物学～共存する森林生物～

全学自由研究ゼミナール

農作物を知る	植物栄養学入門：植物の栄養吸収のしくみと食糧生産	ワンパクなタンパク質を科学する：実習編
動物細胞研究法入門	伊豆に学ぶプラス	日本は林業を放棄してよいのか
地球医のすすめ：タネ蒔く農学部有志	獣害問題とは何の問題か	
環境浄化・保全の微生物学	Agric Scientists Studio Interview	
農学・微生物研究フロンティア	古典落語で知る江戸の自然・文化	

全学体験ゼミナール

房総の常緑樹林で森林動態を学ぶ	森に学ぶ	森の魅力をマッピング～GPSを使ったオリジナル地図づくり～
危険生物の知識（春編、秋編）	伊豆に学ぶ	人の手で作り管理する森林
体験して考える森林ガイドボランティアの現在と未来	家畜の多様な役割	
徹底検証・スギ&ヒノキ～もっと知ろう、木材のこと～	海の生命科学入門	
春の奥秩父を巡る、秋の奥秩父を巡る	房総の森と生業（なりわい）を学ぶ	
東大の別荘「癒しの森」で心も体もリフレッシュ	雪の森林に学ぶ～北海道演習林	

初年次ゼミ

農業・水産業へのエネルギー投入の実態を知る
植物研究入門—生態系からゲノム編集まで—
生体系シミュレーション
農業と非農業部門との関連を探る—産業連関分析入門—
森林が吸収したCO2を温室効果ガスクレジットとして活用することを考える
農山村の振興や森林資源の管理を考える
生物の生き様を支える遺伝子/タンパク質
「食の問題」を科学者目線で考えよう
感染症と病原体から考える　きれい？汚い？安全？危険？
農林水産資源の持続的利用を考える
木質バイオマスの利用の意義と方法について考える
私たちの身近にあるワンパクなタンパク質を科学する

(c)キーワードから見た農学部の教育・研究の取り組み
(1)持続可能な循環型社会の構築＝農学



私たち人間は、産業革命や技術革新を通して生活の質の向上を目指してきた。実際に生活は便利になり、人類は人口の増加を伴って発展してきたが、それに伴い、資源や食料問題、地球温暖化や異常気象などの環境問題、生活習慣病や感染症など、様々な問題が生じている。これら、個人レベルから地球レベルまで幅広い問題の多くは人類の営みによってつくられているわけだが、これらの負担を未来の世代に背負わせるのか？

農学とは、今後長きにわたり持続可能な循環型社会を構築する学問である。そこには、宇宙船地球号という考えのもと、我々人類だけではなく自然との調和・共生を通して、我々の衣食住に関する問題解決や質の向上を目指すという思いがある。つまり、地球のものを『使う』だけではなく、地球を『育てる』ことが農学の使命だと考える。

ここでは、持続可能な循環型社会を構築する上で直面する諸問題を解決する農学部の取り組みについて、環境、食と健康、そして生物資源という3つの分野を紹介する。同じキーワードの中でも各専修で特色のある取り組みがあり、そしてこれら3つの分野がお互いに強く結びついていることが分かる。

(2) キーワード「環境」

農学部の「環境」＝自然や社会との共生を目指す

新たな国際協力・農業開発

- 持続的な農業・環境・資源利用技術を開発する
- 現地の人々の本質的ニーズをとらえる
- 異なる学問分野を学び俯瞰的な考え方を身につける
- 実践と観察から生きた知識を得る
- 学問と政策と実践をつなぐ総合力と創造力を養う



節水灌漑の水田調査 (インドネシア)



サンプリング方法の創意工夫中 (農場実習)

食料生産のための環境を守る

- 70億の人口を養う環境
- 安全・安心の食は環境から
- 環境を救う「植物力」
- 福島の農業を放射能から守る
- 海外に広がる数多くの研究フィールド
- 遺伝子、ゲノムから生態系まで多彩なアプローチ



アルカリ土壌地帯の植生回復 (中国)



水田の放射性セシウム調査 (福島)

森林の環境を知り、森林を守り育てる

- 森林の有する多様な機能
CO₂吸収、水源かん養、土砂災害防止、快適環境の形成、生物多様性の保全など
- 森林の荒廃や消失
人間活動の拡大、自然災害、病虫獣害など
- 森林を総合的に理解し、森林の保全、育成、持続的な利用に活かす



高さ90mのクレーンで観測を行い、熱帯林の多様な機能を解明する



太さ50μmの電極を根に挿入して、樹木のストレス耐性を解明する

海洋環境・生態系と人類の共存

- 海洋：生命誕生の場
多種多様な生物と生態系
地球最後のフロンティア
- 水圏における生物生産と物質循環過程の解明
- 水圏生態系の保全と利用
生態系サービスの享受
自然と人間のつき合い方
- 持続可能性の追求
地球の有限性と環境収容力
水産資源管理、生態系管理
- 地球的な視野をもって活躍できる人材の育成



学術研究船「白鳳丸」による調査航海



臨海実習での定置網揚げ



ウナギの卵とレブセファルス幼生

健全でうるおいのある「みどり」を育む

- 地球環境とみどり
グローバルな環境問題によって危機的な状況に瀕している「みどり」の再生と持続的利用が必要
- 成熟社会とみどり
人口減少や高齢化など社会構造の転換に対応した、人と「みどり」の新たな関係づくりが必要
- 持続型社会とみどり
人間活動と自然環境の調和した「みどり」豊かな社会の実現には、グローバル・ローカルの視点が必要



アマゾンの農地開発



砂漠化した土地の緑化



生きがいの場としてのみどり



教育の場としてのみどり



都市に再生した森



海を渡る黄砂

人と自然が調和した緑地環境＝「ランドスケープ」を目指して！

農学と工学を融合し、環境を科学する

- 生物と環境を**はかり解析**する
・ミクロスケール（細胞、土粒子）からマクロスケール（地域、地球規模）まで
- 食と環境を**科学し応用**する
・物質循環、持続可能な農業
・ポストハーベスト、食の安全・安心
・農業ロボット、精密農業、植物工場
- 地域環境を**考え地域をデザイン**する
・農業、農地の多面的機能
・グリーンイノベーション

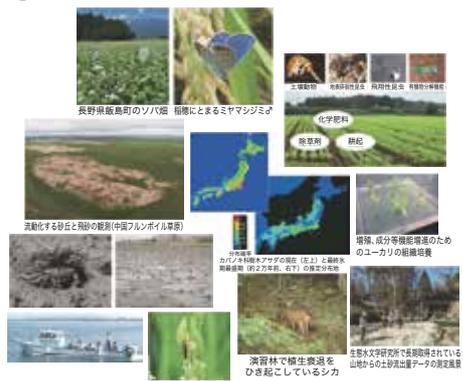


水田圃場へのICT機器の設置



畑地からのCO₂ガス放出に関する調査

生態系・生物多様性の保全と自然共生社会の実現を目指して



自然の中で科学する
フィールド科学への招待

長野県飯島町のソバ畑 船橋にとまるミヤマシジミ

化学肥料 緑肥

移動化する砂丘と飛砂の観測(中国フロンティア)

カワノキ樹皮をアザケの皮(左)と樹皮(右)を比較する実験(約20年前、右)の歴史を辿る

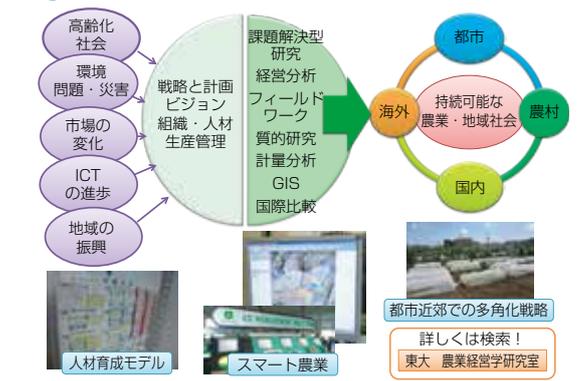
雪解、成分等機能増進のためのユーカリの組織培養

演習林で植生衰退をひき起こしているシカ

福島米被害をもたらすアサカシカスミカ

生態学研究所で実験されている山からの土壌流出データの実証実験

フィールドワークから、農業や地域の課題解決策を描き出す研究室です



高齡化社会
環境問題・災害
市場の変化
ICTの進歩
地域の振興

戦略と計画
ビジョン
組織・人材
生産管理

課題解決型
研究
経営分析
フィールドワーク
質的研究
計量分析
GIS
国際比較

都市
海外
持続可能な農業・地域社会
国内
農村

都市近郊での多角化戦略

詳しくは検索！
東大 農業経営学研究室

人材育成モデル
スマート農業

(3) キーワード「食・健康」

農学部の「食・健康」＝地球の未来を救う第一歩

農学から見た「食・健康」

- 「生産」から「消費」まで
- 食糧資源の確保
- いかに「作る」か
いかに「食べる」か
- おいしく食べて健康に
「健康寿命延伸」
- 食を通じた「グローバルスタンダード」。

食べものに関する多様な分野
畜種・ゲノム編集 生産技術 国産農林水産物
生産拡大 健康長寿社会
健康寿命延伸 社会貢献
食事メニューの提案 商品開発 加工・流通

食料生産の新展開

- 食料生産の鍵は、
①作物の収量の向上
②病害虫の最適制御
- ゲノム情報の利用による生理的機能の改良
- 作物の遺伝的特徴と環境との関係の解明
- 広がる海外での研究展開

作物の病気や害虫を制圧する
作物そのものの生産力を高める

水産資源の利活用

- 動物性タンパク質源としての水産物
世界で15%、後発国では50%以上
- 食文化「和食」と「だし」
- 豊富な健康機能性

世界文化遺産「和食」と「だし」

地球と海の恵みの一部を無駄なく最後まで利用する

光で食を科学する

- 食の分析に利用される光
光は波である(波動性)
波の周期的な長さ＝波長
光を波長毎に分ける＝分光法
- 光と物質の相互作用
物質は特定の波長の光と相互作用する
相互作用による現象：
吸収・反射・散乱・発光(蛍光・燐光)
どんな成分がどれだけあるかが判る
- 食の安心・安全を支える光技術
果物・野菜 穀物 畜産物

波長による分類
X線 紫外線 赤外線
可視光線
吸収 反射・散乱 発光(蛍光)
ルーペ 目視観察
プリズム 高輝度緑色LED 試験トレイ

健康・病気と食品

- 人口増加と食料不足
- 栄養不良と栄養過多
- 健康食品とサプリメント
- 食品(遺伝子組換え食品を含む)の安全と安心
- 生命活動の異常と病気
- 病気の予防と治療薬の開発
- 食品と飼料

世界の多くの地域では未だに食料・栄養不足

ヒトには栄養不足の食品、資源動物には有用な飼料

動物とヒトの健康

- 環境因子の動物への影響
- 昆虫が媒介する病気の制御
- 絶滅危惧動物の遺伝子維持
- 動物の多様性の維持
- 動物の進化
- 環境に応答した育種
- 細胞を取り巻く体内環境

病原媒体昆虫の野外調査(バングラデシュ)

マウス胚・胎子・胎盤解剖実習(3年次)

産業動物の健康を守る

- 家畜の健康保持
- 繁殖効率の向上
- 生産性の改善
- 安全、安心な畜産食品
- 学問、政策、実践とをつなぐ総合力

畜産資源の安定供給

- 育種・繁殖学
- 栄養学
- 獣医学
- 経済学
- 飼養・管理学
- 草地学

臨床繁殖学実習

家畜衛生学実習

家畜飼養学実習

病理診断学実習

大動物臨床学実習

微生物と食・健康

発酵・醸造に利用される微生物

麹菌 酵母 乳酸菌

微生物の働きにより、様々な味・機能性を生み出している

日本酒づくりとあわせて 発酵・醸造における微生物の働きを学ぶ

微生物と腸管との相互作用

腸内においては、様々な微生物がすみ、腸管との相互作用によって免疫が制御されている

ピフィス菌 乳酸菌 大腸菌

腸内フローラ

農業を支える微生物

水田土壌には多くの種類の微生物がすみ、物質循環を司っている

(4)キーワード「生物資源」 農学部の「生物資源」＝持続可能な社会を担う

生物資源：動物

自然の恵み⇔育てる

- 自然の恵み
 - ・安全性・安定供給性
 - ・乱獲・生態系への影響
- 育てる
 - ・経済性(高付加価値化、生産性)
 - ・環境への影響(肥料、産業ゴミ)

食料⇔非食料

- 食料
 - ・畜産・漁業
 - ・安定供給性・競争力
- 非食料
 - ・鶏卵→ウイルス培養
 - ・昆虫→生物農薬、紡績
 - ・実験動物→医薬品



写真: 美迎詩織 (獣医繁殖育種学研究室)
ウシの繁殖率をあげるフェロモンの探索

スライド: 潮秀樹 (水産化学研究室)
新技術を駆使した水産物の出荷時期調節と高付加価値化

写真: 川本宗孝 (昆虫遺伝学研究室)
無限の可能性を秘めたカイコによる物質生産

使役動物の感染症対策: 動物福祉と公衆衛生

生物資源：植物

資源の効率的な利用

- 食料として
 - ・農作物の生産性向上
 - ・過酷な環境でも栽培可能な植物の創出
- 非食料として
 - ・バイオエネルギー
 - ・有用物質生産(医薬品など)

資源の持続的な利用

- 多様な資源
 - ・生態系サービス
 - ・野生植物の持つ遺伝資源
- 自然共生社会
 - ・生物多様性
 - ・里地里山・農村景観



写真提供: 植物分子生理学研究室
乾燥ストレス耐性を有する組換えイネ

写真提供: 生物機械工学研究室
エネルギー資源作物の栽培

写真提供: 生物環境工学研究室
植物を利用したインフルエンザワクチン生産

写真: 緑地環境学専攻ウェブサイト
http://www.k.u-tokyo.ac.jp/green/department/faculty/lyukuchi.html
農地・農村のデザインと農業生態系の保全

森林の生物資源

森林土壌を調べる
土壌は、森林の持続性の最重要指標

森林植生の生理・生態を調べる
生物資源の生育メカニズムを分析

木を使いながら、森を守る
情報技術の活用

健全な森林のサイクルを検証・実現



森林土壌を調べる

森林植生の生理・生態を調べる

健全な森林のサイクルを検証・実現

情報技術 (ICT) を活用し木材の利用を促進する

水圏 (海・河川等) の生物資源

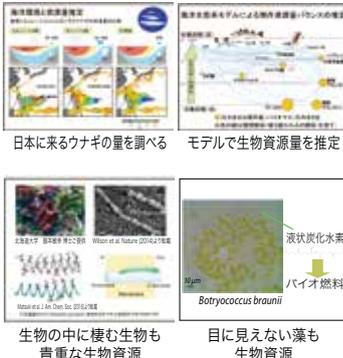
地球上の70%は水圏

- 多様な環境
 - ・生物資源の多様性
 - ・生物資源の莫大な生産性
- 未利用生物資源
 - ・食料としての可能性
 - ・食料以外の利用(医薬品・燃料等)

「海の恵み」は誰の物?

- 再生産可能(子孫が増える)資源
 - ・適切な資源管理が必要
 - ・どう増やすか?

生物学、化学、物理学、数学すべてが貢献



日本に来るウナギの量を調べる

モデルで生物資源量を推定

生物の中に棲む生物も貴重な生物資源

目に見えない薬も生物資源

液化炭化水素

バイオ燃料

Botryococcus braunii

木質資源の高度利用

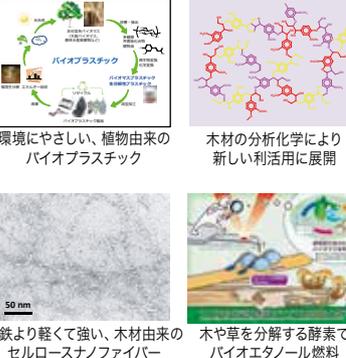
化石資源→生物資源

- 化石資源
 - ・生活を快適で便利に
 - ・枯渇的で CO₂ 増加
- 生物資源
 - ・衣・食・住の基本
 - ・持続的で CO₂ 削減

豊富な木質資源で生活を快適で便利に!

- ・グリーンケミストリー
- ・バイオテクノロジー
- ・材料工学

低炭素社会に貢献する基盤的研究



環境にやさしい、植物由来のバイオプラスチック

木材の分析化学により新しい利活用に展開

鋼鉄より軽くて強い、木材由来のセルロースナノファイバー

木や草を分解する酵素でバイオエタノール燃料

生物資源の利用法

木材を使って炭素を固定

- 建築構造材
 - ・新しい材料: 接合法開発(木材の可能性)
 - ・木造らしい建築物(木を魅せる)
- 家具・内装材
 - ・快適性(木で心地良い空間に)
 - ・環境改善(吸放湿性、断熱性など)
- 土木的利用
 - ・木製ダム・木橋(意外と長持ち)
 - ・ガードレール・遮音壁(見た目も穏やか)
- その他のいろいろ
 - ・楽器(樹種が違うと音色も違う)
 - ・文具(香り・手触りの良さ)
 - ・玩具(子供への安全性) 等々

木を賢く使って、地球環境にも貢献!



大地震にも耐えられる新しい耐力壁を開発

木管楽器の音色はリードの材質・形で決まる?

木質空間の快適性評価とデッキ表面温度の比較

木質構造による美しい環境と
五月2016で製作した木造展示物

微生物とその酵素の利用

食飼料を造る

- 真菌類(カビ・酵母)
- 乳酸菌・酢酸菌など

抗生物質(有用物質)を造る

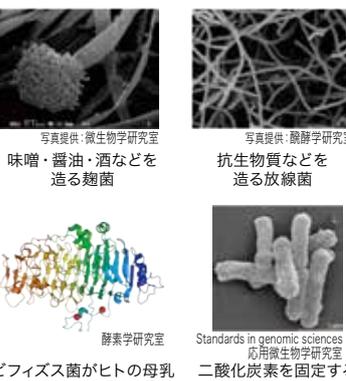
- 放線菌など

健康に役立つ物質を創る

- ピフィス菌の分解酵素
- オリゴ糖合成酵素など

物質生産をデザインする

- 大腸菌などを用いる



写真提供: 微生物学研究室
味噌・醤油・酒などを造る麹菌

写真提供: 醸造学研究室
抗生物質などを造る放線菌

酵素学研究室
ピフィス菌がヒトの母乳のオリゴ糖を分解する酵素

Standards in genomic sciences
応用微生物学研究室
二酸化炭素を固定する水素細菌

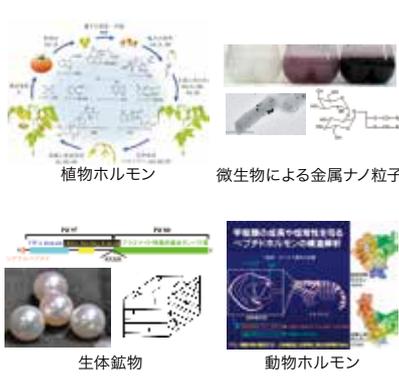
化学を利用した生物資源

生物資源→有用物質

- 天然物質
 - ・植物のホルモン
 - ・動物のタンパク質
 - ・微生物の代謝物

物質の探索と有効利用

- 有機化学
- 分析化学
- 分子生物学
 - ・生命現象の解析
 - ・分子の同定
 - ・分子の構造解析
 - ・分子の大量合成
 - ・生命現象の再現
 - ・産業応用への発展



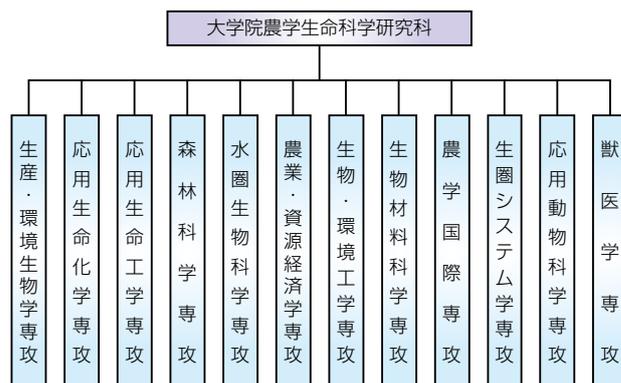
植物ホルモン

微生物による金属ナノ粒子

生体鉱物

動物ホルモン

(2)大学院教育



我々の生活は、生物資源に依存している。農学生命科学は、植物や動物、微生物の生物機能を活用して、人類生存の基盤である生物資源の生産と環境の持続性に貢献するための学問分野である。世界人口の急激な増加が予測されているなか、安全な食料の供給と地球環境の保全が人類にとって最大の課題であり、その解決に向けた技術的基盤や社会的な対策を担う最も重要な研究分野として注目されている。大学院教育では、食料や環境に関する複雑かつ多様な課題に対して専門の立場から取り組める人材を育成することを目標としている。そのために本研究科は、生産・環境生物学、応用生命化学、応用生命工学、森林科学、水圏生物学、農業・資源経済学、生物・環境工学、生物材料科学、農学国際、生圏システム学、応用動物科学、獣医学（4年制博士課程）の12専攻を擁し、農林水畜産業の基盤となる生命科学や生態系管理のためのフィールド科学、社会制度や情報に関する人文・社会科学まで非常に幅広い教育研究が行われている。さらに、生態調和農学機構や演習林、牧場、動物医療センター、水産実験所、アジア生物資源環境研究センター、アグロバイオテクノロジー研究センターなどの充実した附属施設が農林水畜産業の現場に即した教育研究を支えている。また、食の安全・安心に対する社会の要請に応える研究の推進を目的に食の安全研究センターが設置され、産学連携による研究が活発に行われている。修士課程では、講義、演習、修士論文研究を、博士課程では、主に演習、博士論文研究を通じて高度な専門性を身につける教育がなされている。その一方で、先端化、細分化した研究成果を統合し活用できる人材の育成を目的とした専攻横断的な教育プログラムも用意されている。たとえば、ゲノムをはじめ多種多様な生命情報の蓄積が急激に進むなか、それらを統合し活用できる人材育成のための教育プログラムとしてアグリバイオインフォマティクス教育研究ユニットが、学際的な研究交流を通して農学に関わる専門領域の相互理解を深めることを目的としたアグリコクーンが、それぞれ設置されている。

本研究科と交流協定のあるアジアを中心とした海外の大学の研究者を受け入れ、英語で博士課程の教育を行う「環境調和農学特別コース」を設置し、この修了者を通じた学術・研究交流の国際ネットワーク形成を目指している。また平成22年10月から、研究科初の英語のみで履修・修了できる修士課程「国際農業開発学コース（IPADS）」を開始し、アジアのみならず中南米、欧米からの留学生を受け入れている。日本人学生も英語で講義、演習を受ける機会が増え、留学生との交流も相まって本研究科における教育の国際化が着実に進展している。平成24年度からは博士課程も開始した。また平成27年度からはドイツ・ボン大学の開発研究センター（ZEF）との本格的な教育交流がはじまった。平成28年2月に全学協定書を締結し、相互の教員の訪問による単位を伴う交換講義、ドイツの学生の訪日による共同実習が展開されている。

令和4年4月の本研究科の入学者は、修士課程296名、博士課程114名で、そのうちアジアを中心とした留学生が97名含まれている。大学院修了者は、大学や研究所等の教育研究機関、官公庁、民間企業等に職を得て、常に社会の中核を担う存在になっている。本研究科は、時代の要請に応えられる人材を社会に輩出していくための努力を続けている。



弥生講堂アネックス



向ヶ岡ファカルティハウス



農正門

弥生キャンパス木質構造建築物（写真提供：生物材料科学専攻）



共同実習のために来日したボン大学グループとIPADS学生の交流



IPADS ボン大学との共同講義風景（写真提供：IPADS）

(a)大学院（修士課程）での授業科目名

生産・環境生物学専攻

作物学特論	園芸学特論	昆虫遺伝・発生生理学	昆虫ウイルス・細胞工学
育種学特論	栽培学特論	植物病理学特論	植物ウイルス学特論
植物細菌学特論	植物菌類学特論	生物測定学特論	植物分子遺伝学特論
昆虫学特論	総合有害生物管理学	生産生態学特論	Bioresource Sciences for Asia
Application of Biometrics and Biostatistics to Agricultural Science	Fundamentals of Plant Production and Protection	Fundamentals of Bioresources and Biotechnology	生産・環境生物学特別講義
Introduction to the Agricultural and Environmental Biology	応用生物学特別実験Ⅰ	応用生物学特別実験Ⅱ	応用生物学演習Ⅰ
応用生物学演習Ⅱ	基礎生物学特別実験Ⅰ	基礎生物学特別実験Ⅱ	基礎生物学演習Ⅰ
基礎生物学演習Ⅱ	資源創成生物学特別実験Ⅰ	資源創成生物学特別実験Ⅱ	資源創成生物学演習Ⅰ
資源創成生物学演習Ⅱ	生産生態学特別実験Ⅰ	生産生態学特別実験Ⅱ	生産生態学演習Ⅰ
生産生態学演習Ⅱ			

応用生命化学専攻

Plant Nutrition and Physiology	植物栄養生理学特論（1）	植物栄養生理学特論（2）	生物機能開発化学
生命化学フロンティアⅠ	生命化学フロンティアⅡ	天然物構造解析法	有機合成化学
天然物生理化学	細胞調節生化学	環境土壌資源論	生物無機化学
動物生理化学	食品応用生化学	食品機能化学	食品物理化学
生理活性化学	ゲノムと生体情報の科学	正常と異常の生命科学	Animal Biological Chemistry and Physiology
Bioactive Molecules: Structures, Functions and Biosyntheses	応用生命化学特別実験Ⅰ	応用生命化学特別実験Ⅱ	応用生命化学演習

応用生命工学専攻

情報生命工学	醗酵微生物学	分子育種学	生命工学フロンティアⅠ
生命工学フロンティアⅡ	生体触媒分子論	細胞遺伝学	微生物機能開発学
環境微生物学	醗酵醸造学	植物機能工学	Applied Utilization of Microbial Function/Metabolism
Microorganisms in Environments	応用生命工学特別実験Ⅰ	応用生命工学特別実験Ⅱ	応用生命工学演習

森林科学専攻

基礎造林学	造林学特論	熱帯森林学	森林土壌学特論
森林植物学特論	環境植物学	樹病学	森林生態学特論
樹木生理学	森林昆虫学	土壌動物学	環境動物・倫理学
森林経理学特論	森林空間計画論	森林計測学特論	森林評価学
林政学特論	外国森林政策学	林業経済論	資源環境経済学
林業史	森林利用学特論	森林基盤整備計画論	森林生産工学特論
森林機械作業論	森林作業システム学	森林水文学特論	土砂水理学
砂防工学特論	森林環境物理学	環境緑化工学	砂防・治山事業論
造園学特論	風致工学	森林レクリエーション論	環境設計特論
国際森林学特論	持続的森林圏経営論	森林生態圏管理学特論	森林圏生態学
森林圏生物動態学	生物多様性科学総論	森林圏管理システム学	森林流域管理学
森林圏水循環機能学	森林生物機能学	森林遺伝子機能開発学	森圏管理学特論
森林共生生物学	森林科学特別実験	森林科学特別演習	森林科学海外実習Ⅰ
森林科学海外実習Ⅱ	森林科学セミナーⅠ	森林科学セミナーⅡ	

水圏生物科学専攻

水圏生物生態解析法	水圏生命科学実験法	海洋科学概論	生物海洋学総論
海洋生物学	海産哺乳動物学	水産資源管理学	水産海洋学
水族遺伝育種学	魚類免疫学	魚病学特論	水族生理学特論
水圏生物システム学	水圏生物化学特論	水圏天然物化学特論	水圏生物工学特論

水圏生物科学専攻 (続き)

水圏生命科学特論	海洋生物資源利用論	水産資源学演習	水圏生物環境学演習
魚病学演習	水族生理学演習	水圏生物化学演習	水圏天然物化学演習
水圏生物学演習	水圏生物システム学演習	プランクトン学演習	海洋微生物学演習
海洋資源解析学演習	海洋資源生態学演習	海洋環境動態学演習	海洋行動生態計測演習
海洋問題演習Ⅲ	水圏生物科学演習	水圏生物科学特別講義Ⅰ	水圏生物科学特別実験Ⅰ

農業・資源経済学専攻

農業経営学特論Ⅰ (Farm ManagementⅠ)	農業経営学特論Ⅱ (Farm ManagementⅡ)	農業経営学特論Ⅲ (Farm ManagementⅢ)	農業経営学特論Ⅳ (Farm ManagementⅣ)
農業経営学特論Ⅴ (Farm ManagementⅤ)	農業経営学特論Ⅵ (Farm ManagementⅥ)	農業経営学特論Ⅶ (Farm ManagementⅦ)	農業経営学特論Ⅷ (Farm ManagementⅧ)
農業構造動態論Ⅰ (Trend of Agricultural StructureⅠ)	農業構造動態論Ⅱ (Trend of Agricultural StructureⅡ)	農業構造動態論Ⅲ (Trend of Agricultural StructureⅢ)	農業構造動態論Ⅳ (Trend of Agricultural StructureⅣ)
農業構造動態論Ⅴ (Trend of Agricultural StructureⅤ)	農業構造動態論Ⅵ (Trend of Agricultural StructureⅥ)	農業構造動態論Ⅶ (Trend of Agricultural StructureⅦ)	農業構造動態論Ⅷ (Trend of Agricultural StructureⅧ)
農業史特論Ⅰ (History of AgricultureⅠ)	農業史特論Ⅱ (History of AgricultureⅡ)	農業史特論Ⅲ (History of AgricultureⅢ)	農業史特論Ⅳ (History of AgricultureⅣ)
農業史特論Ⅴ (History of AgricultureⅤ)	農業史特論Ⅵ (History of AgricultureⅥ)	農業史特論Ⅶ (History of AgricultureⅦ)	農業史特論Ⅷ (History of AgricultureⅧ)
開発経済学特論Ⅰ (Development EconomicsⅠ)	開発経済学特論Ⅱ (Development EconomicsⅡ)	開発経済学特論Ⅲ (Development EconomicsⅢ)	開発経済学特論Ⅳ (Development EconomicsⅣ)
開発経済学特論Ⅴ (Development EconomicsⅤ)	開発経済学特論Ⅵ (Development EconomicsⅥ)	開発経済学特論Ⅶ (Development EconomicsⅦ)	開発経済学特論Ⅷ (Development EconomicsⅧ)
資源・環境経済学特論Ⅰ (Resource and Environmental EconomicsⅠ)	資源・環境経済学特論Ⅱ (Resource and Environmental EconomicsⅡ)	資源・環境経済学特論Ⅲ (Resource and Environmental EconomicsⅢ)	資源・環境経済学特論Ⅳ (Resource and Environmental EconomicsⅣ)
資源・環境経済学特論Ⅴ (Resource and Environmental EconomicsⅤ)	資源・環境経済学特論Ⅵ (Resource and Environmental EconomicsⅥ)	資源・環境経済学特論Ⅶ (Resource and Environmental EconomicsⅦ)	資源・環境経済学特論Ⅷ (Resource and Environmental EconomicsⅧ)
国際農村開発学特論Ⅰ (International Rural DevelopmentⅠ)	国際農村開発学特論Ⅱ (International Rural DevelopmentⅡ)	国際農村開発学特論Ⅲ (International Rural DevelopmentⅢ)	国際農村開発学特論Ⅳ (International Rural DevelopmentⅣ)
国際農村開発学特論Ⅴ (International Rural DevelopmentⅤ)	国際農村開発学特論Ⅵ (International Rural DevelopmentⅥ)	国際農村開発学特論Ⅶ (International Rural DevelopmentⅦ)	国際農村開発学特論Ⅷ (International Rural DevelopmentⅧ)
農業・資源経済学特別講義Ⅰ (Special Lectures in Agricultural and Resource EconomicsⅠ)	農業・資源経済学特別講義Ⅱ (Special Lectures in Agricultural and Resource EconomicsⅡ)	農業・資源経済学特別講義Ⅲ (Special Lectures in Agricultural and Resource EconomicsⅢ)	農業・資源経済学特別講義Ⅳ (Special Lectures in Agricultural and Resource EconomicsⅣ)
農業・資源経済学特別講義A (Special Lectures in Agricultural and Resource Economics A)	農業・資源経済学特別講義B (Special Lectures in Agricultural and Resource Economics B)	外国農業特論 (Special Lecture on foreign agriculture)	農業経営学演習Ⅰ (Seminar in Farm ManagementⅠ)
農業経営学演習Ⅱ (Seminar in Farm ManagementⅡ)	農業経営学演習Ⅲ (Seminar in Farm ManagementⅢ)	農業経営学演習Ⅳ (Seminar in Farm ManagementⅣ)	農業経営学演習Ⅴ (Seminar in Farm ManagementⅤ)
農業経営学演習Ⅵ (Seminar in Farm ManagementⅥ)	農業経営学演習Ⅶ (Seminar in Farm ManagementⅦ)	農業経営学演習Ⅷ (Seminar in Farm ManagementⅧ)	農業構造動態論演習Ⅰ (Seminar in Trend of Agricultural StructureⅠ)
農業構造動態論演習Ⅱ (Seminar in Trend of Agricultural StructureⅡ)	農業構造動態論演習Ⅲ (Seminar in Trend of Agricultural StructureⅢ)	農業構造動態論演習Ⅳ (Seminar in Trend of Agricultural StructureⅣ)	農業構造動態論演習Ⅴ (Seminar in Trend of Agricultural StructureⅤ)
農業構造動態論演習Ⅵ (Seminar in Trend of Agricultural StructureⅥ)	農業構造動態論演習Ⅶ (Seminar in Trend of Agricultural StructureⅦ)	農業構造動態論演習Ⅷ (Seminar in Trend of Agricultural StructureⅧ)	農業史演習Ⅰ (Seminar in History of AgricultureⅠ)
農業史演習Ⅱ (Seminar in History of AgricultureⅡ)	農業史演習Ⅲ (Seminar in History of AgricultureⅢ)	農業史演習Ⅳ (Seminar in History of AgricultureⅣ)	農業史演習Ⅴ (Seminar in History of AgricultureⅤ)
農業史演習Ⅵ (Seminar in History of AgricultureⅥ)	農業史演習Ⅶ (Seminar in History of AgricultureⅦ)	農業史演習Ⅷ (Seminar in History of AgricultureⅧ)	開発経済学演習Ⅰ (Seminar in Development EconomicsⅠ)
開発経済学演習Ⅱ (Seminar in Development EconomicsⅡ)	開発経済学演習Ⅲ (Seminar in Development EconomicsⅢ)	開発経済学演習Ⅳ (Seminar in Development EconomicsⅣ)	開発経済学演習Ⅴ (Seminar in Development EconomicsⅤ)
開発経済学演習Ⅵ (Seminar in Development EconomicsⅥ)	開発経済学演習Ⅶ (Seminar in Development EconomicsⅦ)	開発経済学演習Ⅷ (Seminar in Development EconomicsⅧ)	資源・環境経済学演習Ⅰ (Seminar in Resource and Environmental EconomicsⅠ)
資源・環境経済学演習Ⅱ (Seminar in Resource and Environmental EconomicsⅡ)	資源・環境経済学演習Ⅲ (Seminar in Resource and Environmental EconomicsⅢ)	資源・環境経済学演習Ⅳ (Seminar in Resource and Environmental EconomicsⅣ)	資源・環境経済学演習Ⅴ (Seminar in Resource and Environmental EconomicsⅤ)
資源・環境経済学演習Ⅵ (Seminar in Resource and Environmental EconomicsⅥ)	資源・環境経済学演習Ⅶ (Seminar in Resource and Environmental EconomicsⅦ)	資源・環境経済学演習Ⅷ (Seminar in Resource and Environmental EconomicsⅧ)	国際農村開発学演習Ⅰ (Seminar in International Rural DevelopmentⅠ)
国際農村開発学演習Ⅱ (Seminar in International Rural DevelopmentⅡ)	国際農村開発学演習Ⅲ (Seminar in International Rural DevelopmentⅢ)	国際農村開発学演習Ⅳ (Seminar in International Rural DevelopmentⅣ)	国際農村開発学演習Ⅴ (Seminar in International Rural DevelopmentⅤ)
国際農村開発学演習Ⅵ (Seminar in International Rural DevelopmentⅥ)	国際農村開発学演習Ⅶ (Seminar in International Rural DevelopmentⅦ)	国際農村開発学演習Ⅷ (Seminar in International Rural DevelopmentⅧ)	

生物・環境工学専攻

生体計測情報学特論	生物環境基礎工学	生物環境情報工学特論 I	生物環境情報工学特論 II
農地環境工学特論	農地管理工学特論	水理学特論	水利環境工学特論
土壌物理学特論	環境地水学特論	地域環境工学特論 I	地域環境工学特論 II
生物環境調節学	生物環境工学特論	生物機械工学特論	生物物性学特論
生物加工システム工学	生物プロセス工学特論	生物システム工学特論 I	生物システム工学特論 II
エコロジカル・セイフティー学特論 I	エコロジカル・セイフティー学特論 II	生物・環境工学特別研究 I	生物・環境工学実験実習
生物・環境工学演習			

生物材料科学専攻

生物素材科学特論	セルロース科学特論 I	セルロース科学特論 II	木造建築特論
木材乾燥学特論	木材物理学特論 I	木材物理学特論 II	木質構造学特論
木質材料学特論	住環境学特論	材料・住科学特別講義 I	材料・住科学特別講義 II
木材保存学特論	森林生物化学特論 I	森林生物化学特論 II	木材化学特論 I (Basic Lignin Chemistry)
木材化学特論 II (Advanced Carbohydrate Chemistry)	高分子材料科学特論 I	高分子材料科学特論 II	バイオマス化学特別講義 I (Advanced Lignin Chemistry)
バイオマス化学特別講義 II	バイオマス化学特別講義 III	バイオマス化学特別講義 IV	生物素材科学特別講義
生物材料科学特別実験 I	生物材料科学演習		

生物材料科学専攻（木造建築コース）

木質構造学特論	木質材料学特論	木材保存学特論	木材利用システム学特論
木材物理学特論 I	住環境学特論	資源環境経済学	建築生産特論
建築事例研究	建築設計製図特論	木造建築特論	構造解析特論
建築材料学特論	木質構造設計論	建築関連規格と法規	木造建築設計演習
建築事例研究実習	木造建築実験		

農学国際専攻

国際水産開発学総論 (Global Fisheries Science and Policy)	国際水産開発学特論 (Global Fisheries Science and Economics)	国際水産開発学演習 (Seminar in Global Fisheries Science)	国際動物資源開発学 (Global Animal Resource Development)
国際動物機能開発学 (Functional Animal Sciences)	国際動物資源学演習 (Seminar in Global Animal Resource Science)	国際動物生産学実験 (Research in Global Animal Production Science)	国際植物資源学 (Global Plant Resources)
植物資源管理学 (Cropping System Technology)	国際植物資源学演習 (Seminar in Plant Science for Sustainable Agriculture)	地域資源利用システム学 (Systematic Utilization of Regional Resources)	国際植物材料学 (Global Plant Material Science)
国際植物材料学演習 (Seminar in Global Plant Material Science)	国際植物生産学実験 (Research in Global Plant Production Sciences)	国際森林資源学特論 (Advanced Global Forest Resources)	国際森林環境学特論 (Advanced Global Forest Environmental Science)
国際森林環境学演習 (Seminar in Global Forest Environmental Studies)	植物新機能化学 (Plant Molecular Physiology)	植物機能開発工学 (Plant Biotechnology)	新機能植物開発学演習 (Seminar in Plant Biotechnology)
地球生物環境学実験 (Research in Global Bio-Environmental Studies)	国際農業開発学演習 (Seminar in Agricultural Development Studies)	国際農業開発学実験 (Research in Agricultural Development Studies)	国際環境評価学特論 (Advanced International Environmental Evaluation)
国際環境管理学特論 (Advanced International Environment Management)	国際環境経済学演習 (Seminar in International Environmental Economics)	国際環境経済学研究 (Research in International Environmental Economics)	国際環境資源情報学特論 (Advanced Environmental and Resource Information Systems)
国際情報農学特論 (Advanced International Agro-Informatics)	国際情報農学演習 (Seminar in International Agro-Informatics)	国際情報農学実験 (Research in International Agro-Informatics)	農学国際特論 I (Advanced Global Agricultural Science I)
農学国際特論 II (Advanced Global Agricultural Science II)	農学国際特論 III (Advanced Global Agricultural Science III)	農学国際演習 (Seminar in Global Agricultural Sciences)	農学国際実験・研究 (Research in Global Agricultural Sciences)
農学国際実地研究 I (On-site Practical Research in Global Agricultural Sciences I)	社会デザインと実践演習 A (Case Study: Social Design and Management A)	国際感染症制御学 I (Advanced Global Infectious Diseases Control I)	国際感染症制御学 II (Advanced Global Infectious Diseases Control II)
国際農学英語 I (English for Global Agricultural Sciences I)	国際農学英語 II (English for Global Agricultural Sciences II)	海外における安全管理論 (Overseas Safety and Risk Management)	

農学国際専攻（国際農業開発学コース）

International Program in Agricultural Development Studies (IPADS)

国際農業開発学各論 (IPADS Case Studies)	国際農業開発学特論 (IPADS Development Studies)	国際農業開発学入門 (IPADS Introductory Course)	作物管理学 (IPADS Crop Management)
国際作物科学 (IPADS Crop Science)	国際土壌肥沃度管理学 (IPADS Soil Fertility Management)	国際食料資源学 (IPADS Food Resources)	国際土壌科学 (IPADS Soil Science)
国際食品科学 (IPADS Food Science)	国際植物新機能化学 (IPADS Plant Molecular Physiology)	国際植物機能開発工学 (IPADS Plant Biotechnology)	国際植物改良学 (IPADS Plant Improvement)
サステナビリティと作物生産学 (Sustainability and Crop Production)	国際森林開発論 (International Forest Development)	森林昆虫生態学 (Forest Insect Ecology)	国際動物科学 (IPADS Animal Science)
国際沿岸生態学 (IPADS Coastal Ecology)	IPADS 国際水産：科学と政策 (IPADS Global Fisheries : Science and Policy)	IPADS 国際水産：科学と経済 (IPADS Global Fisheries : Science and Economics)	国際環境科学 (IPADS Environmental Science)
国際環境政策学 (IPADS Environmental Policy)	国際農業開発経済学 (IPADS Economics)	IPADS 経済：数量経済学 I (IPADS Economics : Quantitative Economics I)	IPADS 経済：数量経済学 II (IPADS Economics : Quantitative Economics II)
国際農業統計学 (IPADS Statistics)	国際農業開発学客員セミナー (IPADS Guest Seminars)	国際農業開発学実習 (Practice in International Agricultural Development)	国際農業開発学セミナー I (IPADS Research Seminars I)
国際農業開発学セミナー II (IPADS Research Seminars II)	国際農業開発学研究 (IPADS Master's Research)		

生圏システム学専攻

フィールド科学総論	生圏システム学特論	生態統計学	生物多様性科学総論
生物多様性科学特論	生物多様性科学演習	保全生態学総論	保全生態学特論
保全生態学演習	緑地創成学特論	緑地管理学特論	緑地創成学演習
森圏管理学特論	相関森林学	森圏管理学演習	水域生態学
水域保全学	水域保全学演習	耕地生圏生態学	耕地生圏生態学演習
水圏生産システム学総論	水圏生産システム学特論	水圏生産システム学演習	森林圏生態学
森林圏生物動態学	森林圏生態学演習	森林生物機能学	森林遺伝子機能開発学
森林生物機能学演習	森林生態圏管理学特論	森林圏管理システム学	国際森林学特論
森林圏生態社会学演習	持続的森林圏経営論	森林流域管理学	森林圏水循環機能学
森林流域管理学演習	生圏システム学実験・研究		

応用動物科学専攻

動物科学トピックス	ゲノムと生体情報の科学	神経と行動の科学	動物・細胞の構造の科学
動物の一生の生物学	正常と異常の生命科学	外界と生体のインターラクシオン	
動物生産テクノロジー概論	生物学における情報科学とプレゼンテーション戦略		動物科学のフロンティア I
動物科学のフロンティア II	高次生体制御学特別実験 I	高次生体制御学特別実験 II	高次生体制御学演習
動物機能科学特別実験 I	動物機能科学特別実験 II	動物機能科学演習	

(b)大学院（博士課程）での授業科目名

生産・環境生物学専攻

生産・環境生物学特別実験	生産・環境生物学特別演習
--------------	--------------

応用生命化学専攻

応用生命化学特別実験 III	応用生命化学特別演習
----------------	------------

応用生命工学専攻

応用生命工学特別実験 III	応用生命工学特別演習
----------------	------------

森林科学専攻

森林生態社会学特別演習	森林生命環境科学特別演習	森林資源環境科学特別演習 I	森林資源環境科学特別演習 II
森林生態圏管理学特別演習 I	森林生態圏管理学特別演習 II	アジア生物環境学特別演習	森林生態社会学特別実験
森林生命環境科学特別実験	森林資源環境科学特別実験 I	森林資源環境科学特別実験 II	森林生態圏管理学特別実験 I
森林生態圏管理学特別実験 II	アジア生物環境学特別実験		

水圏生物科学専攻

水圏生物科学特別講義 II	水圏生物科学特別実験 II	水圏生物科学特別演習
---------------	---------------	------------

農業・資源経済学専攻

農業経営学特別研究Ⅰ (Advanced Study in Farm Management Ⅰ)	農業経営学特別研究Ⅱ (Advanced Study in Farm Management Ⅱ)	農業経営学特別研究Ⅲ (Advanced Study in Farm Management Ⅲ)	農業経営学特別研究Ⅳ (Advanced Study in Farm Management Ⅳ)
比較農業政策学Ⅰ (Advanced Study in Policy of Comparative Agriculture Ⅰ)	比較農業政策学Ⅱ (Advanced Study in Policy of Comparative Agriculture Ⅱ)	比較農業政策学Ⅲ (Advanced Study in Policy of Comparative Agriculture Ⅲ)	比較農業政策学Ⅳ (Advanced Study in Policy of Comparative Agriculture Ⅳ)
比較農業史特別研究Ⅰ (Advanced Study in Comparative History of Agriculture Ⅰ)	比較農業史特別研究Ⅱ (Advanced Study in Comparative History of Agriculture Ⅱ)	比較農業史特別研究Ⅲ (Advanced Study in Comparative History of Agriculture Ⅲ)	比較農業史特別研究Ⅳ (Advanced Study in Comparative History of Agriculture Ⅳ)
国際農業論特別研究Ⅰ (Advanced Study in Agricultural Trade and Development Ⅰ)	国際農業論特別研究Ⅱ (Advanced Study in Agricultural Trade and Development Ⅱ)	国際農業論特別研究Ⅲ (Advanced Study in Agricultural Trade and Development Ⅲ)	国際農業論特別研究Ⅳ (Advanced Study in Agricultural Trade and Development Ⅳ)
アグリビジネス論特別研究Ⅰ (Advanced Study in Agribusiness Ⅰ)	アグリビジネス論特別研究Ⅱ (Advanced Study in Agribusiness Ⅱ)	アグリビジネス論特別研究Ⅲ (Advanced Study in Agribusiness Ⅲ)	アグリビジネス論特別研究Ⅳ (Advanced Study in Agribusiness Ⅳ)
国際農村開発学特別研究Ⅰ (Advanced Study in International Rural Development Ⅰ)	国際農村開発学特別研究Ⅱ (Advanced Study in International Rural Development Ⅱ)	国際農村開発学特別研究Ⅲ (Advanced Study in International Rural Development Ⅲ)	国際農村開発学特別研究Ⅳ (Advanced Study in International Rural Development Ⅳ)
農業経営学特別演習Ⅰ (Advanced Seminar on Farm Management Ⅰ)	農業経営学特別演習Ⅱ (Advanced Seminar on Farm Management Ⅱ)	農業経営学特別演習Ⅲ (Advanced Seminar on Farm Management Ⅲ)	農業経営学特別演習Ⅳ (Advanced Seminar on Farm Management Ⅳ)
農業経営学特別演習Ⅴ (Advanced Seminar on Farm Management Ⅴ)	農業経営学特別演習Ⅵ (Advanced Seminar on Farm Management Ⅵ)	農業経営学特別演習Ⅶ (Advanced Seminar on Farm Management Ⅶ)	農業経営学特別演習Ⅷ (Advanced Seminar on Farm Management Ⅷ)
比較農業政策学演習Ⅰ (Seminar in Policy of Comparative Agriculture Ⅰ)	比較農業政策学演習Ⅱ (Seminar in Policy of Comparative Agriculture Ⅱ)	比較農業政策学演習Ⅲ (Seminar in Policy of Comparative Agriculture Ⅲ)	比較農業政策学演習Ⅳ (Seminar in Policy of Comparative Agriculture Ⅳ)
比較農業政策学演習Ⅴ (Seminar in Policy of Comparative Agriculture Ⅴ)	比較農業政策学演習Ⅵ (Seminar in Policy of Comparative Agriculture Ⅵ)	比較農業政策学演習Ⅶ (Seminar in Policy of Comparative Agriculture Ⅶ)	比較農業政策学演習Ⅷ (Seminar in Policy of Comparative Agriculture Ⅷ)
比較農業史特別演習Ⅰ (Seminar in Comparative History of Agriculture Ⅰ)	比較農業史特別演習Ⅱ (Seminar in Comparative History of Agriculture Ⅱ)	比較農業史特別演習Ⅲ (Seminar in Comparative History of Agriculture Ⅲ)	比較農業史特別演習Ⅳ (Seminar in Comparative History of Agriculture Ⅳ)
比較農業史特別演習Ⅴ (Seminar in Comparative History of Agriculture Ⅴ)	比較農業史特別演習Ⅵ (Seminar in Comparative History of Agriculture Ⅵ)	比較農業史特別演習Ⅶ (Seminar in Comparative History of Agriculture Ⅶ)	比較農業史特別演習Ⅷ (Seminar in Comparative History of Agriculture Ⅷ)
国際農業論特別演習Ⅰ (Seminar in Agricultural Trade and Development Ⅰ)	国際農業論特別演習Ⅱ (Seminar in Agricultural Trade and Development Ⅱ)	国際農業論特別演習Ⅲ (Seminar in Agricultural Trade and Development Ⅲ)	国際農業論特別演習Ⅳ (Seminar in Agricultural Trade and Development Ⅳ)
国際農業論特別演習Ⅴ (Seminar in Agricultural Trade and Development Ⅴ)	国際農業論特別演習Ⅵ (Seminar in Agricultural Trade and Development Ⅵ)	国際農業論特別演習Ⅶ (Seminar in Agricultural Trade and Development Ⅶ)	国際農業論特別演習Ⅷ (Seminar in Agricultural Trade and Development Ⅷ)
アグリビジネス論特別演習Ⅰ (Seminar in Agribusiness Ⅰ)	アグリビジネス論特別演習Ⅱ (Seminar in Agribusiness Ⅱ)	アグリビジネス論特別演習Ⅲ (Seminar in Agribusiness Ⅲ)	アグリビジネス論特別演習Ⅳ (Seminar in Agribusiness Ⅳ)
アグリビジネス論特別演習Ⅴ (Seminar in Agribusiness Ⅴ)	アグリビジネス論特別演習Ⅵ (Seminar in Agribusiness Ⅵ)	アグリビジネス論特別演習Ⅶ (Seminar in Agribusiness Ⅶ)	アグリビジネス論特別演習Ⅷ (Seminar in Agribusiness Ⅷ)
国際農村開発学特別演習Ⅰ (Advanced Seminar in International Rural Development Ⅰ)	国際農村開発学特別演習Ⅱ (Advanced Seminar in International Rural Development Ⅱ)	国際農村開発学特別演習Ⅲ (Advanced Seminar in International Rural Development Ⅲ)	国際農村開発学特別演習Ⅳ (Advanced Seminar in International Rural Development Ⅳ)
国際農村開発学特別演習Ⅴ (Advanced Seminar in International Rural Development Ⅴ)	国際農村開発学特別演習Ⅵ (Advanced Seminar in International Rural Development Ⅵ)	国際農村開発学特別演習Ⅶ (Advanced Seminar in International Rural Development Ⅶ)	国際農村開発学特別演習Ⅷ (Advanced Seminar in International Rural Development Ⅷ)
農業・資源経済学総合演習 (Special Seminar for Dissertation)			

生物・環境工学専攻

生物環境情報工学特別講義	地域環境工学特別講義	生物システム工学特別講義	生物・環境工学特別研究Ⅱ
生物・環境工学特別実験実習			

生物材料科学専攻

生物材料科学特別実験Ⅱ	生物材料科学特別演習
-------------	------------

農学国際専攻

国際水産開発学特別演習 (Advanced Seminar in Global Fisheries Science)	国際動物資源学特別演習 (Advanced Seminar in Global Animal Resource Science)	国際動物生産学特別実験 (Advanced Research in Global Animal Production Science)	国際植物資源学特別演習 (Advanced Seminar in Global Plant Resource)
国際植物材料科学特別演習 (Advanced Seminar in Global Plant Material Science)	国際植物生産学特別実験 (Advanced Research in Global Plant Production Science)	国際森林環境学特別演習 (Advanced Seminar in Global Forest Environmental Studies)	新機能植物開発学特別演習 (Advanced Seminar in Plant Biotechnology)
地球生物環境学特別実験 (Advanced Research in Global Bio-Environmental Studies)	国際環境経済学特別演習 (Advanced Seminar in International Environmental Economics)	国際環境経済学特別研究 (Advanced Research in International Environmental Economics)	国際情報農学特別演習 (Advanced Seminar in International Agro-Informatics)
国際情報農学特別実験 (Advanced Research in International Agro-Informatics)	国際農業開発学特別演習 (Advanced Seminar in Agricultural Development Studies)	国際農業開発学特別実験 (Advanced Research in Agricultural Development Studies)	農学国際特別演習 (Advanced Seminar in Global Agricultural Science)
農学国際特別実験・研究 (Advanced Research in Global Agricultural Sciences)	農学国際実地研究Ⅱ (On-site Practical Research in Global Agricultural Sciences Ⅱ)	環境政策特別講義 (Advanced Environment Policy)	

農学国際専攻（国際農業開発学コース）

International Program in Agricultural Development Studies (IPADS)

国際農業開発学特別セミナー (IPADS Advanced Research Seminars)	国際農業開発学特別研究 (IPADS PhD Research)	国際農業開発学実地研究 (IPADS Field Studies)	IPADS 環境政策特別講義 (IPADS Advanced Environment Policy)
---	-------------------------------------	--------------------------------------	---

生圏システム学専攻

生物多様性科学特別演習	保全生態学特別演習	緑地創成学特別演習	森圏管理学特別演習
水域保全学特別演習	耕地生圏生態学特別演習	水圏生産システム学特別演習	森林圏生態学特別演習
森林生物機能学特別演習	森林圏生態社会学特別演習	森林流域管理学特別演習	生圏システム学特別実験・研究

応用動物科学専攻

動物科学フロンティア	応用動物科学特別実験Ⅰ	応用動物科学特別実験Ⅱ	応用動物科学特別演習Ⅰ
応用動物科学特別演習Ⅱ			

獣医学博士課程 獣医学専攻

生体機能形態学特別講義	生体機能形態学特別演習	生体機能形態学特別実験	生体防御学特別講義
生体防御学特別演習	生体防御学特別実験	獣医臨床学特別講義	獣医臨床学特別演習
獣医臨床学特別実験	獣医学特論	ライフサイエンス統計学講義	科学プレゼンテーション論Ⅰ
科学プレゼンテーション論Ⅱ	科学プレゼンテーション論Ⅲ	生体機能形態学特論	生体防御学特論
獣医臨床学特論			

研究科共通科目

農学ライフサイエンス研究倫理 Statistical Analysis	農学ライフサイエンス研究管理演習 Theory and Practice for Advanced Statistics	農林水畜産業と環境負荷 生物配列解析基礎	農林水畜産業と生態系攪乱 ゲノム情報解析基礎
バイオスタティスティクス基礎論	知識情報処理論	生物配列統計学	分子モデリングと分子シミュレーション
オーム情報解析	機能ゲノム学	システム生物学概論	構造バイオインフォマティクス基礎
フィールドインフォマティクス	農学生命情報科学特論Ⅰ	農学生命情報科学特論Ⅱ	農学生命情報科学特論Ⅲ
農学生命情報科学特論Ⅳ	農学生命情報科学実習Ⅰ	農学生命情報科学特別演習	食の科学ゼミナールⅠ
食の科学ゼミナールⅡ	食の科学ゼミナールⅢ	バイオマス利用研究特論Ⅰ	バイオマス利用研究特論Ⅱ
バイオマス利用研究ゼミナールⅠ	バイオマス利用研究ゼミナールⅡ	国際農業と文化ゼミナール	国際農業と文化実習
生物多様性と農業	自然再生事業モニタリング実習	農学における情報利用ゼミナール	Writing a Research Proposal
Writing a Research Article	サイエンスコミュニケーション	サイエンスコミュニケーション演習	農学現象の数理科学的理解
ワン・アーンロジーⅠ	ワン・アーンロジーⅡ	ワン・アーンロジーⅢ	環境調和実学研修Ⅰ
環境調和実学研修Ⅱ	環境調和実学研修Ⅲ	インターンシップⅠ	インターンシップⅡ
インターンシップⅢ	地域農業マネジメント	社会デザインと実践演習 (Case Study: Social Design and Management)	地球規模感染症制御学Ⅰ (Global Infectious Diseases Control ScienceⅠ)
地球規模感染症制御学Ⅱ (Global Infectious Diseases Control ScienceⅡ)			

大学院共通授業科目

微生物科学イノベーション特論Ⅰ	微生物科学イノベーション特論Ⅱ	Application of Biometrics and Biostatistics to Agricultural Science	森林昆虫学
砂防・治山事業論	国際森林学特論	森林生態圏管理学特論	森林圏水循環機能学
森林科学セミナーⅠ			

(c) 博士論文（課程博士）の論文題目 2022年度

生産・環境生物学専攻

イネの生育・収量の高精度な予測モデル構築のためのイオノームの実用性評価
Development of genomic analysis APIs and a new approach for breeding optimisation in a context of data-driven breeding (ゲノム解析 API の開発とデータ駆動型育種に向けた新たな育種最適化手法の開発)
Improving plant tolerance against heat and strong-light stress via genetic and chemical approaches (遺伝学的・化学的アプローチによる植物の高温・強光ストレス耐性の向上)
Studies on domestication genes in the silkworm <i>Bombyx mori</i> (カイコの家畜化に寄与した遺伝子に関する研究)
ゲノム育種の最適化に寄与するシミュレーション研究及び新規手法の開発
イネの葉の発生過程に関わる新規遺伝子の探索と機能解析

応用生命化学専攻

Characterization of CID7 in boron dependent mRNA degradation in *Arabidopsis thaliana*
(シロイヌナズナのホウ素依存的な mRNA 分解に関する CID7 の特徴)

日本の森林における土壌微生物相と窒素循環との関わり の 解 明

Identification and Characterization of the Genes Affecting Lignin Accumulation in *Gramineae*
(イネ科におけるリグニン蓄積に影響を及ぼす遺伝子の同定と解析)

Studies on nitrogen fixation by iron-reducing bacteria in paddy soil
(水田土壌における鉄還元菌窒素固定に関する研究)

Identification and mechanism analysis of citrus peels-derived polymethoxyflavonoids as SIRT1 activators
(SIRT1 活性化能を有する柑橘果皮由来ポリメトキシフラボノイドの同定と機構解析)

秋田県土壌由来 D-25 株による金ナノ粒子生成機構の解明

抗体工学を利用した二重交差性自己抗体の解析

炎症抑制効果を持つ乳酸菌の腸管バリア増強機能における腸内細菌との協調作用の解明

骨格筋機能を制御する線維芽細胞増殖因子に関する研究

Formation and physiological roles of apoplastic barrier in cucumber trichome and rice root
(キュウリのトライコムとイネの根におけるアポプラスト障壁の形成と生理機能)

特異な生物活性を示す amorfrutin 類と amphirionin-5 の全合成研究

骨格筋由来細胞外小胞の体内動態及び生理機能に関する研究

応用生命工学専攻

Virtual screening of traditional Chinese medicine for discovery of potential anti-SARS-CoV-2 lead molecules
(抗 SARS-CoV-2 リード分子探索のための中国伝統医薬のバーチャルスクリーニング)

放線菌と異属細菌間の化合物を介した相互作用に関する研究

Molecular basis of bacterial nucleoid rearrangement by acquisition of the catabolic plasmid pCAR1
(分解プラスミド pCAR1 獲得に伴う核様体再構成の分子基盤)

Development of a global screening system for detecting intracellular molecular interactions by luminescence complementation in fission yeast
(発光補完法による分裂酵母の網羅的細胞内分子間相互作用探索系の開発)

A study on the physiological roles of RGS domain-containing putative hybrid G protein-coupled receptors in *Aspergillus oryzae*
(*Aspergillus oryzae* の持つ RGS ドメイン含有型 G タンパク質共役型受容体の生理機能に関する研究)

麹菌におけるゲノム編集を利用した大規模遺伝子改変による異種天然物高生産に関する研究

Studies on the secondary metabolism response by combined-culture in *Streptomyces coelicolor* A3 (2)
(*Streptomyces coelicolor* A3 (2) における複合培養による二次代謝応答に関する研究)

森林科学専攻

Bark and ambrosia beetle community in Hokkaido, Japan: temporal dynamics of flying adults, succession, and relationship with host plant phylogeny
(日本北海道における樹皮下キクイムシと養菌性キクイムシの群集：飛翔成虫の時間変動、遷移、及び寄主植物の系統発生との関係)

Studies on bark beetles (*sensu lato*) and fungi related to tree decline of *Acer amoenum*
(オオモミジの衰退に関係したキクイムシ類(広義)と菌類に関する諸研究)

世界遺産泰山の風景のイメージの変遷と価値の保全に関する研究

屋上緑地の歴史的変遷と連続性の概念の拡張

国立公園と都市公園における官民連携による管理とその影響に関する研究

水圏生物科学専攻

Statistical re-examination of stock-recruitment relationship of fishery resources using meta-analysis
(メタ解析法を用いた水産資源の再生産関係の統計学的再検討)

Repeated translocation of a supergene underlay rapid sex chromosome turnover
(転移型の性決定遺伝子座は性染色体の急速な置換をもたらす)

The functional study of estrogen-dependent genes in medaka female-specific preoptic neurons
(メダカメスのメス特異的視索前野ニューロンにおけるエストロゲン依存的遺伝子の機能解析)

エネルギー収支特性にもとづく三陸産サケ稚魚の初期減耗過程に関する研究

東シナ海におけるマアジ稚魚の生息層移行に関する研究

Application and further technological development of massively parallel sequencing-based experiments for understanding fish-specific growth and aging traits (魚類特異的な成長・老化特性の理解に向けた超並列シーケンシングによる実験法の応用とさらなる技術開発)
Multiomics approach on studying specialized endogenous lipid metabolism in toothed whale, <i>Grampus griseus</i> (マルチオミクスによるハクジラ特異的内因性脂質代謝の研究)
海洋における窒素固定活性の変動要因に関する研究
Models explaining RNA level fluctuations based on transcription rates, RNA degradation rates, and RNA age: from cells to water environments (転写速度、RNA 分解速度、および RNA 年齢に基づく RNA レベルの変動を分析するモデル：細胞から水環境まで)
Community structure and feeding ecology of euphausiids in the low-latitude Indian and Pacific Oceans (インド洋および太平洋低緯度域におけるオキアミ類の群集構造と摂餌生態)
Blue Economy Evaluation Study using Input-Output Table: Hakodate-City as a case study (産業連関表を用いたブルーエコノミー評価研究：北海道函館市を例として)
日本産深海性魚類の種および遺伝的多様性の究明
褐藻由来単糖フコースの抗肥満作用に関する研究
Evaluation of environmental DNA method to detect distribution of small pelagic fish in open ocean and study on their distributional characteristics in the Kuroshio frontal region. (環境 DNA を用いた沖合域での小型浮魚類分布推定方法の評価と黒潮前線域における分布特性に関する研究)
有毒ヒラムシを用いた TTX 生合成系解明に向けた研究
Taxonomy, phylogeography and ecophysiology of <i>Chattonella</i> species (Raphidophyceae) in Southeast Asia (東南アジアにおけるラフィド藻 <i>Chattonella</i> 属の分類、系統地理、生理生態に関する研究)

農業・資源経済学専攻

The Impact of Harvest Outsourcing Service on Rice Harvest Loss in China: A Principal-Agent Perspective
(中国における農作業委託によるコメ収穫ロスへの影響：プリンシパル=エージェント関係の観点から)

水田農業経営における動的情報管理の実態と影響の解明：農業経営情報システム導入事例を対象として

生物・環境工学専攻

Estimation of Light Acclimation Responses of Cucumber Leaves to Day-to-day Changing Photosynthetic Photon Flux Density
(経日変化する光合成有効光量子束密度に対するキュウリ葉の光順化応答の推定)

過湿環境下の農地における土壌-植物-大気間の水移動に関する研究

Study on a Novel Air-assisted Electrostatic Centrifugal Spray System for Pesticide Anti-drifting Attached to a Multicopter UAV
(農薬ドリフト防止のためのマルチコプター型 UAV に搭載する革新的エアアシスト静電遠心スプレーシステムに関する研究)

A study on modeling the temperature environment of paddy fields
(水田における温度環境のモデル化に関する研究)

生物材料科学専攻

木材利用の環境経済評価に適した産業連関表の開発と応用

ナノセルロース材料の成形加工に関する研究

Structural analysis of cellulose synthesized by phosphorylase *in vitro*
(加リン酸分解酵素を用いて *in vitro* 合成したセルロースの構造解析)

Quantitative Study on the Condensation Reaction of Lignin under Alkaline Cooking Conditions
(アルカリ蒸解条件下におけるリグニンの縮合反応に関する定量的研究)

支圧応力下における木質系面材料の力学特性の解明

フェノール性水酸基を有するジバニリン酸由来ポリエステル合成と物性および生分解性

農学国際専攻

Decentralized Infrastructure for Transparency and Resilience in Agri-food Supply Chain
(農産物流通の透明性とレジリエンスを補完する分散型インフラに関する研究)

Endophytic fungi of tea plants under different agroecosystems: Diversity and their roles in biocontrol and plant growth promotion
(異なる農生態系におけるチャの内生菌：多様性と生物防除・生育促進機能)

Development of Non-destructive Strawberry Quality Evaluation System using *Vis-NIR* Spectroscopy and Digital Image Analysis
(*Vis-NIR* 分光と画像分析を用いた非破壊的なイチゴの品質評価システム)

Research on Synecoculture: Focusing on products and soils from a system-level perspective
(協生農法の研究：システムレベルの観点から産物や土壌に着目して)

自然農法の科学性と社会的役割の探究
Effect of impregnation with boron compounds on mechanical properties and structural features of softwood (ホウ素化合物の含浸が針葉樹材の機械的強度および構造特性に及ぼす影響)
Assessing the Impact of Tobacco Production on Forest Landscapes in Hurungwe District, Zimbabwe (ジンバブエ・フルングウェ地区におけるタバコ生産の森林景観への影響評価)
Studies on effect of bovine major histocompatibility complex (BoLA)- <i>DRB3</i> polymorphism on transmission risk of bovine leukemia virus in milk (ウシ主要組織適合遺伝子複合体による乳汁を介した牛伝染性リンパ腫ウイルスの伝播リスクの制御に関する研究)

生圏システム学専攻

Integrating ecosystem service knowledge into the sustainable ecosystem management of peri-urban watershed of Ussuri, China (中国ウスリー川流域の都市近郊域における持続可能な生態系管理に向けた生態系サービス知識の統合)
Genomic-assisted breeding for improving growth and wood property traits in hybrid larch (<i>Larix gmelinii</i> var. <i>japonica</i> × <i>L. kaempferi</i>) (雑種カラマツ (グイマツ×カラマツ) における成長と材質のゲノム育種)
複雑な相互作用系における外来生物の順応的最適管理に関する研究

応用動物科学専攻

Analysis of Phenotype and Autophagy Processing in RNase T2 Deficient Mice (RNase T2 欠損マウスの表現型およびオートファジー進行過程の解析)
マウスにおける eIF2A および eIF2D の循環器・内分泌系制御に関する研究
Studies on reproductive suppression targeting GnRH pulse generator in mammals (哺乳類の生殖中枢を標的とした繁殖抑制法に関する研究)
The involvement of multinucleated giant cells in the immunopathogenesis of visceral leishmaniasis (内臓型リーシュマニア症における免疫病態形成への多核化マクロファージの関与)
線維芽細胞増殖因子に着目した哺乳類卵巣機能制御に関する研究
Revealing the role of PGD ₂ /CRTH2 signaling in allergic reaction (アレルギー反応において PGD ₂ /CRTH2 シグナルが果たす役割の解明)
Molecular mechanism of IGF-independent MMP9 secretion by IRS2 in prostate cancer PC3 cells (前立腺がん細胞 PC3 における IRS2 による IGF 非依存的な MMP9 分泌の分子機構の解明)
Effects of mixed-strain co-housing on social buffering in rats (ラットにおける異系統共飼育が社会的緩衝に与える影響に関する研究)

獣医学専攻

コモンマームセットの安静時脳機能ネットワーク解析に適した麻酔管理方法の開発とその評価
孤束核の求心性情報伝達機構に対してジストロフィンの欠損が引き起こす可塑性に関する電気生理学的研究
ネコの腸管型 T 細胞リンパ腫の病態解明と病理診断における自動機械学習応用に関する研究
Protease-activated receptor-2 の腎障害における役割
Sex Differentiation and Sex Reversal in Fetal Mouse Testis (マウス胎子精巣における性分化および性転換)
Studies on the Effect of Virgin Coconut Oil on Prevention of Stroke in the Rat Model (ラットモデルにおける脳卒中予防に対するバージンココナツオイルの効果に関する研究)
The role of podoplanin in tumor progression of mucosal melanoma (粘膜型悪性黒色腫の腫瘍進行におけるポドプラニンの役割)
Study on infection network of <i>Toxoplasma gondii</i> (トキソプラズマ原虫の感染ネットワークに関する研究)
伴侶動物インフルエンザウイルスのヒトへの馴化機構に関する研究
イヌの脳血管アミロイド症の病理発生と食肉目動物間の病態比較に関する研究
食物アレルギーおよびアナフィラキシーにおける PAR-2 の役割についての研究
Research on novel treatment strategies for chronic kidney disease based on the antioxidant activity of 5-aminolevulinic acid (5-アミノレブリン酸の抗酸化作用に着目した慢性腎臓病の新規治療法の探索)
Development of an experimental model of intestinal hemorrhagic strangulation for the study of equine colic (ウマ疝痛の機序解明と治療に向けた腸管出血性絞扼を用いた実験モデルの開発に関する研究)
Analyses on the neuroanatomical basis of social buffering in rats (ラットにおける社会的緩衝の神経解剖学的基盤に関する研究)

(1) 農学部公開セミナー

最新の研究成果の社会への還元の一環として春と秋の年2回公開セミナーを企画し、2022年度までに63回実施した（第59回～62回はオンライン公開セミナーとして開催。第63回からオンライン併催）。

第62回

(第5回オンライン公開セミナー)
食品ロスを考える

2022年5月21日（土）（参加者420名程度）

(1) 「なぜ食品ロスを減らす必要があるのか？国内外の最新事情と取り組み」

株式会社office 3.11 代表取締役 井出 留美

(2) 「食品ロスを減らそう：素早く冷凍し、美味しく解凍する」

農学国際専攻 准教授 荒木 徹也

(3) 「水産物流通消費の特徴と食品ロス：ITは役立つのか？」

農学国際専攻 教授 八木 信行

第63回

共生か発酵か腐敗か：生活と微生物

2022年10月15日（土）

「参加者370名程度（現地102名/オンライン約270名）」

(1) 腸内フローラの働き

獣医学専攻 教授 平山 和宏

(2) 食品を腐敗させる微生物をはかる

生物・環境工学専攻 助教 吉村 正俊

(3) 日本ワインの現在と未来展望

シャトー・メルシャン ゼネラル・マネージャー/山梨県ワイン酒造組合会長 安蔵 光弘
映画監督 柿崎 ゆうじ

(2) 附属施設のイベント

日程	イベント名	附属施設名
2022年4月9日	「犬山の森」春のふれあい自然観察会	附属演習林生態水文学研究所
2022年4月17日	休日公開	附属演習林田無演習林
2022年4月23日	東大教職員向け特別ガイド「春の彩りを訪ねて」	附属演習林富士癒しの森研究所
2022年5月1日	休日公開	附属演習林田無演習林
2022年5月14～15日	試験一般開放	附属演習林富士癒しの森研究所
2022年5月15日	鴨川市・東京大学交流事業「野鳥の巣箱をかけよう！（野鳥観察会）」	附属演習林千葉演習林
2022年5月24日～ 2023年2月7日	農と食の体験塾2022 大豆編	附属生態調和農学機構
2022年6月5日	神社山自然観察路一般公開	附属演習林北海道演習林
2022年6月5日	第40回子ども樹木博士認定会	附属演習林田無演習林
2022年6月5日	とよた森林学校「森林入門セミナー」	附属演習林生態水文学研究所
2022年6月11日	ガイドツアー「しおじの会と東大秩父演習林を歩こう」	附属演習林秩父演習林
2022年7月22日	公開講座「東大の森林で昆虫採集」	附属演習林秩父演習林
2022年7月23～24日	千葉県立中央博物館・東京大学千葉演習林連携事業「夏の山の昆虫」	附属演習林千葉演習林
2022年7月28日	癒しの森の朝もや音楽会	附属演習林富士癒しの森研究所
2022年8月1～3日	高校生のための森と海のゼミナール ～大学の先生と考える環境問題と生物多様性～	附属演習林千葉演習林
2022年8月6日	公開セミナー「東大演習林をめぐる」	附属演習林北海道演習林
2022年8月7日	シデコブシの会 親子水生生物観察会	附属演習林生態水文学研究所
2022年9月13日	大麓山ハイキング登山会	附属演習林北海道演習林
2022年10月1日	東大教職員向け特別ガイド「きのこに親しむ」	附属演習林富士癒しの森研究所

2022年10月15日	第21回ホームカミングデイ・農場博物館特別公開（ガイドツアー）	附属生態調和農学機構
2022年10月30日	森の文化祭	附属演習林富士癒しの森研究所
2022年11月2日	公開講座「樹木のボディランゲージ」	附属演習林秩父演習林
2022年11月6日	第41回「子ども樹木博士」認定会	附属演習林田無演習林
2022年11月6日	とよた森林学校「森林と災害」	附属演習林生態水文学研究所
2022年11月12日	ガイドツアー「しおじの会と東大秩父演習林を歩こう」	附属演習林秩父演習林
2022年11月12日	犬山市秋のふれあい自然観察会	附属演習林生態水文学研究所
2022年11月27日	休日公開	附属演習林田無演習林
2022年12月4日	東大教職員向け「リース作り体験会」（ハイブリッド開催）	附属演習林田無演習林
2022年12月8日	100周年記念式典・シンポジウム	附属演習林生態水文学研究所
2023年1月14日	鴨川市・東京大学交流事業「野鳥の巣箱をかけよう！（巣箱作り編）」	附属演習林千葉演習林
2023年2月1日	ぶらり 東大の森さんぽ「冬の樹木園を歩こう」	附属演習林北海道演習林
2023年2月4日	東大教職員向け特別ガイド「冬の散歩みち」	附属演習林富士癒しの森研究所
2023年3月8日	公開講座「山中湖村のナラ枯れと富士癒しの森研究所の研究2022」	附属演習林富士癒しの森研究所



子ども樹木博士（写真提供：田無演習林）



大麓山ハイキング登山会での造材現場見学
（写真提供：北海道演習林）



第2回森の文化祭（写真提供：富士癒しの森研究所）

(1) 研究成果発表 (研究科WEBに掲載したもの。年月日は同サイト掲載日。役職は掲載当時)

掲載タイトル	発表者等 (役職は掲載当時)	WEB掲載日
猫の特発性膀胱炎の尿中バイオマーカー候補を発見	応用動物科学専攻 放射線動物科学教室 准教授 村田 幸久	2022年4月5日
加水分解酵素とキャリアタンパク質による新規なペプチド合成機構の解明	応用生命工学専攻 醗酵学研究室 准教授 勝山 陽平	2022年4月7日
放射性同位体を用いたポプラの季節的なリン転流経路の可視化～樹木の輸送をのぞいてみよう～	附属アイントープ農学教育研究施設 助教 栗田 悠子	2022年4月18日
立体構造に基づいた合理的デザインによる新規有用酵素の創出：ゲラニルピロリン酸メチル化酵素の反応機構の解明と機能改変	応用生命工学専攻 醗酵学研究室 准教授 勝山 陽平	2022年5月11日
スキー場であり続けることがチョウにとっては大切～グレンデの閉鎖はチョウ類相を衰退させることを発見～	生圏システム学専攻 准教授 曾我 昌史	2022年5月12日
植物ミトコンドリアのゲノム編集～細胞当たり数十から百個あるゲノムコピーの全てで、36万7千塩基対の中から標的的1塩基対だけを置換～	生産・環境生物学専攻 准教授 有村 慎一	2022年5月17日
匂いの質や快不快は脳のどこで、いつ処理されるのかー匂い情報を表象する脳活動の時空間ダイナミクスの解明ー	応用生命化学専攻 生物化学研究室 特任准教授 岡本 雅子	2022年5月19日
必須アミノ酸の摂取は動物の個体成長には必ずしも必須ではない	応用動物科学専攻 動物細胞制御学研究室 准教授 伯野 史彦	2022年5月25日
ソルガムの芒伸長はたった一つの顕性遺伝子で抑制できる	生産・環境生物学専攻 植物分子遺伝学研究室 助教 高梨 秀樹	2022年5月27日
オスマウスのフェロモンがオス間の争いを引き起こす神経メカニズムを解明	応用生命化学専攻 生物化学研究室 教授 東原 和成	2022年5月30日
糖化タンパク質受容体としての細胞膜ヒストン	応用生命化学専攻 食糧化学研究室 教授 内田 浩二	2022年5月30日
H7N2ネコインフルエンザウイルスには人でパンデミックを起こす潜在性がある	獣医学専攻 獣医微生物学研究室 教授 堀本 泰介	2022年5月31日
ゲノム中を動き回る新たな性決定遺伝子を発見	附属水産実験所 教授 菊池 潔	2022年6月3日
100年規模の河川洪水後における植物多様性の回復過程：攪乱レガシー (倒木、流木) が持つ生態系機能の検証	附属生態調和農学機構 助教 内田 圭	2022年6月13日
犬の肝臓腫瘍の尿中バイオマーカーを発見	獣医学専攻 放射線動物科学教室 准教授 村田 幸久	2022年6月14日
ヒトiPS細胞由来小腸オルガノイドを用いた生理的な小腸機能評価モデルの構築	応用生命化学専攻 食品生化学研究室 助教 高橋 裕	2022年7月8日
貧栄養環境で植物のバイオマスを増加させる新規技術開発に成功～貧栄養環境での栽培に適した作物の開発に期待～	応用生命化学専攻 植物栄養・肥料学研究室 准教授 神谷 岳洋	2022年7月12日
5秒おきの撮影で昆虫の訪花が種子生産に寄与するタイミングが明らかに～ハスの花を用いた実験的検討～	生産・環境生物学専攻 園芸学研究室 准教授 樋口 洋平	2022年7月12日
過去93年間の山中湖の湖水位上昇と降水量の関係の長期変化を解明	附属演習林 教授 蔵治 光一郎	2022年7月20日
貝殻の中にある基質タンパク質の多様性を生み出すメカニズムの解明	応用生命化学専攻 分析化学研究室 教授 鈴木 道生	2022年7月26日
A型インフルエンザウイルスの受容体特異性を機能的に評価する新奇の方法を確立	獣医学専攻 獣医微生物学研究室 准教授 村上 晋	2022年8月4日
各国産ビーポーレン (花粉荷) のNMRおよびHPLCによるメタボローム解析	応用生命化学専攻 食品生物構造学研究室 教授 永田 宏次	2022年8月9日
窒素肥料を減らしても収量を維持する野生イネ遺伝子資源を発見～低投入持続型農業を実現する作物の開発に期待～	応用生命化学専攻 植物栄養・肥料学研究室 教授 藤原 徹	2022年8月16日
天然有機化合物の生合成における新規アミノ基導入酵素の発見	応用生命工学専攻 分子育種学研究室 教授 葛山 智久	2022年8月17日
過去35年にわたる日本全国の水田の分布変化を30mの解像度で地図化ー水田の光反射特性の季節変化に着目した新手法による推定ー	生圏システム学専攻 生物多様性科学研究室 助教 藤田 剛	2022年8月24日
光触媒で致死率の高い肺炎の原因であるレジオネラ菌の殺菌と敗血症を惹起するそのエンドトキシンの分解に成功	農学国際専攻 地球規模感染症制御学社会連携講座 特任教授 間 陽子	2022年8月30日

掲載タイトル	発表者等（役職は掲載当時）	WEB掲載日
野外のイエネコとクマネズミから明らかになったトキソプラズマ感染のホットスポット——牛舎のネコ管理がカギ?——	生圏システム学専攻 生物多様性科学研究室 教授 宮下 直	2022年9月5日
犬の脾臓腫瘍の尿中バイオマーカーを発見	獣医学専攻 獣医薬理学研究室 准教授 村田 幸久	2022年9月6日
日本のコウモリからMERS関連コロナウイルスを検出	獣医学専攻 獣医微生物学研究室 准教授 村上 晋	2022年9月16日
COVID-19患者の尿中に排泄される脂質代謝物の発見——簡便かつ迅速な検査キットの開発に向けて——	獣医学専攻 放射線動物科学教室 准教授 村田 幸久	2022年9月26日
多価不飽和脂肪酸 γ リノレン酸の腸内乳酸菌代謝物（ γ HYD、 γ KetoD）が、核内受容体PPAR δ を介してヒトiPS細胞由来小腸オルガノイドの脂質代謝を改善する機構を解明	応用生命化学専攻 社会連携講座「栄養・生命科学」 特任准教授 清水 誠	2022年9月29日
寄生虫に感染したマクロファージが多核化する機構	応用動物科学専攻 応用免疫学研究室 教授 後藤 康之	2022年10月3日
地球温暖化はしいたけ生産と品種選択を変えるか～国東半島宇佐地域GIAHSにおける生産者聞き取りと遺産エリアの風土の分析	森林科学専攻 森林風致計画学研究室 教授 香坂 玲	2022年10月5日
カルボキシル化セルロースナノクリスタルの熱挙動：表面化学と対イオンの影響	生物材料科学専攻 特別教授 磯貝 明	2022年10月5日
セルロースナノファイバーに生じた原子レベルの欠陥構造を発見～理想的なバイオポリマー材料の生産にむけて～	生物材料科学専攻 製紙科学研究室 教授 齋藤 継之	2022年10月6日
骨格筋が分泌するエクソソームの特異的マーカーを同定することで骨格筋エクソソームの新しい機能を発見	応用生命化学専攻 食品生化学研究室 准教授 山内 祥生	2022年10月7日
ヒトiPS細胞を活用してフレイルの危険因子が筋萎縮を促進することを明らかにし、その予防や治療に有望な標的分子を発見	応用生命化学専攻 食品生化学研究室 准教授 山内 祥生	2022年10月12日
ジアゾ化を伴う新規芳香族アミノ基除去機構を放線菌二次代謝において発見	応用生命工学専攻 醗酵学研究室 准教授 勝山 陽平	2022年10月21日
ポリフェノールによる化学修飾を介したタンパク質の機能獲得	応用生命化学専攻 食糧化学研究室 教授 内田 浩二	2022年10月24日
デュシェンヌ型筋ジストロフィーラットの舌では病態進行が抑制されている	獣医学専攻 獣医生理学教室 教授 山内 啓太郎	2022年10月25日
紙の100倍以上の高熱伝導性を有する木質バイオマス素材を実現—放熱性能を要求される高分子材料の代替材として期待—	生物材料科学専攻 製紙科学研究室 教授 齋藤 継之	2022年10月28日
二次代謝物シデロフォアによる分裂酵母の適応生育と一次代謝への影響	応用生命工学専攻 微生物学研究室 教授 吉田 稔	2022年10月28日
アレルギー性鼻炎を増悪する因子の発見	応用動物科学専攻 放射線動物科学教室 准教授 村田 幸久	2022年11月1日
「共通だが差異ある責任」の原則は生物多様性に適用できるか？データ更新の必要性和各国の能力に基づく責任分担の提案	森林科学専攻 森林風致計画学研究室 教授 香坂 玲	2022年11月4日
根寄生雑草被害防除に光明！——植物ホルモントリゴラクトンの分子種による機能分担の解明と根寄生雑草被害防除法の発見	応用生命化学専攻 生物制御化学研究室 教授 浅見 忠男	2022年11月4日
昆虫味覚受容体の糖認識と活性化機構の立体構造モデル	応用生命化学専攻 生物化学研究室 教授 東原 和成	2022年11月10日
硝酸シグナル伝達による強光ストレス環境への適応力の強化	附属アグロバイオテクノロジー研究センター 教授 柳澤 修一	2022年11月11日
メスだけが生き残る仕組み——オスを狙って殺す共生細菌ボルバキアタンパク質Oscar（オス狩る）の発見——	生産・環境生物学専攻 昆虫遺伝研究室 教授 勝間 進	2022年11月15日
森林環境譲与税による47都道府県の森林データ整備の活用状況：鍵は私有林人工林の存在感	森林科学専攻 森林風致計画学研究室 教授 香坂 玲	2022年11月18日
日本のコウモリから新型コロナウイルスに近縁なウイルスを分離	獣医学専攻 獣医微生物学研究室 准教授 村上 晋	2022年11月28日
植物が根から鉄を吸収する機構の解明—不良土壌を改善する次世代肥料の開発に期待—	応用生命工学専攻 生物情報工学研究室 准教授 寺田 透	2022年12月5日
免疫抑制剤の新しい作用メカニズムの解明——FKBP12は真菌のイソロイシン合成酵素を抑制する——	応用生命工学専攻 微生物学研究室 教授 吉田 稔	2022年12月14日
日本人のプレジジョン栄養に重要な遺伝子多型を発見	応用生命化学専攻 健康栄養機能学社会連携講座 特任教授 加藤 久典	2022年12月21日
ほ乳類の精子形成を支える精巢の弁構造：セルトリバルブ—精巢の出口部分での管腔液の流れの制御機序の解明—	獣医学専攻 獣医解剖学教室 教授 金井 克晃	2022年12月22日
セルロースの表面を溶かして分解する酵素の機能を解明——70年にわたる議論に終止符——	生物材料科学専攻 森林化学研究室 教授 五十嵐 圭日子	2022年12月24日

掲載タイトル	発表者等（役職は掲載当時）	WEB掲載日
トルコギキョウのゲノムを解読～新品種育成への足掛かり～	附属生態調和農学機構 教授 河緒 実之	2022年12月27日
分子鎖の枝を“接ぎ木”したセルロースナノファイバーの構造を解明	生物材料科学専攻 製紙科学研究室 助教 藤澤 秀次	2023年1月4日
日本における動物病理解剖症例の変遷——明治から令和における動物の病気の移り変わり——	獣医学専攻 獣医病理学研究室 教授 内田 和幸	2023年1月5日
低線量の長期被ばくが生体に与える影響の評価	獣医学専攻・獣医薬理学研究室/ 応用動物科学専攻 放射線動物科学教室 准教授 村田 幸久	2023年1月6日
コメ増収はマダガスカル農家の栄養改善に有効—主食作物の生産性向上によりアフリカの栄養問題解決に期待—	農業・資源経済学専攻 農村開発金融研究室 教授 櫻井 武司	2023年1月12日
ムスクの香りの感度に影響を与える嗅覚受容体の遺伝子多型の発見——ある匂いの感じ方から別の匂いの感じ方を予測できる可能性——	応用生命化学専攻 生物化学研究室 教授 東原 和成	2023年1月13日
ドローン写真測量により果樹枝構造を可視化、自動計測が可能に	附属生態調和農学機構 准教授 郭 威	2023年1月27日
酸化ステロールの真の役割に迫る：コレステロールの水酸化反応によって引き起こされる脂質代謝変化を明らかに	応用生命化学専攻 食品生化学研究室 准教授 山内 祥生	2023年2月6日
一酸化窒素はDNA修飾の制御因子であることを発見——特異的阻害薬の開発に成功し、がんなどの疾患治療薬としての応用に期待——	応用生命化学専攻 食糧化学研究室 教授 内田 浩二	2023年2月15日
葉が退化したラン科植物「クモラン」の根は、葉の代わりにしていた	附属アイソトープ農学教育研究施設 教授 田野井 慶太郎	2023年2月16日
木材由来のセルロースナノファイバーから、アルミニウム合金並の強度と自己消火性を兼ね備えた、透明な板材を開発	生物材料科学専攻 教授 齋藤 継之	2023年2月17日
イネがマグネシウム濃度を維持するしくみの手がかりが見つかる——植物のマグネシウム濃度恒常性に関する分子の発見——	附属アイソトープ農学教育研究施設 教授 田野井 慶太郎	2023年2月22日
深層学習を用いた多頭マウスの追跡技術の開発	獣医学専攻 准教授 村田 幸久	2023年2月24日
酪農家における多剤耐性菌の存在と抗菌剤使用量との間の相関関係が明らかに	寄付講座 持続可能な自然再生科学研究 特任教授 杉浦 勝明	2023年2月28日
スギ林は30分ごとに、しかも1年で、どんだけ二酸化炭素を吸ってるのか	森林科学専攻 教授 熊谷 朝臣	2023年3月9日
なぜ温暖な森林は生産量が大きいのか?——樹木群集の炭素量分布が森林の生産量に貢献する——	生圏システム学専攻 助教 甲山 哲生	2023年3月14日
「多細胞生物」である糸状菌の細胞どうしをつなぐ穴を制御する多数の因子を発見——糸状菌の形態機能の獲得にともなう遺伝子進化を解明——	応用生命工学専攻 特任教授 丸山 潤一	2023年3月17日
D型インフルエンザウイルスの高温感受性株を作出：弱毒生ワクチン開発に期待	獣医学専攻 准教授 村上 晋	2023年3月20日
記憶メカニズム研究や中枢神経系疾患の治療薬開発に有用なヒト神経細胞の作製に成功——転写因子で分化誘導されたヒトiPSC由来神経細胞で迅速な樹状突起スパイン形成とシナプス機能の成熟化を達成——	獣医学専攻 特任教授 關野 祐子	2023年3月24日
圃場におけるダイズ子実数の計数AIを開発——収量予測技術や品種選抜の加速へ期待——	附属生態調和農学機構 准教授 郭 威	2023年3月28日
プロテインノックダウン技術の確立に一步近づく——花を葉化する細菌タンパク質「ファイロジェン」の花形成タンパク質認識機構を解明——	生産・環境生物学専攻 准教授 前島 健作	2023年3月30日

(2) 受賞等（研究科WEBサイトに掲載したもの。年月日は同サイト掲載日。役職は受賞時当時）

授賞等	専攻等	受賞者（役職は受賞当時）	WEB掲載日
日本造園学会田村剛賞	森林科学専攻	山本清龍 准教授	2022年6月22日
The 8th International Symposium on Metallomics Molecular Omics Award	応用生命化学専攻	陸鵬 助教	2022年7月25日
第40回日本土壌肥料学会奨励賞	応用生命化学専攻	山崎清志 特任講師	2022年9月27日
第21回日本農学進歩賞	農学国際専攻	阪井裕太郎 准教授	2022年10月24日
文化功労者	応用生命工学専攻	吉田稔 教授	2022年11月7日
江崎玲於奈賞	生物材料科学専攻	磯貝明 特別教授	2022年11月17日
第13回日本学術振興会育志賞	生産・環境生物学専攻	中里一星（博士課程1年）	2023年1月23日
日本農業気象学会学術賞	生物・環境工学専攻	松田怜 准教授	2023年3月28日

(1) 国際交流協定

国際交流協定は、下記一覧表のとおり22の国・地域と48の協定が締結されており、関係専門分野を中心に学術交流・学生交流が行われている。そのうち、南開大学（中国）、ボン大学（ドイツ）との全学協定では担当部局として学内の中心的役割を果たしている。

相手国	相手大学（機関）	締結年月日/最終更新日	専門分野	学生交流の覚書 (授業料不徴収)
インド	タミルナードゥ農業大学	2013年 5月27日 2018年 5月27日	農学、生物資源環境学	○
インドネシア	ボゴール農科大学（IPB）	1988年10月21日 2021年12月28日	農学	○
	ムラワルマン大学	2006年 1月27日 2022年 4月28日	農学・生物資源環境学	○
	ランブン大学農学部	2014年 4月16日 2019年 4月16日	農学	○
韓国	ソウル大学校農業生命科学大学	2006年 9月 9日 2016年 9月 9日	農学（獣医学を除く）	○
	ソウル大学校獣医科大学	2016年 5月20日 2021年 5月20日	獣医学、畜産学、応用動物科学	○
	釜慶大学校水産科学大学	2007年 1月24日 2017年 1月24日	水産科学、海洋科学	○
	釜慶大学校環境海洋大学	2007年 1月24日 2017年 1月24日	水産科学、海洋科学	○
カンボジア	カンボジア農業開発研究所	2009年 7月15日 2019年 7月15日	農学、生物資源環境学	
スリランカ	ルフナ大学	2011年 6月 7日 2016年 6月 7日	農学	○
タイ	カセサート大学獣医学部・農学部・林学部	1998年 6月 8日 2020年 8月27日	農学、生物資源環境学	○
	コンケン大学農学部	2009年 2月 3日 2019年 2月 3日	農学	○
	農業研究開発庁	2011年 7月12日 2018年12月 7日	農学	
	チェンマイ大学	2016年 6月 8日 2021年 6月 8日	農学	○
	チュラロンコン大学	2018年10月19日	農学	○
台湾	国立台湾海洋大学	2006年 4月27日 2016年 4月27日	水産学・海洋科学	○
	国立中興大学獣医学院	2008年 3月26日 2018年 3月26日	獣医学	○
	国立屏東科技大学獣医学院	2015年 6月12日 2020年 6月12日	獣医学	○
	国立台湾大学生物資源農学院	2016年 6月 7日 2021年 6月 7日	農学	○
中国	北京林業大学 (北京林学院)	1984年 2月25日 2021年 7月11日	農学	○
	東北林業大学	1996年12月23日 2022年 2月 9日	農学、生物資源環境学	○
	中国農業大学	1997年 9月17日 2018年11月28日	農学	○
	南京林業大学	2002年 3月 9日 2022年 3月 9日	農学、生物資源環境学	○
	中国科学院南京土壤研究所	2007年 1月 5日 2022年 1月 5日	環境保全研究分野	
	南京農業大学	2007年 3月21日 2022年 3月21日	農学、生物資源環境学	○
	*南開大学	2010年12月 6日 2020年12月 6日	農学を含む全分野	○
	西南大学	2014年 1月 8日 2019年 1月 8日	農学、生物資源環境学	○

中国	海南大学林学院	2017年10月28日 2022年10月28日	農学	○
	浙江農林大学	2016年12月14日 2021年12月14日	農学、生物資源環境学	○
	福建農林大学	2018年 4月18日	農学、生物資源環境学	○
	河南科技大学	2018年 6月22日	農学、獣医学	○
ネパール	トリブヴァン大学林業研究所	2019年12月15日	農業経済学、林学、国際農学	
バングラデシュ	バングラデシュ農業大学	2021年11月 2日	農学	○
フィリピン	セントラル・ルソン州立大学	2018年 5月22日	農学、水圏生物科学	
		2023年 5月22日		
ベトナム	ベトナム国立農業大学 (ハノイ農科大学)	1995年12月25日 2020年12月25日	農学、生物資源環境学	○
	カントー大学	2010年 7月19日 2020年 7月19日	農学	○
マレーシア	マレーシア・サバ大学	2017年 6月12日 2022年 6月12日	熱帯森林科学	○
ミャンマー	イエジン農業大学	2017年 7月21日	農学	
モンゴル	モンゴル生命科学大学	2003年10月13日 2018年10月 8日	応用生物科学	○
	モンゴル国立大学	2018年 1月23日	農学	○
トルコ	エーゲ大学医学部	2014年 7月24日 2019年 7月24日	農学、医学	
アルゼンチン	ラ・プラタ大学	1990年12月 6日 2020年12月 6日	獣医学	
アメリカ合衆国	ミネソタ大学バイオテクノロジー研究所	2017年 4月 5日 2022年 4月 5日	農学	
イギリス	ニューカッスル大学農業食料農村振興研究所	2017年 4月 3日 2022年 4月 3日	農学	
スウェーデン	スウェーデン農科大学	2004年 8月23日 2019年 8月23日	農学	○
ドイツ	カールスルーエ工科大学	2010年12月 7日 2020年12月 7日	農学	○
	* ボン大学	2016年 2月 3日 2021年 2月 3日	農学、薬学、医学などの自然科学分野	○
フランス	アグロパリテック (パリ・グリニオン国立農学院)	1996年 1月30日 2021年 3月18日	農学	○

*印は全学協定

(2)教員の海外渡航

教員の海外渡航は、渡航先も多岐にわたり多数の国々が本研究科教員の研究交流の対象となっている。事業別に分類してみると、文部科学省並びにその他の政府関係機関が23%、科学研究費補助金が10%、その他の国内資金が40%となっている。

教員の海外渡航件数（事業別）

区 分	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
1.文部科学省事業	2	1	0	0	2
2.科学研究費補助金	168	204	2	10	21
3.その他の政府関係の派遣	174	129	1	3	49
(1) 日本学術振興会	(37)	(38)	(1)	(0)	(5)
(2) 国際協力機構	(10)	(9)	(0)	(0)	(0)
(3) その他	(127)	(82)	(0)	(3)	(44)
4.その他の国内資金	179	148	1	3	86
5.外国政府・研究機関等	73	51	1	4	2
6.私費	3	4	0	0	8
合 計	599	537	5	20	217

教員の海外渡航件数（地域別）

地域	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
北 米	98	88	2	10	42
中南米	26	12	0	0	3
ヨーロッパ	99	112	2	4	60
アフリカ	15	13	0	2	15
中近東	11	3	0	0	3
中 国	70	82	1	3	1
韓 国	49	36	0	0	9
その他のアジア	211	179	0	1	73
オセアニア	20	12	0	0	11
合 計	599	537	5	20	217

※複数の地域を同一の事業で渡航した場合、複数の事業として計上。

(3)外国人研究者等の受入れ

海外との学術交流は、外国人研究者等の受入れの面でも活発に行われており、アジアからの研究者が全体の7割を占めているのが特徴だが、部局協定などに基づいて、世界各国から研究者を受け入れている。このほかに視察などの目的で本研究科を訪れる外国人の数も多数にのぼっている。

外国人研究者等の受入人数（事業別）

区 分	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
1.文部科学省事業	0	0	0	0	3
2.科学研究費補助金	7	16	7	7	13
3.その他の政府関係機関	86	65	25	17	19
(1) 日本学術振興会	(23)	(17)	(7)	(3)	(8)
(2) 国際協力機構	(15)	(1)	(0)	(0)	(0)
(3) その他	(48)	(47)	(18)	(14)	(11)
4.その他の国内資金	34	89	52	33	60
5.外国政府・研究機関等	0	0	0	7	0
6.私費	123	74	0	20	0
合 計	250	244	84	84	114

外国人研究者等の受入人数（地域別）

地域	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
北 米	15	11	4	3	9
中南米	8	2	2	3	2
ヨーロッパ	65	26	9	6	4
中近東	2	6	3	5	3
中 国	65	98	40	44	55
韓 国	7	11	6	7	6
その他のアジア	85	81	15	12	30
オセアニア	1	1	1	1	2
アフリカ	2	8	4	3	3
合 計	250	244	84	84	114

(4)留学生の受入れ

本研究科では大学院生を中心に多数の留学生を受入れており、2023年5月1日現在の大学院留学生は360名である。全大学院生に占める留学生の割合は、30%以上であり、これは本学でも高い比率である。

出身国・地域別に見ると、アジアを中心に多様な44ヶ国・地域から留学生を受け入れている。

課程別の在籍者数は、博士課程53.9%、修士課程37.5%、研究生8.6%であり、博士課程在籍者数の割合が非常に高い。

専修別留学生数（2023.5.1現在）

学部：応用生命科学課程3名

獣医学課程1名

専攻別留学生数

（各年度5.1現在）

年	専攻名	環境生物学 生産・ 生物学	応用生命化学	応用生命工学	森林科学	水圏生物科学	資源経済学 農業・ 資源学	環境工学 生物・ 工学	生物材料科学	農学国際	生圏システム学	応用動物科学	獣医学	合計
2019	修士課程	8	17	9	11	10	11	4	5	36	3	2		116
	博士課程	11	25	19	15	26	8	9	15	22	3	5	17	175
	外国人研究生	1	4	8	2		2	2		6	3	1		29
	合計	20	46	36	28	36	21	15	20	64	9	8	17	320
2020	修士課程	10	13	15	10	11	7	7	8	35	7	6		129
	博士課程	13	27	14	6	25	10	6	12	26	4	6	12	161
	外国人研究生	3	3	8	4	3	1	5	1	3	3	1	2	37
	合計	26	43	37	20	39	18	18	21	64	14	13	14	327
2021	修士課程	8	18	21	8	11	4	12	8	40	9	8		147
	博士課程	17	27	15	8	29	13	7	8	25	4	6	12	171
	外国人研究生	1	4	8	3	1		4		2	4	1		28
	合計	26	49	44	19	41	17	23	16	67	17	15	12	346
2022	修士課程	11	18	17	7	10	7	9	9	40	12	6		146
	博士課程	19	26	16	6	27	15	7	5	32	7	5	10	175
	外国人研究生	1	6	6	3		2	1		3	4	3	4	33
	合計	31	50	39	16	37	24	17	14	75	23	14	14	354
2023	修士課程	13	16	12	4	11	14	5	7	32	12	9		135
	博士課程	19	28	22	8	26	18	5	7	36	8	5	12	194
	外国人研究生	1	5	4	4	1	3	1		3	1	3	5	31
	合計	33	49	38	16	38	35	11	14	71	21	17	17	360

※「外国人研究生」に特別研究学生、特別聴講学生は含まない。

大学院留学生在籍数（出身国・地域別）

地域	国または地域名	2019年度			2020年度			2021年度			2022年度			2023年度		
		国費	私費	合計												
		38カ国・地域			43カ国・地域			39カ国・地域			46カ国・地域			44カ国・地域		
アジア	インド	2	1	3	2	1	3	1	1	2	3		3	4		4
	インドネシア	5	9	14	6	8	14	6	9	15	6	7	13	3	11	14
	カンボジア	1		1	1		1	1		1		1	1			
	シンガポール								1	1		2	2		1	1
	スリランカ	5	1	6	4	1	5	1	5	6	1	4	5	2	4	6
	タイ	4	5	9	3	4	7	2	3	5	3	1	4	5	1	6
	ネパール	2		2	2		2	1		1	1		1			
	パキスタン	1		1	1		1				1		1	1		1
	バングラデシュ	5	2	7	5	1	6	3	3	6	3	3	6	3	5	8
	フィリピン	5		5	3		3	1	2	3	7	2	9	8	3	11
	ブータン					1	1		3	3		4	4		2	2
	ベトナム	4	5	9	3	4	7	1	4	5		4	4		4	4
	マレーシア	4	2	6	3	1	4	2	1	3	3	1	4	3	1	4
	ミャンマー	2		2	3		3	2	1	3	4	2	6	5	1	6
	モンゴル	1	1	2	1	1	2	1	1	2						
	韓国	1	9	10	1	8	9	1	10	11	1	6	7	1	3	4
	台湾		16	16		15	15		13	13		7	7		9	9
中国	21	178	199	17	198	215	16	217	233	12	220	232	13	223	236	
中国（香港）							1	2	3	1	1	2		1	1	
小計		63	229	292	55	243	298	40	276	316	46	265	311	48	269	317
中近東	イラン		1	1		1	1		1	1		2	2		1	1
	シリア										1	1	1		1	
	小計		1	1		1	1		1	1	1	2	3	1	1	2
アフリカ	ウガンダ										1	1	1		1	
	エジプト		1	1		1	1		2	2		2	2		2	2
	ガーナ	1	1	2		2	2	2	1	3	2		2	3	1	4
	ガーボベルデ				1		1	1		1	1		1		1	1
	カメルーン										1	1	2	1	1	2
	ガンビア		1	1		1	1									
	ケニア		1	1								1	1		1	1
	ジンバブエ				1		1	1		1	1		1			
	タンザニア		1	1		1	1							1		1
	チュニジア	1		1	1		1	1		1		1	1		1	1
	トーゴ														1	1
	ナイジェリア							1		1	1	1	2	1	1	2
	ブルキナファソ	1		1	1		1		1	1		2	2		2	2
	ベナン	1	1	2	1	1	2	1		1	1		1	2		2
	マダガスカル		2	2				1		1	1		1	1		1
	マラウイ											2	2		3	3
	南アフリカ								1	1		1	1			
南スーダン														1	1	
モロッコ											1	1		1	1	
リベリア														1	1	
ルワンダ		1	1													
小計		4	9	13	5	6	11	8	5	13	9	12	21	10	17	27
ニア オセア	ソロモン諸島														1	1
	小計													0	1	1
北米	カナダ		1	1		1	1		1	1		1	1			
	アメリカ合衆国		3	3	1	3	4	1	3	4	2	6	8	2	4	6
	小計		4	4	1	4	5	1	4	5	2	7	9	2	4	6
中南米	アルゼンチン		1	1		1	1		1	1		1	1			
	コスタリカ										1		1	1	1	
	コロンビア	2		2		1	1	1	1	2	1		1	1	1	
	ブラジル	1		1	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	
	ベリーズ				1		1	1		1	1		1	1	1	
	ペルー		1	1		1	1									
	ボリビア	1		1	1		1		1	1						
メキシコ		1	1		1	1		2	2		1	1				
小計		4	3	7	3	5	8	3	6	9	4	3	7	4	0	4
ヨーロッパ	アルメニア											1	1		1	1
	イギリス		1	1		1	1									
	イタリア				1		1	1		1		1	1			
	オーストリア													1		1
	フランス		1	1		1	1		1	1		1	1		1	1
	ポルトガル	1		1		1	1									
小計		1	2	3	1	3	4	1	1	2		3	3	1	2	3
合計		72	248	320	65	262	327	53	293	346	62	292	354	66	294	360

※特別研究学生は含まない。

(5) 国際交流室・国際学務支援チームの留学生への対応

本研究科・学部には、約380人の留学生が在籍しており、これらの留学生を支援することが国際交流室・国際学務支援チームの主要な役割である。国際交流室は、常勤教員1名、主事員1名と、5専攻から選出された教員（室長1名と室員4名）の計7名で構成され、留学生の日常生活や大学での様々な疑問や悩みごとをめぐり相談に応じている。一方、教務課国際学務支援チームでは、留学生のビザ申請、宿舎、奨学金などに関する支援を行っている。

国際交流室では、留学生向けの各種情報を日・英両言語でホームページに掲載している他、「Welcome Guide」の作成、オリエンテーションの実施、ツイッターを通じた情報発信などもしている。更に、海外留学や国際キャリアを考えている学生や、留学生のチューター、入学希望者からの問い合わせにも対応している。

交流行事として、2022年度は、感染症対策をとりながら、日本の大衆芸能である太神楽や紙切りを観覧する会や、すみだ水族館の見学旅行、六義園での抹茶体験などを開催した。留学生と日本人学生が昼食を取りながら交流するカンパシーション・テーブルは、2022年度はZoomでの実施であったが、2023年4月以降、毎週対面開催している。



六義園



すみだ水族館

(6) 農学国際専攻での農学国際実地研究

農学国際専攻の大学院生には、カリキュラム「農学国際実地研究（海外実習）」の選択により単位を取得する機会が与えられている。この実習は、教員が引率する比較的短期間のスタディーツアーに参加する場合と、長期滞在型の調査研究を行う場合とがある。後者は、教員が参画している海外プロジェクト研究などでの協力関係をベースにして、海外の大学やFAOなどの国際機関に指導を依頼して行われることが多い。また、博士課程学生の場合は、フィールドワークに加えて行った国際学会等での研究成果発表も単位取得の一部としてカウントされる。

これらの多様な海外活動では、発展途上国の農山村地域の実態を把握する調査のみならず、食料・環境・エネルギー・貧困等の問題解決のためのプロジェクトに参加することもできる。そして、プロジェクトの批判的検討や、合理的に推進するためのスキームを構築したり、目的を達成するための科学的分析や政策提言の方法論について、国際協力の現場で実務に携わる人々と議論する機会もある。

（なお、大学院生は農学国際実地研究に要する経費の一部について、東京大学農学部創立百二十五周年記念事業によって創設された国際交流事業基金からの資金援助を申請できる。）



「農学国際実地研究：シベリアにおける植生調査（ロシア）」

教育研究活動の中でさまざまな実験や野外活動が行われる大学では、そこで生じがちな事故や災害を未然に防ぐ安全衛生管理が欠かせない。また、国立大学法人化によって労働安全衛生法他への対応が必要となった。そのため安全衛生管理にフォーカスした部署である環境安全管理室は次のような教育研究活動への支援を行い事故・災害の防止に努めている。多数の研究室が多彩な活動を行っている当研究科では、各研究室共通の安全衛生活動の仕組みである教育研究安全衛生マネジメントシステム（MS）を、全学に先駆け導入した。MSの主な目的は潜在的な危険有害性の評価（リスクアセスメント）と安全確保技術の伝承による事故災害の防止である。MSのベースは一般企業等で採用されている労働安全衛生マネジメントシステムだが、これを教育研究の現場に適応するよう修正を加えた。2006年度（平成18年度）の4研究室による試行を経て、2007年度から附属施設を含む全研究室で本格的に始動した。始動に際しては2006年度MS発表会（1回）、MS説明会（9回）、民間企業等見学会（4回）等の開催や、MSワーキンググループによる活動推進を行った。2022年度（令和4年度）は、89%の研究室でリスクアセスメントに着手し、83%の研究室がplan-do-check-actの1年間の活動サイクルを回した。

当研究科の野外活動は年間600～700件前後にも及ぶが、2022年度（令和4年度）もCOVID-19による活動制約を受けたものの、感染症対策を図った上で567件の活動が行われた。学生だけで行う活動も多いため、2005年度に発生した無免許潜水作業中のリサーチフェローの死亡事故を受けて、2006年度から野外活動安全衛生管理計画書の事前提出を義務づけ、野外活動計画書ワーキンググループによる検討を毎週行い、野外活動時の事故防止に努めている。

新しく着任した教職員や新生生に対する安全衛生健康ガイダンス、消火訓練や避難・安否確認を含む総合防災訓練等様々な活動を行っている。実験用化学物質・廃棄物の管理状況の把握と助言、不要な試薬や物品の早期排出の促進、化学物質や紫外線露出から身を守る保護具の着用に関する助言、地震など災害時の物品の転倒・落下防止対策提示、ゴミカートへの不適切な分別廃棄への注意喚起等も行っている。2008年秋に旧附属農場において、農薬としての登録が失効し使用できなくなっていた水銀剤が使われたことが判明して以来、旧農場において特別の管理体制を組むなど、農薬の管理に特に注意をしている。

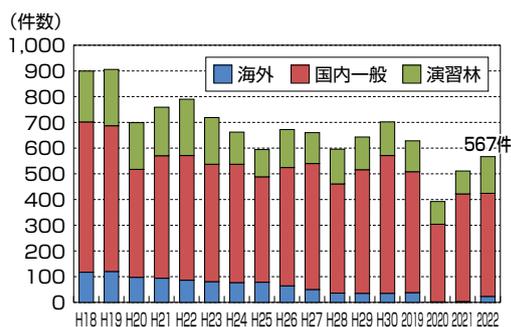
2022年度は休業災害が2件発生し、内訳は通勤通学災害1件、屋外作業1件であり、前年度と比較して大幅に減少したが、依然として通学時の転倒事故が発生した。人的災害を伴わない物損・設備災害は17件であった。重大事故として実験操作に伴う火災や電気火災が3件発生し、前者は休日夜に学生単独での危険な実験操作によるものであった。

COVID-19により安全な実験操作の伝承が途切れないよう、リスクアセスメントを通じた危険源の洗い出しや安全対策の再確認、繰り返しの安全教育の徹底が求められる。

大学における教育・研究が先端的なものであればあるほど、それに対応した積極的な安全意識を身につけた若者の育成の支援も大学における環境安全管理室の責務である。



事故後の安全対策の確認（2022年度 研究科長パトロール）



部局災害対策本部（2022年度研究科総合防災訓練）



水消火器訓練の様子（2022年度研究科水消火器訓練）

14

領域横断型教育プログラム

(1) アグリコクーン

アグリコクーン（産学官民連携型農学生命科学研究インキュベータ機構）は、領域横断型教育プログラムとして2005年にスタートしました。アグリコクーン教育プログラムでは、農学ならではの6つの学際的なテーマが設定されていて、分野横断的な授業、セミナーやシンポジウム、現地実習などから構成されています。

6つのテーマとは、食の科学、バイオマス利用研究、国際農業と文化、生物多様性・生態系再生、情報利用研究、放射線影響です。テーマごとに「フォーラムグループ」が設置されていて、そこには専攻を超えた延べ約60名の教員が参加しています。フォーラムグループをベースにそれぞれが特徴ある活動を進めています。

6つのフォーラムグループ合計で12科目の授業が行われています。当初は大学院生向けの授業でしたが、2011年度からは一部の授業を学部学生が受講できるようにして、専門的な授業の早期履修制度に取り組んできました。毎年延べ約250名以上の学生が受講しています。授業では、国内外の研究者や開発者、ベンチャーやスタートアップを含めた実務家を招いた講演やセミナーを開催することが多く、最新の学外の研究内容や社会実装、社会課題の解決といった奥深い話題に触れることができます。現地の協力を得て現地実習も行っています。

アグリコクーンで企画されたセミナー・シンポジウム等はこれまでの18年間に140回以上開催されました。アグリコクーンの活動は定型化されていないものが多く、常に新しい課題に挑戦しています。それらが円滑に進められるように専任のオフィスがサポートしており、研究科全体の教育・研究・広報活動にも広く関わっています。

(2) アグリバイオインフォマティクス教育研究プログラム

農学生命科学分野におけるバイオインフォマティクスの重要性は、ますます高まっています。食、環境、生命に関わる今日の重要な社会問題に対応するため、その具体的な方法論として、また細分化された専門分野を統合する手段として、バイオインフォマティクスは必要不可欠となっています。「アグリバイオインフォマティクス教育研究プログラム」は、2004年に発足して以来、19年間にわたり、農学生命科学分野におけるバイオインフォマティクスの教育・研究活動に取り組んでいます。

本プログラムは、フィールド系も含めたバイオインフォマティクスの基礎、方法論、先端トピックスの15の科目を用意し、目的に応じ選択して受講することができるようにしています。基礎と方法論の科目は、すべて実習と一体化した講義で、実践的な技術を身につけることができます。本学の大学院生だけでなく、他大学の学生や社会人の方も受講することができます。これまで、本研究科だけでなく他研究科、他大学や社会人を含め、2,837名（延べ7,830名）が受講してきました。所定の単位を取得した人には修了証を発行しており、これまで278名に授与しています。また、学部の展開科目も開講しています。

そのほか、一般社団法人バイオ産業情報化コンソーシアム（JBIC）会員企業向けの講習会など、様々な実践的教育も実施しています。また、データ解析に関する相談窓口としての役割やWeb連携テキストという特徴をもった次世代の教科書の刊行など、日本のバイオインフォマティクス教育拠点としての役割を担っています。

(3) One Earth Guardians育成プログラム

One Earth Guardians育成プログラムは、2018年度から受講生を迎えて活動を開始しました。SDGsに表されるように、私たちは今、すべての生物が暮らす地球環境の持続可能性と人類の生活をいかに両立させていくのかという大きな課題に直面しています。このプログラムは、生物資源の利用に根ざした実学たる農学の原点に立ち返り、100年後の地球のために、社会を巻き込みながら行動できる科学者の集団『One Earth Guardians (OEGs)』の育成を目指しています。2022年度からは全学に受講生の範囲を広げ、前期教養課程を含めた様々な所属の1期から6期までの受講生が活動しています。OEGsを目指す志のもと、専門分野や学年の異なる受講生どうしが集まり、交流がうまれる場にもなっています。

カリキュラムを構成する科目「ワン・アースロジー」では、受講生と企業等の方が共に社会の実課題に取り組み、解決方法を提案する「実学研修」を実施しています。また、受講生や社会人がフラットな立場でディスカッションを行う「One Earthology Seminar」をはじめ、産官学で取り組む多彩なOne Earthology協創の場を次々に企画、開催するなど、産官学の協働により、農学の知見や技術を活かしたSDGsの実現に資する人材の育成に向けた活動を積み重ねています。

活動の詳細についてはウェブサイトやFacebookページもご覧ください。

(One Earth Guardians, 地球医, OEGs, One Earthology, ワン・アースロジーは東京大学の登録商標です)



(1) ハラスメント等相談窓口

近年、学生及び教職員の精神的な病やハラスメントに関わる事案が増加していることに鑑み、本学での対応とは別に研究科独自に以下のような複数の窓口を設けて対応している。

- 弥生ほっとライン（農学生命科学研究科・農学部の倫理相談窓口）
- 農学生命科学研究科ハラスメント等対策室
- 学生相談窓口
- 留学生相談窓口

(2) ダイバーシティ推進室

農学生命科学研究科では、国籍・性別にとらわれず、すべての人が尊重され、その個性と能力を十分に発揮する環境を整える努力をしています。「大学に行くのが楽しい」とすべての人が感じることを目指して、日々改善に取り組んでいます。

東京大学において、男女の比率の不均衡は大きな課題です。現在、農学部の女子学生の割合は約25%、農学生命科学研究科の女子学生の割合は約35%です。これら女性比率の改善に向けた活動をサポートしています。



2000年に第1回の自己点検・評価を完了し、ただちに外部評価に着手した。外部評価委員会には国内の有識者（8名）のほかに、国連大学のファンヒンケル学長も参加した。2001年3月の外部評価委員会は、教職員のみならず、学生との意見交換会を行い、研究教育の現状を余すところなく報告し、各評価委員から意見をいただくとともに、その結果を報告書にまとめた。その評価結果は、現在の研究科・学部の活動をおおむね支持していたが、一部の施設や研究スペースが不足、および老朽化していること、産業界との連携強化の必要性などの改善も求められた。

それらの意見に基づき、改善策を講じるとともに、2002年度には農学運営諮問会議を設置し、継続的に外部の有識者からの意見を求めている。2006年度には更なる活動強化に向けて、研究科内に再び自己点検評価委員会を設置し、広範な自己点検作業を開始した。

本研究科では、1991年から隔年で「研究者紹介」（当初は「年報」）を刊行していた。2003年度からは、ホームページ上で「研究者の紹介（研究者紹介データベース）」（<https://www.a-u-tokyo.ac.jp/researchers/index.html>）を公開した。このデータベースから、研究科・学部に所属する教授、准教授、講師、助教、助手の氏名、学齢、職歴、研究活動、教育活動、社会活動等々の個人情報に加えて、過去5年以上の研究業績のデータを蓄積・検索できた。現在、このデータベースから、日本の研究機関に所属する研究者の共通データベースであるresearchmapおよび研究活動を平易な言葉で説明した教員カタログ等への移行を進め、これらを自己評価等に活用していくための作業を行なっている。加えて、2011年度以降は上記データベースのうち各研究者の教育・研究に関する業績を年報としてまとめ、原則として隔年での刊行を続けている。

なお、研究科の附属施設においても、自己点検活動は活発化しており、年報やニュースレターが刊行されている。



東京湾砂浜海岸での魚類相調査
（写真提供：生圏システム学専攻）



牧場実習の風景、ウマとの触れ合い第一歩
（写真提供：獣医学専攻）

17 予 算

(1) 収入・支出（科研費は含まず）

（2022年度決算期：含 附属施設）

収入

科 目	決算額（千円）
授業料	733,011
入学料及検定料	124,139
学校財産貸付料	72,419
寄附金受入	571,730
産学連携等研究収入	2,845,665
家畜治療収入	609,400
農場及演習林収入	104,461
刊行物売払代	345
その他収入(雑入等)	31,670
計	5,092,840

支出

区 分	決算額（千円）
人件費	1,649,718
物件費	3,647,551
計	5,297,269

※常勤教職員人件費除く（本部予算より支出のため）

(2) 外部資金等受入状況（含 附属施設）

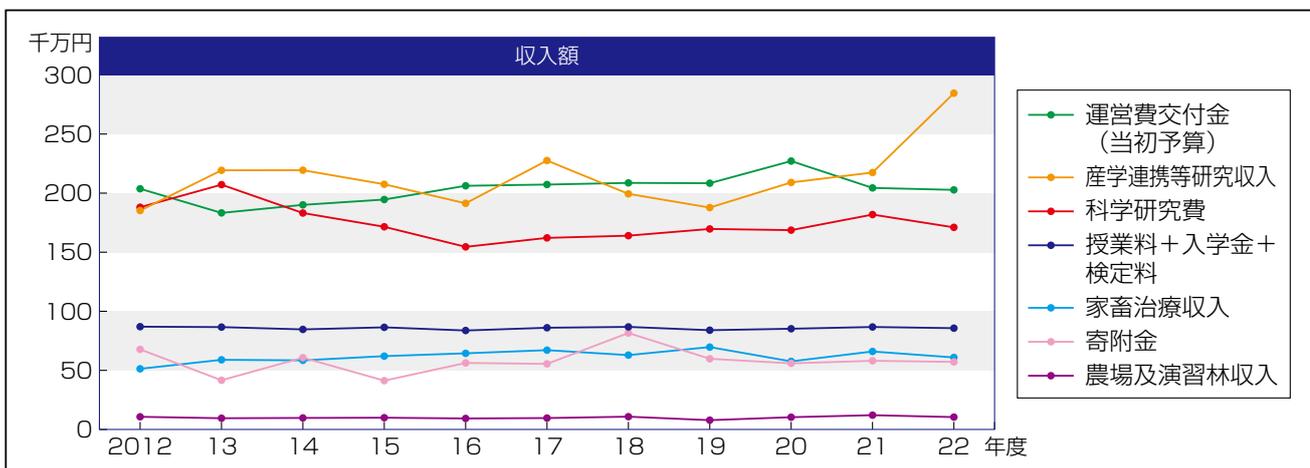
（2022年度）

寄附金受入		科学研究費		受託研究		預り補助金		民間等との共同研究	
件数	受入額（千円）	件数	受入額（千円）	件数	受入額（千円）	件数	受入額（千円）	件数	受入額（千円）
196	571,730	374	1,710,379	128	1,951,238	15	276,519	124	617,908

(3) 収入／受入合計額の推移（含 附属施設）

（単位：千円）

年度	授業料 + 入学金 + 検定料	寄附金	産学連携等 研究収入	家畜治療 収入	農場及 演習林 収入	科学研究費	運営費 交付金
2018	867,923	816,227	1,993,899	629,091	108,132	1,639,940	2,086,666
2019	839,892	598,196	1,877,794	697,039	78,571	1,696,882	2,083,980
2020	852,306	559,448	2,090,478	576,070	103,580	1,777,956	2,271,389
2021	867,201	581,142	2,182,070	659,780	120,950	1,818,595	2,044,164
2022	857,150	571,730	2,845,665	609,400	104,461	1,710,379	2,027,546



本研究科・学部では、学生及び教員・職員へ情報を提供する目的のほか、研究・教育内容の紹介など外部への広報活動のために、以下のような定期刊行物等を出版している。

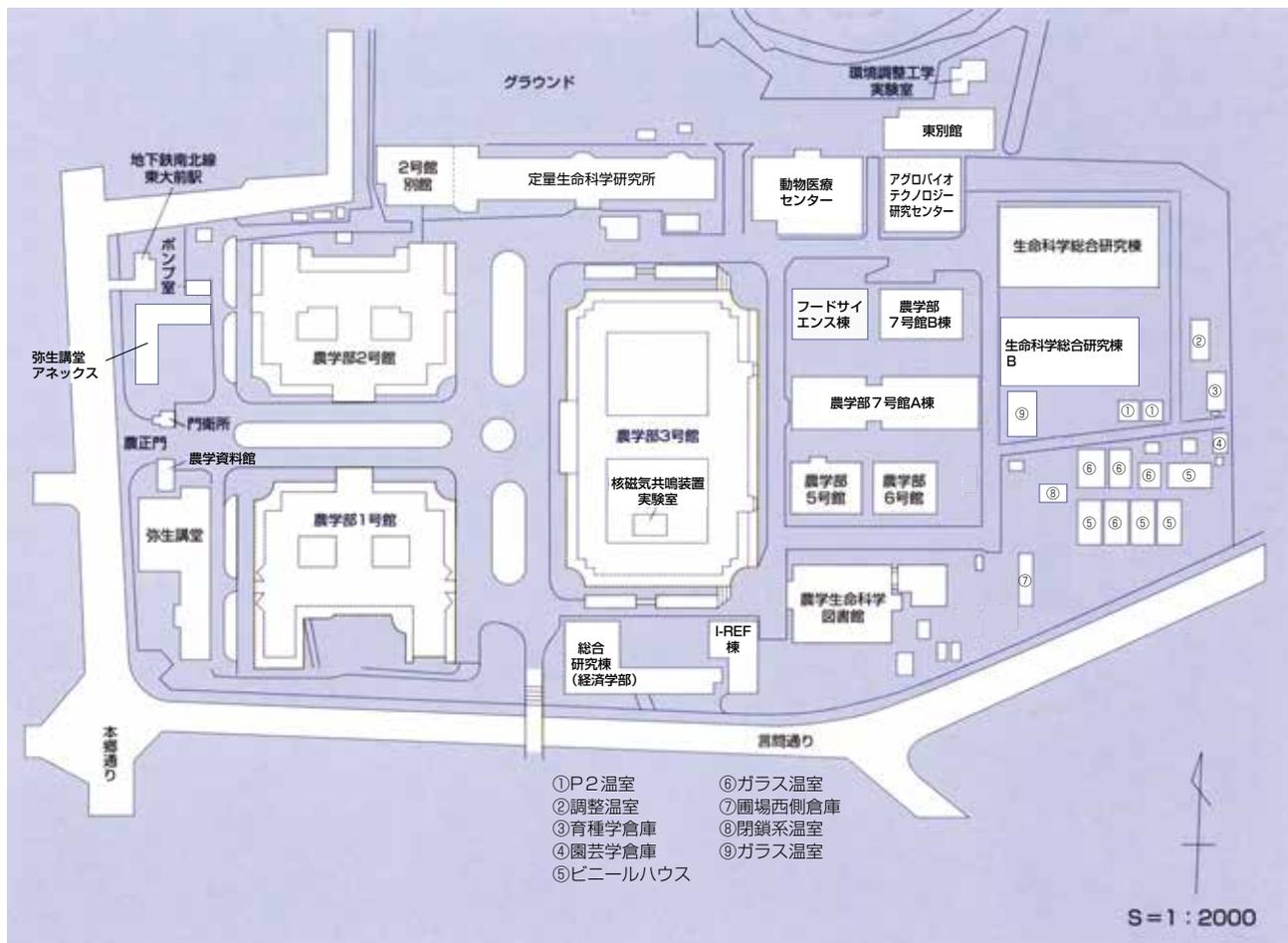
(1) 刊行物一覧

名称	発行回数	発行部数	主な配布先
大学院農学生命科学研究科・農学部概要	年1回	1,000 (2020年度と 2021年度は700)	教員・職員、来訪者
大学院農学生命科学研究科・農学部英文概要	不定期		外国人来訪者
農学部便覧	年1回	800	学生・教員、他学部
農学生命科学研究科便覧	年1回	1,800	学生・教員
農学部授業時間割	年1回	1,000	学生・教員、他学部
弥生（農学部広報誌）	年2回	6,000/回 (2020年度～ 2022年度は 4,000程度/回)	教員・職員、他学部、他大学、来訪者
農学生命科学研究科技術職員研修会資料集	年1回	200	教員・職員、他学部、他大学
21世紀を担う農学（進学ガイダンスパンフレット）	年1回	3,000	学生・教員
学生によるガイダンスブック	不定期		学生・教員
演習林概要（全演版）	隔年	日本語版1,000 英語版 500	学生、教員、職員、来訪者、演習林 Webサイトで公開
演習林概要（各地方演習林版）	隔年	日本語版 各700～1,000 英語版 各30～110	学生、教員、職員、来訪者、演習林 Webサイトで公開
演習林年報	年1回	150	教員・職員、他学部、他大学、 UTokyo Repositoryと演習林 Webサイトで一般公開
演習林	年2回	700 (印刷版年1回)	UTokyo Repositoryで一般公開。 教員、他学部、他大学に2号 合本の印刷版を配布
東京大学農学部演習林報告	年2回	700 (印刷版年1回)	UTokyo Repositoryで一般公開。 教員、他学部、他大学に2号 合本の印刷版を配布
morikara	年2回	1,600/回	教員、職員、他大学、演習林Webサ イトで公開
演習林への進学ガイド	年1回		PDF版を作成し、演習林Webサイ トで公開
附属演習林技術職員等試験研究・研修会議報告	年1回	300	教員、職員、他大学
浜名湖を巡る研究者の会	年1回	100	教員・職員、他学部、他大学
農学部公開セミナー 講演要旨集	年2回	200程度/ (回による) (2020年度と 2021年度は Web掲載のみ)	セミナー参加者
放射線育種場共同利用研究報告集録	年1回	100	教員、利用者、他大学
農学生命科学研究科・農学部研究者紹介データベース（研究者の紹介）	随時更新		HPからの一般公開 https://www.a.u-tokyo.ac.jp/
農学生命科学研究科・農学部 教育・研究年報	隔年		教員・職員、来訪者
生態調和農学機構年報	年1回		UTokyo Repositoryで一般公開
生態調和農学機構紹介パンフレット	不定期	6,000	教員、職員、他学部、他大学、来 訪者
食の安全研究センター紹介パンフレット	不定期	1,000	教員・職員、来訪者
VMC News Letter	不定期	2,000	教員・職員・寄附者、他動物病院

(2) 公式ホームページなど

・農学生命科学研究科・農学部

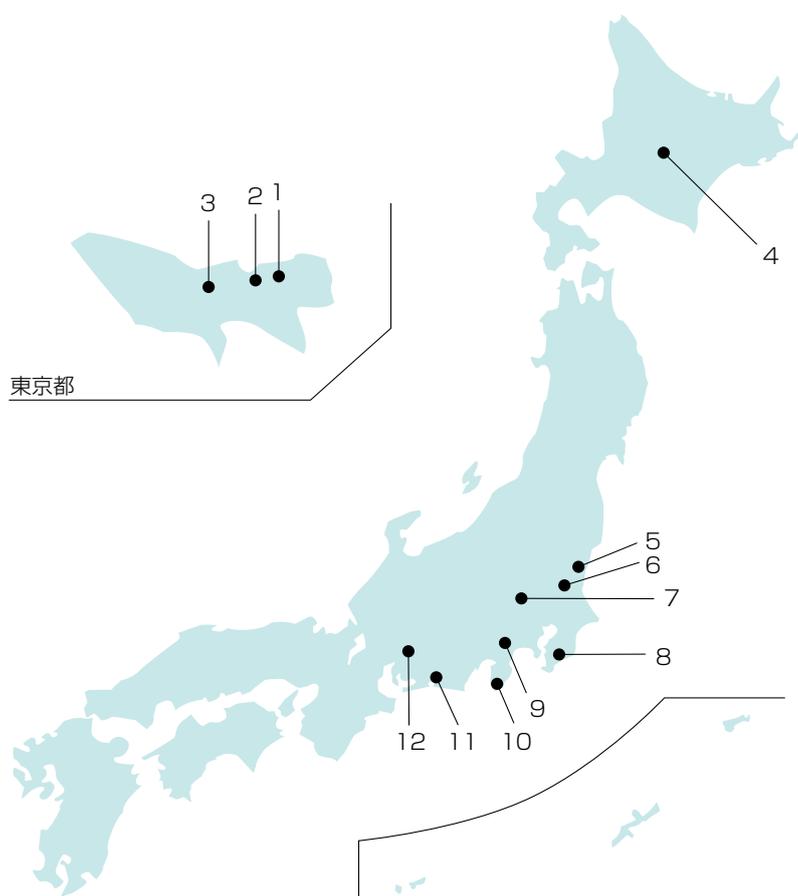
<https://www.a.u-tokyo.ac.jp/index.html>



農学生命科学研究科・農学部配置図

附属施設等分布図

1. 弥生地区
2. 小石川樹木園
3. 生態調和農学機構・田無演習林
4. 北海道演習林
5. 放射線育種場共同利用施設
6. 牧場
7. 秩父演習林
8. 千葉演習林
9. 富士癒しの森研究所
10. 樹芸研究所
11. 水産実験所
12. 生態水文学研究所





東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部

Graduate School of Agricultural and Life Sciences / Faculty of Agriculture, The University of Tokyo

【発行】 東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部広報室
〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1
TEL.03-5841-5484
HP <https://www.a.u-tokyo.ac.jp/>